

361.1
Ts26

361.1-Ts26ウ
1200700557772



始





エトV.9

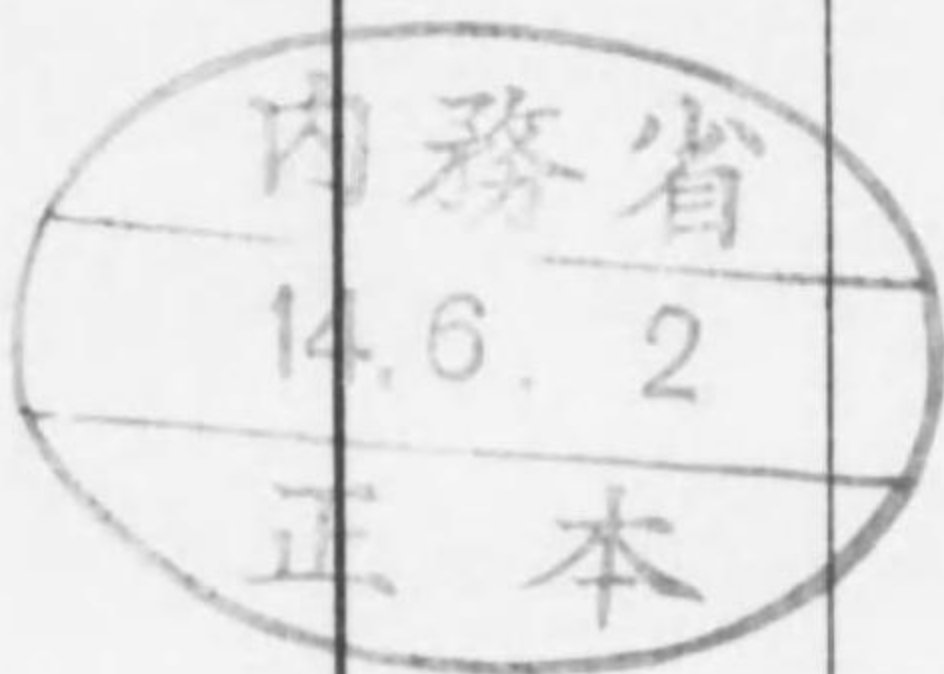
禁安125



事務官印

圖書課長

361.1
T8
2



土田 杏村 著

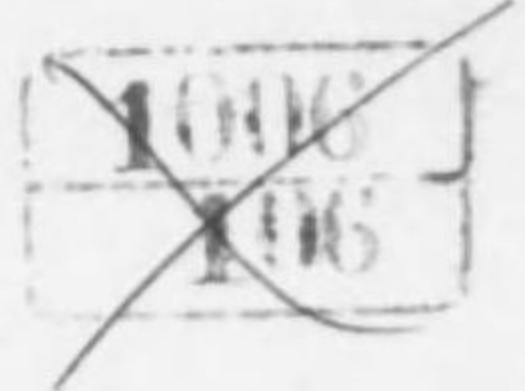
社會哲學原論

内外出版株式会社發兌



361.1
Ts Zb (7)

社會哲學原論 目次



序論.....三

第一篇 社會的現實の必然的推移と
其れに内在する理想的動向.....九

第一章 現代社會の生活.....二
地盤改作の人間工事——個々活動のデモクラシイ——經濟生活の畸形的發達——
—生活低下と現代人の憂鬱——現代社會の生活不安

第二章 世界改造の大勢.....三〇
改造問題の信望失墜——新世界の待望——歐洲經濟の復興如何——獨逸賠償への信賴——國際聯盟と華府會議——勞働者の勃興と其の新要求——勞農露國の實驗的刺戟——社會改造は避く可からず

第三章 世界秩序變化の原因……………七

世界混沌の原因——英國の經濟生活基調——大戰による戰前公理の壊滅——生活の混沌と文明——資本喪失の危険——労働者の自給——人間性の破壊——個性的地方的要求の減却——地方的自律と國家組織——大工業主義

第四章 現今社會人の人生觀……………九

人生觀の内容——價値の轉倒——道德意識内容の分析——社會概念と人生觀——近代の産業文明の得失——近代人の教育理想——世界の改造

第二篇

社會理想論に於ける理想主義的理念と社會主義的理念……………二七

第五章 理想主義とマルキシズム……………二九

理想と唯物史觀——理想の本質——理想とユウトピア

第六章 文化生活と人格權……………三四

劃一と個性——生命と享樂——文化生活的充實——労働權、労働全收權、生存權——人格權

第七章 社會の理想的形態……………三〇

理想社會——社會組成の根本理論——社會機關の濃淡性——聯合體と共同社會——複合的社會論への誤解——集中主義と地方主義——地方自治の迷夢

第八章 政治機關の根本形態……………三二

社會組織と政治形態——所謂デモクラシイの選舉論——現在選舉制の批判——地域選舉制と機能選舉制——政治の腐敗と政治教育——政黨と其の腐敗の原因——政黨成立の根據——地域的政治と現在政黨——政黨政治の危機——政治機關の役員の法的性質——名代と代表

第九章 經濟制度の根本形態……………三五

生産と消費の組合組織——貨銀制度の廢止——動産奴隷と貨銀奴隷——生産者組合の組織——消費者組合と最高經濟會議

第十章 國家の本質……………二二七

現實國家の二つの見方——一元的國家哲學——國家形式と資本主義——アナアキストの權力批判——理想態と現實態——聯邦的國家形態——精神的集團意識と國家

第三篇 社會理想實現の根本的形式……………二五一

第十一章 改造方法の根本義……………二五三

價值學と政策學——價值主義の改造方法——價值主義と人道主義——唯物史觀の必然論——法則主義の硬化——心的改造と物的改造——人間質改造と制度改造——心意と制度の相對關係——客觀的制度的意味的改造——制度の機械性の整序——人間性の信頼——理想主義的方法規準

第十二章 漸進か革命か……………二六七

何を意味するか——價值に於ての漸進と革命——政治力の把握と革命——革命

の經過と漸進的動力——革命に伴ふ社會危機——テロリズムの問題——暴力の道德性——暴力の消極と積極——革命に際してのテロリズム——既成文化の破壊——人格の上への強制——レニンの演説——革命成功の至難——改造方法の第三途

第十三章 無産者の獨裁……………二七三

無産者獨裁の意義——革命と獨裁——政治運用と獨裁——議會主義の中の獨裁——政治的決定力の爭奪戰——革命の過渡期と獨裁——理想と過渡期の意義——獨裁主義の弊を救ふ途

第十四章 政治運動と直接行動……………二七六

改造方策の第三途と現實——現在の議會と政界革新——選舉運動と無産者——普通選舉の價值——背景としての直接行動——政治運動の兩端

第十五章 實際的綱領の建設……………二八二

現實と典型的社會——社會構成原理への順應——直接行動と分離主義——實際

第四篇 文化諸形相に於ける社會理想の實現……………三六三

第十六章 現今の教育……………三六五

教育の根本として——労働學校——文化的教養と職業教育——教權と教育の低質——教育の機會のデモクラシイ——教育概念の革命——商業主義より共同社會主義へ——教育の自治——労働しつゝ學ぶ學校——成人教育運動の前途

第十七章 現今の藝術及び宗教……………三九三

藝術及び宗教と社會主義——所謂無產者藝術の問題——藝術文化の獨占——眞の無產者藝術——文壇的作家の商業主義——藝術の社會化と民衆生活——民衆藝術と社會的自覺——兒童文藝の更改——民衆の無宗教時代——宗教的著作流行の眞相——宗教家の所謂社會的活動——社會否定と宗教否定——宗教の本質と社會問題

第十八章 現今の政治……………四三二

政治の遊離——明治時代と軍國主義——産業的構成と道義心——明治の理想と大戦後——既往の政治と我々の政治——人口問題と農業問題——教育保健其の他の問題——新分子の聯盟

第十九章 現今の經濟……………四五二

生活に於ける經濟の地位——物質的基礎の豊醇——生産作用の自律——消費と生産との社會的平等性——國民經濟單位——經濟生活の現實的機械性——政治よりの支配——國際的通商の強制——生活享受の粗惡——労働に於ける創造性の缺乏——現代産業文明の浪費性——鑛山と水力電氣——戦争による文化の破壊——全民衆への課題——生産の藝術性の恢復——生産の道德性の恢復——生産の社會的統制——國有論の出發點——新らしき産業文明——國民的經濟生活の根本義——食糧政策——動力政策と原料品政策——産業政策——對労働組合政策

第二十章 現今の労働運動……………五二五

労働運動の現代的意義——労働運動の第一期と第二期——道德的政治的より社

會的經濟的へ——同盟罷業の道德性——協調的方法の三種別——労働組合相互の協調問題——労働組合と一般公衆との協調問題——労働運動の經濟的諸方策——労働運動の政治的意義——支配政策と自由政策

第二十一章 現今の國際政策……………五三六

國際主義への展開——戦争と原始的本能——將來の戦争——戦争を廻避する諸列強——國際主義への地理的障害——國際的精神の本質——労働者と國際的精神——國家の三様なる經濟的形態——米國の軍國主義——平和への途

第二十二章 結論……………五五九

生活價值標準の創建——秩序の安定形式と新精神的視野——世界的孤立の問題
國際理想主義——古典と傳統——評論の事業

(目次終)

社會哲學原論

Eine neue Bezeichnung und eine neue Lösung des Grundkonflikts zwischen „Freiheit“ und „Form“ ist damit gegeben. Im Begriff der Autonomie hebt sich der Gegensatz auf, der zwischen beiden Momenten bestand.

E. Cassirer, Freiheit und Form, 1922, S. 237.

So angesehen ist nicht eine Art Sozialismus der Idealsozialismus, eine Art Idealismus der Idealsozialismus, sondern der Sozialismus, bis zum Grunde durchdacht, ist notwendig Idealsozialismus, der Idealismus, bis zum Grunde durchdacht, Sozialidealismus.

P. Natorp, Sozial-Idealismus, 1920, S. 191 f.

社會哲學原論

土田杏村著



序論

哲學は人間の理想を批評する科學だ。すべて單なる存在と見えるものが、其の實既に理想によつて構成又は規制せられ、現に理想的努力と争闘し、更に將來、理想との結合を熱心に待ちつゝあることを哲學は我々に教へてくれた。随つて社會哲學は、社會理想の科學である。社會は單なる人類的存在では無い。其れはすべての物理的存在が理想によつて構成又は規制せらる可きである以上に理想的なる成立である。社會は意志を持った人間の結合だ。人間の理想的努力の關係だ。全く物理的壓制的に成立して居ると見える社會的諸關係でさへ、理想との關係を無視しては、既に社會としての成立を持つことが出来ない。だから私は社會を、すべての物理的存在以上に理想的な成立だと言つたのである。社會の本質的部分は、其れの理想だ。理想は社會考察の前提にして同時に目標だ。だから社會理想を批評する社會哲學の仕事は、すべての社會考察の根據

に立ち、其れの最も本質的なる部分とならなければならない。理想は直ちに實踐を豫定する。あらゆる存在が理想を豫定することは、結局はあらゆる存在が、人間の實踐的要求の目的となつたことを意味するが、社會哲學は特に社會理想の人類社會に於ける實現の見地を離れることが出来ない。社會理想の實現とは、即ち社會改造の謂だ。社會哲學の中心問題は、社會改造の其れ以外のものでは無い。

哲學者は在りの儘なる現實的所與の中に理想的關係を求め、其等の諸關係をすべて一元的の根據に返すことを、其の思索の主たる關心にして居る。哲學者とは深く且つ公平に現實を愛し、現實を愛すること深く且つ公平なるが故に其れの根據を求め人のことである。現實の諸關係に就て其の一部を忌避するは、義しい哲學者の取る可き態度では無い。此點に就て私は、現代の哲學及び哲學者に對し、生活者として多少の不滿を持たぬものでも無い。何故なれば、彼等の口からは餘りに乏しく現代の社會的諸關係のことが語られるからである。或るものは、社會的諸關係に就ての考察は哲學の應用的部分であるか、或は生活の最も周縁的なるものゝ考察であるかの如く考へて居るが、哲學者の冒す誤謬として、恐らく其れより大いなるものは無い。單に事實の問題として見ても、我々は日常最も強く社會的諸關係と交渉し、其れに關聯して最も多く思慮し、感動し、欲求して居るに拘らず、其の關係、其の思慮、感動及び欲求の根據に就ての思索に冷淡で

あることが、哲學者としての責務を盡くして居ると言へようか。哲學が、理想を批評する科學たることに自己を見出したのは、畢竟哲學が、人間の實踐的要求と不離の關係に立つたことを意味する。哲學が理想を目的として動いたときに、哲學は人類に自らの人格を求めしめた。此の意味に於て哲學は、廣義の倫理學、其のものであるとも言へる。人格は直ちに社會を要求する。社會を離れて人格は無い。自我の自證とは他我に對しての自我の自證である。他我に對する根本倫理的な要求無しに、自我の自證は無い。然るに他我に對する根本倫理的要求とは、自我と他我とを共同的なる人類的理念への努力によつて結合し、其の理念による共同的制約を自識するの謂であるが、理念による共同的制約のかゝる自識は即ち社會に外ならぬのである。此の意味に於て哲學は更に、廣義の社會哲學、其のものであり、社會哲學たることの歸趨を措いて、哲學の責務は無い。根據を求めるとは、屢々現實からの退隱、社會的實行からの遁逃と解せられて居るが、其れは哲學の理解の中世紀的過誤からまだ完全に釋放せられて居ないものだ。其れだから社會的關心を持たない哲學者を、私は眞の哲學者と呼ぶことが出来ない。

哲學が眞の意味で社會哲學となつたときに、其れは直ちに理想主義と社會主義との結合を策しなければならぬ。然るに理想主義哲學は從來社會主義を自らの敵とし、此れを攻撃することに主たる力を用ひ、其れとの結合を策することに怠つて居た。例へば我國の講壇哲學の生長は最早

決して幼いものではないが、私の周囲を顧みて、其等の講壇哲學者の口から、私は嘗て社會主義への熱心なる歸依の聲を一回も聞いたことが無い。勿論從來の社會主義は多くの誤謬を含んで居た。例へばマルクスの唯物史觀説が屢々歴史の唯理主義的形而上學的解釋に墮する危險を持つたことや、多くの有力なる社會主義者が宗教價值を人生の中より抹消しようとする努力は、眞に批判的なる哲學者の修正を俟つて居る問題である。しかし同じ意味に於ては、カントの哲學も社會的關係を嚴密に批評して居ない獨斷論の誤謬に陥つて居たでは無いか。要するに社會主義諸派に共通であり、且つ其れに根本的要求となつて居るもの、換言すれば社會主義の本質は、社會に於ける共同社會的理念の實現であるとするれば、理想主義哲學は此の理念の根據を自らの上に反省して社會主義とならなければならぬ。また社會主義は、其の思想の偶然的要素を捨て、本質的部分に返り、自らの基礎を理想主義哲學の上に、求めなければならぬ。二つの主張の理想とするところは、互ひに矛盾するものでは無く、全く現代にあつては、理想主義は社會主義となり、社會主義は理想主義となつて、始めてよく其の意義を發揮することが出来るのである。私は既に前著「文化主義原論」の中で、我國の哲學者として恐らくは最初に、理想主義と社會主義との結合の途を考察し、多少の見解を主張して置いたが、本書では其れらよりも、詳細に社會的諸關係に亘り、より體系的に社會に於ける文化的諸系統の交渉を取扱ひ、理想主義化せられた社會主義教説

を論述した。其れが本書に於ける私の中心的事業であつた。

本書に「原論」の語を附したのは、其の批評する主問題が社會理想であつたからだ。社會哲學の内容は、本書に取扱つたところで全部を盡したとは思つて居ない。たゞ其等すべての問題を批評するには、一と度びは社會理想の批評を主題目とすることが根本的に要求せられるから、私は本書の中で考察を成る可く其の主問題から逸らさないやうに努めたのである。私は本書を序論として、今後社會哲學的諸研究の各部分を順次公表したいと思つて居る。其處で取扱ふ題材と及び其れを取扱ふ方法とは、本書に於てのものよりもすべて其の範圍を細緻ならしめることであらう。本書と思索的に直接の關係を持つたものは、前著「文化主義原論」であるから、私の批評の各部分に就き、本書の讀者が更に同書をも参照せられることは、私の最も欣幸とするところだ。私はなほ最初本書に精密な註脚を加へる豫定を持つて居たが、後には本書の紙幅と文體とが寧ろ其の企畫を拋棄することの至當なるを思はしめた。社會哲學の基本的考察に就て、私は一と度びは達意なる評論的文章を以て成る定本を創つて置きたかつたのである。本書は其の目的に應じたものである。今後順次に公表する豫定の社會哲學的諸研究には、本書の悉くすを得なかつた問題の考察と及び其の考察の爲めの資料的註脚とを含め、以て本書の缺を補はうと思つて居る。

第一
篇

社會的現實の必然的推移と
其れに内在する理想的動向

第一篇 社會的現實の必然的推移と 其れに内在する理想的動向

第一章

現代社會の生活

一 地盤改作の人間工事

デモクラシイなる語は、歴史的に或る固有の政治思想を意味して居るけれども、今すべて其等の歴史的傍景を除抹して、此れを其の本質的なる、或は論理的なる正面像に於いて認識するとして見る。然る時に我々は、デモクラシイをば或は社會主義、或はアナキズムに對しての一政治思想であるとは考へない。否寧ろ社會主義やアナキズムやは、論理的なる意味に於てのデモクラシイへの徑路に横はる、其れぐの一飛び石であると稱す可きであらう。

併し歴史の意味に於ては、此の關係は全く逆であり、社會主義はデモクラシイへの一叛逆である。從來屢々行はれた——又嘗て我國の學界に於ても行はれた事のある——デモクラシイと社會

主義との關係論は、右の如くに解釋して何等の不當を見ない。論理的意義のデモクラシイは、我々人類のすべてが其の生活の様式を選定する高尚なる標準だ。

然らば眞の意味の、換言すれば概念の正しい論理的意味のデモクラシイとは如何なるものであらうか。デモクラシイは人類史の開展に於て、一人による他人の征略を許さない。すべての個人は皆な其れに本質的なる人格の光輝に於て評價せられ、絶對目的の依憑點として信頼せられる。人格は其れ自體測定の座標軸交叉であり、更に人格を測定す可き何等の標準をも見る事が出来ない。我々は哲人カントと共に、人格をば目的として取扱ひ、此れを手段として取扱ふもので無い。人間は自治し、自律する。他人の征略を必要とせず、自己の他律を罪惡と感ずる。良心の發揮とは人格の自由に向つての精進である。普遍妥當の理想は、深刻に自己を解剖して、目的の王國への超脱を教へて已まぬ。人格自律の社會表現は、即ちデモクラシイの具象結體だ。

斯様に認識せられたデモクラシイは、私の文化主義と其の間何等の相違をも見ない。此れを内的に認識して、人格價値の品質の中に透入すれば文化主義となり、此を外的に對抗して、人格自律の反撥性を形象化すればデモクラシイとなる。二者其の名を異にして其の實を一にする。

人間奴隸性の歴史は古い。恐らくは人類發達の當初に於て其處には我々の忌む可き奴隸が存在して居た事であらう。我々は無條件的に希臘文化の美を讚美する事が出来ない。彼に於て學藝文

物は燦然たる光を放つた。市民は飽くまでもデモクラティックに其の人格を維持し、其の獨立性を侵害せられる懼れが無かつた。希臘の市民は自由の美酒に酔うた。しかも此の如き市民は、希臘全領土の人間の何割を占めて居た事であるか。自由は全人類の自由で無かつた。デモクラシイに限度があつた。市民は精神文化の高尚なる陶醉に入る事が出来たにしても、彼等市民を物質的に支持し、彼等をして自由に精神的文化の建築に専心ならしめたものは何であつたか。今や我々は希臘文化に於ける奴隸の地位を無視する譯にいかぬ。市民は奴隸を手段とし、材料とした。ひたすら貪り征するものは市民であり、ひたすら生産し供給するものは奴隸である。人類の生活を劃して、儼然たる機械的一線がある。何人も此の一線を社會の本質的實在と信じて疑はず、すべての習慣と道德とは、此の虹影を基線として築かれて行つた。

何人か希臘の社會をデモクラティックであると呼ぼう。其處には人格の物質的化骨がある。人間の手段的改容がある。希臘の社會は如何に高等なる文化の表現を持つとしても、其處に人間の公平なる自由は存在したと言へない。我々が希臘の社會を呼んで舊様式の模型によつての形成といふに、何の躊躇があらうか。

現在の資本家國家が、又此れと同じい幻夢の建築に當つて居る。資本家は征略し、勞働者は搾取せられる。人間立脚の地盤は既に傾斜し、陥没して居る。此の上に立つてすべての人類の舞踏

平等を叫ぶも、我々は一層根本的の事業として、寧ろ地盤改作の土木工事を營まねばならない。少くもデモクラシイは現在に於ける地殻表面上の原理では無い。

デモクラシイの將來に黎明は來ない。人類史の汚濁は容易に拂拭せられない。

二 個々活動のデモクラシイ

此れだけの事は生活評價に對する現代人の常識だけれどもデモクラシイの問題は單に其れだけで盡きては居ない。我々は問題をもつと具體化しなければならぬ。此れを具體化して、精神の裸面への焼付けにしなければならぬ。デモクラシイは、社會構成に際しての個々人關節の原理に止まる可きで無い。賊は心の中にある。社會は個體批判力の投射だ。我々は問題を深化して、デモクラシイをば我々の心的葛藤、心的協和の相の上に擴大承認する事が必要である。

個々觀念は互に群體を作つて交替代謝する。其處に觀念群が構成せられ、又觀念團が凝結せられる。心的視野に並列した觀念群觀念團は、社會團内に連結したる個々人に相當する。社會人が爭奪し、征略する如く、觀念群觀念團も亦激烈に消長を争ひ、存否を競ふ。觀念争闘の修羅場に我々は再びデモクラシイの原理の適用せらる可きことを思ふ。

人間の行動は無限の方向を持ち無限の晶面を見せて居る。其れ々々の晶面は、人格の其れ々々の結晶軸に對して正しき比率を示す。我々の行動の何れの方向でも、單に無意義に象形せられたものでは無い。一の行動は他の行動の上に征略する事を許されぬ。我々の人格が他の何物かの手段となり、材料となり、他律的に規定せらる可きで無いとすれば、其の人格構成の一煉瓦となつた生活の各部分も亦、其れ々々に人格の負荷責任者として、自律し獨存しなければならぬ。

一つの活動の方向は、他の何れの活動によりていも限定せらる可きで無いといふことは、其の一つの活動が、普遍妥當的必然的理想を追求するものなるを示す。若し其の方向の無限遠點が普遍妥當的のものでなかつたならば、其の方向は其の方向自身の價值を有する事が出來ず、結局單に主觀的のものたるに止まり、何等か他の方向によつての限定を受けるであらう。又其の方向の究極點追求が必然的のもので無かつたとすれば、其の精進は偶然的のものであり、人格斷面圖として有るも可、無きも可の挿畫たるに止まる。此の故に活動の追求は、其れ々々に價值ある一の人格活動だ。人格活動全體が一の自己目的なる精進である事は、要する所、其の各部分の活動が其れ々々に自己目的なる精進を爲す結果である。腦髓は腦髓、皮膚は皮膚として其れに固有の機能を營み、其の全體統一は有機體の活動となる。人格活動も亦此の如し、我々の活動は、其の一つとして、他の活動の專制治下に立つ可きで無い。

我々の個々動作に就き、又其の動作の對象物に就き、其れが人格運動の何れの部分を占めて自

己目的々なるやを反省するは、事容易なるに似て實は容易の事業で無い。我々は屢々此の反省を誤まり、爲めに我々の生活の一部面を枯渴死滅せしめる。恰かも人體に病ひある如くである。自己目的々で無い活動は、生命では無くて物質だ。切れども其處に鮮血を見ない。即ち我々の人格活動の一部に死したる結核菌の介在する事となる。併し我々の動作と及び其の對象は、汽車沿線の驛の如きものであつて、如何に大いなる積雪の爲めに其の鐵道は見えない様になつて居たとしても、驛は鐵道に沿ひ、鐵道は某方向に向ふ事は確かである。反省は其の積雪を拂つて方向ある軌道を發見する事だ。

真理の探求は藝術、道德乃至政治によつて影響せらる可きで無い。死體解剖は醜の暴露であつても、生理學者の真理探索には避く可からざる道程だ。國家組織の批判は現在社會の安定を擾すとするも、社會輿論によつて政治學者の理想態推及を阻止すべきで無い。同様にして藝術家の事業は道德標準や真理標準で測定せられぬ。裸體畫の美は社會の常識道德に多少の混亂を與へる。花鳥の寫生は博物の標本圖譜では無い。此くして真理と藝術と道德と、其れ々々に自己目的々の精進を續ける。此の精進の究極理想を我々は價值と呼ぶ。すべての活動及び其れの對象物が此の精進の一線上に置かれた時、換言すれば其等が價值の觀點より見られた時、なほ換言すれば其等が單に手段的の死物と化せず、價值追求の人格活動に一飛び石となつて生きた時、其等の活動と

及び其れの對象物とは、我々の所謂文化を構成する。即ち文化は人格の自由なる所産だ。人格の觀點に立つて言ふ場合には、人格が自由に文化を生産し行く無限努力を私は文化主義といふ。文化主義は自然人ならぬ自由人の必ず基準とせねばならぬ人生信仰である。

三 經濟生活の畸形的發達

文化主義は人生行程上のデモクラシイ的表現である。其は人格活動のすべてを死物と化せしめず、其の總てを燃焼して、人類の高き、神聖なる共同世界を建設しようとする。

すべての活動はラシヨナリズムの專制より解放せられた。すべての生命は經驗論の拘泥より超越した。文化の曠野は人格の自由視野に暉々として展開せられる。

併し見よ。其の視野は直ちに現代人の其れでは無い。現代人の生活展望は鬱屈して遠視が利かぬ。真理と藝術と道德とは互讓する事を知るけれども、其の代りに此の三者は強大なる大國聯盟である。眞善美の三者は人間の生活展望に優勝なる地位を占めて文化圏内のものとなつて居るが、是れが爲め他の小國領域は、すべて其の三者の專制治下にあつて搾取せられる悲劇を演じた。大國はひとり高尚なる文化であり、小國は此れに手段と材料を供給する犠牲である。生活は分裂を起し、搾取者と被搾取者と其の間に明瞭なる一線を劃した。然らば所謂專制治下の被搾取者と

は何であるか。其の中には甚だ多くの名稱が含まれようけれども、私は今此の如き小國の適例として我々の經濟活動を擧げる。

經濟活動が眞善美の活動によつて搾取せられて居るといへば、聞く人は此れを甚だコントラデクトロイの表現だといふに相違無い。何故なれば現代社會の事實は寧ろ其れの反對に、我々の經濟生活が眞、善、美の生活を壓迫する如くに見えて居るからである。無論事實はさうである。併し私は此の事實の意味を反省して、説明は寧ろ其の反對に、高尚なる三文化範圍が經濟生活範圍を壓制して居たといふ。何故に然かいふか。我々の經濟生活は、他の三文化範圍の如くに自己目的々の活動となつて居ない。其れは單に他の生活の踏臺にせられた。經濟活動は、此れを追求して究極に達しようとするも、其の活動を誘導するものは普遍妥當性と必然性を持たなかつた。經濟活動は欲望活動である。それは欲望に出發して欲望の満足に終る有限線である。眞善美の價值追求の如き無限直線では無い。

我々の經濟生活は甚だ畸形の發達を遂げた。其の徑路に於て多少は正しい基準線へ近接した事があつたけれども、全體として經濟生活だけは他の人格生活から除け物にせられ、ひとり苦しい不愉快な道程を續けるより外は無かつた。而して此の畸形は今益々其の程度を増大しつつある。經濟生活が他の文化生活を壓迫するのでは無く、他の文化生活が經濟生活を踏臺にし、卑劣者た

らしめて來た結果、經濟生活の畸形發達となり、其の畸形の増大は今逆に他の文化生活を脅かし、主宰者としての人格の生存をさへ危険のものにした。此の畸形を匡正しなければ、人類は其の社會の全建築を擧げて壊滅し去る運命を招致する。

我々日常の經濟生活なるものは如何なる豫定線上を動いて居るか、少しく反省を加へて見るがよい。他の文化生活は其れ自身自己目的々の活動を營むが故に、價值の追求は直ちに人格の満足である。追求自身が人格に意義を加へるのである。然るに經濟活動だけはさうした自律性と自己満足を持たない。我々が銀行にあり、會社にあり、はた農圃にあつての活動は、銀行自身、會社自身、はた農圃自身を興味集注の十字角たらしめない。何物か其處に介在物がある。銀行と會社と農圃とは、直ちに我々の活動興味の中心點たり得べき事を我々は内省し想像し得るにも拘らず、實際生活は却てさうした想像の幻夢を破壊して了ふ。其の幻滅に疲れて、我々は今全部的に經濟生活を否定しようと思ふに至る。

經濟活動は直ちに生産、消費、流通の活動では無かつた。經濟活動の基底を定めて居る貨幣は、直ちに生産、直ちに消費を代表しない。經濟とは利益を得ることだ。貨幣は、其の適當のシムボルだ。我々は直ちに生産に悅樂を感じ、直ちに消費に自我の擴大を味識しようと思つても、生産も消費も其の悅樂其の味識とは何等の緣故の無い外的闖入者により計畫せられて居る。現在

の所謂經濟活動とは此の外來の異神に敬禮を捧げる事である。

何人が其の異神を排斥して、經濟活動の獨立戦を開いたならば、現在の畸形は幾分其の姿を小さくするかも知れぬ。併し兎に角我々は現在のところ此の畸形の經濟社會に生活して居る。多くの經濟人は自己の畸形を忘れて了つて、經濟生活とは本質的に此の如きものだと思つて居る。そして經濟生活は飽くまで卑俗なる手段的のものであり、自己の生存意義は他の文化生活の中に見出す可きものだとして居る。例へば晝の間は苦痛なる銀行の事務を取つて、飽くまでも自己の人格を虐待し、夜は音樂會へ行つて名曲の彈奏に陶醉して居る。經濟生活は自己の文化生活を安定ならしめる爲めの踏臺であり、人間の人間らしい生活は眞善美三文化範圍の上だけにある。眞に生き甲斐を感ずる時間は單に手段的に使はれて、何等の生き甲斐をも感じない時間の何十分のしか無い事になつた。高尚なる三文化範圍への要求を忘れ得ないで居る人は、銀行に會社に其の事務を取るごき、農圃に漁場に其の生業を營むごき、愈々自己の生き甲斐少なきを自覺して、其の生活の分裂に悩んで居る。併し其れは甚だ尠少の部分である。他の多くの人は今此の如き分裂に悲しみを持たなくなつた。其の生活を不合理だと氣附くことさへ無くなつた。此の如き無反省人の半數は、生活とは此の如きものであると迷信して、ひたすら畸形の壓迫に喘いで居る。又他人の半數は、却て積極的に其の畸形的の經濟生活を押し進める事自身に悅樂を感ずる様になつた。現

代の社會人は、以上の如くにして明かに其の上に四種の區劃を生じた。其の一は、兎に角三文化範圍の追求が直ちに其の生活費の供給となつて居るもの、例へば一部の藝術家。其の二は、文化範圍の追求を欲するも生活費を得る手段として畸形經濟生活に入らざるを得ず、生活の分裂に苦しむもの、例へば教育ある若き銀行員會社員。其の三は、文化範圍への參與の如きは最初より此れを問題にして居ないが、經濟生活の畸形發達に悩まされて自己の生存さへも劫かさるゝに至つて居るもの、例へば大多數の勞働者。其の四は、文化範圍への參與は考慮の外であり、却て經濟生活の畸形發達を進める事に悅樂を見出し、孜孜として此れに勉勵し、よし他の文化範圍例へば藝術の如きに悅樂を見出す事ありとするもの、此れを自己目的々のものと見ず、其の究極理想を快樂であるとして、文化活動の無限線を有限線に化しせしめるもの、例へば大多數の商人。現代社會は此の四種の人間を以て構成せられて居る。今其の第一のものを目してひたすらに自己目的々の活動を營むものと爲したが、其れは單に比較的の言葉であり、經濟活動の畸形發達は、現代の社會に生存する何人をも、其の野蠻宗教により多少ながら洗禮する事無しに已むものでは無い。ウイリアム・モリスは文明國における勞働の状態に隨ひ社會に三つの階級を分けて、第一は外貌的にさへ仕事をしないもの、第二は外貌的には仕事をして居るが其の實なんらの生産をも爲さないもの、第三は仕事をして居るが其の仕事は前二者の階級により強制せられ、非生産的のことに

さへ従事しなければならぬものとして居る。其の標準は根本的に私の其れと違つたもので無い。

四 生活低下と現代人の憂鬱

三文化範圍が自律して、其の活動が自己目的々である如くに、我々の經濟生活範圍は、やはり一の文化範圍を要求して自律し、自己目的々に活動しなければならぬ。現在我々の生活に一潰瘍となつて固着する屍肉は壊滅し去られ、其の潰瘍の爲めに惱まされた全生活の活力が恢復せられなければならぬ。然らば我々の經濟生活が自己目的々になることは如何なる事であるか。生産は生産自身に意義を見出して生産を超越し、消費は消費自身に意義を見出して消費を超越する。其れは恰も思惟作用が思惟作用自身に意義を見出して思惟作用を超越すると同じ根據である。生産が生産自身に意義を見出すとは、我々の勞働が商品となつて賣買せられないことである。生産者の活動が人格者の活動として獨立し、動産奴隷にならない事である。併し同時に生産は生産自身を超越する。其れは生産が主觀的に生産作用自身に溺入せず、客觀的の價值を追求することを意味する。生産自身に意義を認めて、生産は人格化せられ、生産自身を超越して、生産者は客觀的に社會活動の一員を演じ、客觀的に社會により批判せられる。

從來の經濟は勿論此の場合改造せられる必要がある。經濟學は生産者經濟學では無くして商人者經濟學であつた。個人主義的經濟學と社會主義的經濟學と、其の間我々は何等の區別をも置かうとしない。其等は悉く經濟活動の理想を快樂だとした。經濟活動は欲望に始まつて欲望満足の快樂に終る有限直線であつた。經濟學の發達は、倫理學上の功利主義の發達と並行して進んだのである。今併し經濟學のアプローチは人格價值によつて洗禮せられ、經濟活動の進みは、一般の價值追求の其れと同じ無限直線になつたのである。

經濟活動が其の本來の普遍妥當的價值を追求する事が出來ず、生産に消費に、高貴なる人格活動である可きものが他の活動によつて搾取せられ、爲に人間の經濟生活は一の畸形的發達を遂げ、普遍妥當的ならざる主觀的、心理的の、又必然的ならざる偶然的、幻影的の有限的目的を追求した結果は、如何に大いなる程度に現代人の生活を枯死慘滅せしめたか知れない。

生産者と消費者と其の活動を束縛するものは、生産と消費と、其れ自身の意味では無い。生産者は物質を出來るだけ高價に賣つて自己の儲けを増し、消費者は出來るだけ安價に買つて自己の損失を減じ、兩者互に其の生活を安定しなければならぬ。生産と消費と、全く異教の神によつて他律せられたのである。よし此の行動を不當であると知り、人格の品位を汚損するものであると信するものがあつても、——此く信するものも少くは無いが——此の經濟社會に生活する以

上、我々は如何にしても此の束縛を無視する譯にいかぬ。生産者と消費者との間に起る此の奇なる不自由對立は、必然の勢ひとして兩者の妥協を生せしめ、物價は一の平均線上に落ち付くことゝなる。

生産者と消費者との生活價值を決定するものは今は其の物價平均線である。非勞働享樂階級を除外し、一般民衆の生活を標準に取れば、生産は此れ以上高價物を生産せず、消費亦同じく此れ以上の高價物を消費しない。併し其の平均線の兩側には、同じい幅員を以て儲けと損失との幅廣い圍帶領域がある。其の圍帶領域が實に彼等の生活の經濟基礎を保證してくれて居るのである。其れ故に生産者の勞働は出来るが上にも酷使せられ、消費者の要求は出来るが上にも抑損せられる其の圍帶領域の劃線は、物價平均線の上下に益々大いなる開きを以て遠ざかり行く。

現代人は新らしい發明の機械を使用する。新發明は益々其の數を増加して現代人の要求の取るに任せてある。機械を使用するは人間勞働力を補充して其の過重なる使用を避けるが爲めだ。然らば現代人の生活は、此の機械の使用によつて其の勞働をどれだけ減少せしめる事が出来たか。前に擧げた理由により、我々の勞働量は少しも減少して居ない。勞働者の勞働はいやが上にも其の量を増加する。其の過剩勞働は何等人生に意味を爲さない暗黒へ消散する。生産者は時代の進展に伴つて愈々窮地に陥らざるを得ぬ。

他面消費者の側を観察すれば、此處にも亦悲む可き現象が充滿する。我々の周圍を取り巻く衣食住は、先きに述べた理論に隨つて、次第に其の質を低下し行く。質のよいものを要求しても物價平均線は、其の如き優質の貨物の供給を許さない。大部分の人間は極めて粗惡なる衣食住で満足して居る。其れは貨物を安價にした、併し同時に我々の人生を安價にした。我々は何處に住まひ、何物を食ひ、何服を着るにしても、其等のものは餘りに露骨に商品の本質を發揮して、ひたすら粗惡脆弱に、ひたすら外面的散文的である。

生産に於て我々は益々其の勞働量を増加し、消費に於て我々は益々其の衣食住を安價ならしめる。今私は生産者と消費者とを別々の人間の如くに取扱つたが、實際は同一個人が生産者であつて同時に消費者なのだ。しかもなほ勞働量増加の條件によつて酷使せられる生産者は、衣食住安價の條件によつて恐喝せられる消費者と正しく一致する。其れが現代人の生活である。此の生活様相を免れ得る人間が現今社會人の凡そ何百分の一を占め得よう。現代人は悉く一種の憂鬱病の襲ふところとならざるを得ない。しかも其の憂鬱病の根源は何處にあつたか。我々は前既に述べ來つた理由によつて、我々の生活自身の分裂、經濟生活の自律性缺除を其れであると言はなければならぬのだ。

五 現代社會の生活不安

經濟生活は其の本來の自律性を失ひ、異教の神に祭壇を築いた。此れが爲めに我々の生産と消費とは其の極度にまで虐げられて、過重なる勞働に疲れ、粗悪なる衣食住に惱まされつゝある。

其れは全く世界的の文化現象だ。現代の日本、亦如何にして其の時代世相を超越し得よう。

世界大戰によつて著しく膨脹發達したと稱する我が日本の經濟は、實は潰瘍的畸形の經濟其の物であつて、本質的自己目的の其れでは無い。否な寧ろ本質的の經濟生活は其の分量を著しく減少せしめ、畸形的の其れが直ちに彼の領域を奪取したのだ。生産と消費とは病的徴候を示し、生産者と消費者とはひたすら疲勞し、ひたすら散文化せられた。自己目的々の眞善美價值範圍に住まつて、人格の眞満足を得ようと欲するものは、愈々激しく生活の虐待を爲さねばならぬ。實際かゝる生活疲勞生活散文化の他面に於て、學問や藝術の純粹満足を得ようと欲する要求が、現代人の中に強く動きつゝある事は否定出來ない。併し自己目的々なる價值への生活淨化を計らうと欲すれば欲するほど、我々は強く此の如き自己目的々活動と手段的活動との矛盾撞着を意識する。生活の上に明かに一線を劃して、此の線の兩側の明暗を反映對照せしめ、我々は現代生活の墮落に浩嘆せざるを得ない。

日本人は疲勞し易い。一時に熱中して勢力を濫費し、其の歸結を收拾し得ない。勞働量の急激なる増加によつて其の心身を疲勞せしむるは已むを得ないのである。また日本人は詩を好む國民だ。死の床に辭世の歌を詠じ、別離の庭に詩賦を草した。生活の機械化散文化が此の如く速急に其の程度を進めたとすれば、何人か此の世態の進みを呪咀しないで止まう。併し生活は遊戯で無く社會は幻影で無い。我々はたゞ過去の生活を必然の法則に隨つて必然の方向に進めただけだ。一朝にして生活は還元せられず、社會は破棄せられない。我々は此の偉大なる壓搾機の下に立つてたゞ僅かに其の生物的生存だけを維持しようと欲する。生活は不安に襲はれ、社會は憂鬱に閉ざられる。生活の意義を何處に尋ねよう。

疲勞し、幻滅し、憂鬱症を得た日本人が今大道を歩いて居る。彼等の事務、彼等の勞役は、其の弱少の肉體力を消耗して居る。彼等は住宅難に嘆いて居る。其の事務を取る銀行や會社と其の住宅との距離は、汽車や電車の交通機關に依頼してもなほ且つ一時間里程、二時間里程を隔てた。なほ此れを得たものは幸福である。其の幸福なる住宅は粗悪極まる貸家普請であつて、到底我々の精神に安定感を與へるものでは無く、且つ種々なる壓迫と拘束との頻繁は我々の安住を許さないのである。安らかなる睡眠を取つて居るものは無い。衣食住の住既に此の如し、衣と食と、又全く同様に現代人の呪咀の的となつて居る。

人間はロオマンズ無しに生活出来るもので無い。ロオマンズの純なるものは普遍安當的價值への精進である。此の價値を追求し得ない場合は、主觀的の生命表現ですらもなほ且つ多少の悅樂を彼に與へる。或は肉體的享樂に、或は感情的陶醉に、人間は自らの壓抑せられた生命を伸ばす。況んや今日の社會は消す可からざる憂鬱症に襲はれて居る。何れにか客觀的の價値表現を爲し得ないものは、更に不完全なる主觀的表現を以て其のロマンチズムを具現しようとする。併し主觀的具現のロマンチズムは、其れ自身既に偏倚せる生命燃焼だ。加ふるに時代全體は強度の憂鬱症に襲はれての其れである。其の生命燃焼が健全性を缺いて、ヒステリイ症的ロマンチズムの病狀を示すは止むを得ない。

現今日本社會の臨床的診斷によれば、此の如き病的ロマンチズムは此の十年間至るところに望み見られる。病源は深い。病は更に病をつくつて居る。現代人の上を覆ふ濃厚なる憂鬱症は生命燃焼の此の主觀的具現となつたが、更に其等の主觀的具現は、現代社會に客觀的基準を缺く事の心的感觸を與へ、以て人心不安の度を増さしめる。因は果を生み、果は因となつて進む。底止するところを知らない。

改造の必要は今日に迫つた。現代日本の全生活を覆うて憂鬱症の濃霧がある。此の濃霧は世界大戰を経過して濃度促進の程度を進め、今まさに我々の生活のすべてを擧げて泥土に委せしめよ

うとする。生活の破産は逼迫した。改造は今日の急務である。

我々は文化人の生活を要求する。文化人の生活を要求するは我々が人格としての當然だ。否寧ろ人格の負荷せられたる義務だ。文化人の生活にあつては、其の生活の全活動の上に完全なるデモクラシイの實現を期する。經濟生活は他の文化生活の手段ではない。此くして我が日本の改造は、經濟生活を文化生活より解放して、其れ自身自己目的々のものとなすことに始まる。我々は生産者として消費者として、其の人格擁護の見地より當然に此の事を要求する。理性の聲は神の聲だ。我々は現代社會を其のまゝに肯定しない。其れが人格の品位を損ひ、其れが價値の尊嚴を傷けるものである以上は、此れを破棄するに頗る勇敢であり、沈着でなければならぬ。現代日本の生活は危機に瀕して居るのだ。

世界改造の大勢

一 改造問題の信望失墜

世界大戦の間、或は其の終末以後、社會改造の問題は喧しく我が論壇に議せられた。社會評論と言へば、根本的に社會組織を如何に改造す可きかの問題を取扱つたものゝみであつた。昔は國民の口にす可き言葉で無かつた社會主義やアナキズムやさへ、今では子供の玩具にも等しい常套の語になつた。進歩といへば確かに大いなる思想界の進歩である。發達といへば誠に著しい社會運動の發達である。併し此れに匹敵して我々の現實生活が一體どれだけの進歩發達を來したかといへばよほど問題だ。不自由は昔ながらの不自由だ。生活不安は却て益々窮迫した状態に増大した。思想の擴張と生活の萎縮とは、其の間餘りに甚しい距離を保つて居る。

國民は長い間の歴史的屈從に養はれて居て、思想的に、又實際生活的に、どれだけの不都合や不合理やに束縛せられて居ようとも、直ちに此れに慣れて了ひ、直ちに此れに諦めを置いて了ふ。不都合も不合理も、現實の生活自體の中に運命的に潜んで居る不都合や不合理やの自然的表

現だと信じ込んで了ふ様になつて居る。其の習慣性の獲得の早い事は、全く驚く可き速力である。此くして現今では國民の大多數は社會改造の問題に倦んで了つた。「改造」と言へば「又か」といつた表情が彼等の額の上に表はれる。

そして彼等は信ずる。現實は動かし難き現實だ。改造問題は此の現實を動かす爲めの思慮では無くて、單なる机上の測量だ。百萬語を費して其れが何の威力を示さう。物價が高いならば、從來の購買力を減らして粗質安價のものを使用するだけの事だ。収入が乏しいならば、同様に出来るだけ自己の消費を節約するだけの事だ。外的權力への反抗は却て自己を傷害する許りである。たゞ現在あるがまゝを在るがまゝに享受し、其中では我々をして出来るだけ多くの享樂を取ることを得せしめよ。云々。此くして國民の大多數の中には、今や改造の論議は其の信望を全然的に失はんとして居る。彼等は寧ろ詠嘆的だ。しかも享樂的に詠嘆的だ。社會の新聞や雑誌は此の風潮に諂ふ事に汲々として居る。藝術は高く神聖なる美價値によつて評價せられず、通俗的な享樂氣分により其の取捨が決定せられる。宗教は其の感傷的な、又自己隱遁的な主觀の陶醉によつて、恰も社會の病的興奮に投ずる好機を得た。現代人の價値判斷力は著しい程度に微弱となり、男性的自由人の活動が阻害せられて居る。社會群集の享樂的な、主觀的な價値判斷を以て、何時の間にか自己自身の價値判斷にして居る。一口に言へばすべての人間が尻馬に乗り易い

性格變質者になつて了つた譯だ。

改造の問題が國民の大多數に其の信望を失つた根本の理由は、社會組織の根本的改造を必要とする社會事實の中心が、我が國自身の中に無くて、米英佛獨露等の諸外國にあつた事である。此の事は如何なる人も否定しようとは思ふまい。大地震の中心は對岸の大陸にあつた。其の影響は一の大いなる海嘯を惹き起して、地震の無かつた國々の海岸線にまで其れ々々の恐慌を與へて居る。海嘯の高さは近來に見た事の無い高い程度のものである。しかも其の一起一伏は此岸にあつては豫測の出来ない不規則の性質を持つ。此の海嘯を禁絶しようと思つたら、對岸の大陸へ渡つて親しく震源の調査を爲し、其の防遏策を講ずるより外に方法は無い。併し此れは我が外交家や、經濟家の到底爲し能はざるところである。すべては一つの自然的運命だ。運命をして運命自身の開展に任せよ。此の地にあつて海嘯の防遏策、即ち我國社會の改造策を講ずるも、其れはすべて將來に無用のものとなる。嘗て熱心に論せられた改造論が一般に興味を惹かなくなつた理由は其處にあつた。

實際此の事實は、理由として立派に成立し得るだけの現實的威力を持つて居る。如何にも我々は社會改造の問題を刻下の急務として此れに徹底的の解決を下さうと力めて居る。併し此の改造の根本解決を爲す祕密の鍵を持つて居るものは、我國では無くて、米、英、露の如き諸外國であ

る。彼等が徹底的に動き出すまでは日本も暫時の洞が峠を極め込むより外は無い。我が國の政治家が大戦前の世界展望に隨つて樹立した八四艦隊や八八艦隊の苦しい計畫——國民の生活標準に照らして此の上も無い苦しい算段であつた其等の無理計畫も、突如たる米の提案によつては苦も無き壊滅を來す。此の一事が萬事を語る。さてこそ我國の國策は、溫順なる世界觀望策に出でるより外は無いといふ事にもならう。

併し私は此れだけが理由の全部だとは思つて居ない。よし生活恐慌の根本理由は我國に無くて諸外國にあるとしても、現在眼前の我々の生活危機を其のまゝに放任して置いてよいだらうか。我々の思想生活の頹廢を永遠に無顧慮で過ごしてよいだらうか。此れは確かに國家永遠の大計を破る所以だ。外國は外國として我々はやはり我々の最善を盡くす可きだ。併し其れでもなほ我國の政治家や一般の民衆が、我が社會生活の根本的改造を問題とせず、又一旦問題にはしたが後直ちに此れに興味を失した所以は何處にあるか。私は今其の根本理由を察知した。其れは彼等が世界は近き將來に於て根本的の改造を必要とするに至つて居るのを本當に信じて居ない事だ。世界は大戦前と大戦後と、一重の幕を隔て、全く其の精神と個性と中心力とを變更せしめるに至つた事を具體的に感知して居ない事だ。

私は此の數年間、自分に許すだけの機會を捕へて、我國の諸處を旅行し、其の地のあらゆる種

類の人達に接して、彼等の實際懷抱して居る思想や信念やの心理を研究して見た。其の多くの場合に私の知つた事は、彼等の多くのものが世界は近き將來に於て、根本的の改造を必要として居る事實を確信して居ない事であつた。勿論労働者や若き社會主義者は其事を信じて居なかつたのでは無い。併し其等の人達の信念も外面の形式だけは新らしさうになつて居るとは言へ、或る場合に其の信念は知識だけのものであつて見たり、又或る場合に、其れは現在に反抗しての感情だけのものであつたりして、其の何時でも、世界の事實の上に立脚して改造を必要だとする確信だとは見えなかつた。況んや普通の常識人に取つては、世界改造の問題は自己の生活に何等の關係も無い閑問題だ。そして眼前の現實として否定出来ない生活不安を、大戰によつて影響せられた一時的の現象であると信じ、遠からざる將來には再び戦争前の健全状態に復歸し得るものだといふ強い希望が此れに掛けられて居る。現在の生活不安が何故に戦前の健全へ復歸し得るか、其の理由を考へようと彼等がした事は一度でも無かつた。一度左へ傾斜したのは次の時間に又右へ傾き、交互左右の振動を繼續して終に平衡に歸するは、一般に社會統計の示すところであり、また同時に其れは事件豫測の人間心理に根本的豫定となつたものであるが、此の場合も亦其の統計的法則は、證明無き一個の信念となつて彼等の思想根拠を固めて居るのである。

併し我々はさうした空しい蓋然性へ最後の信頼を掛けて行く譯に行かない。事實の將來豫測に

はやはり事實の證明根拠が必要である。私の信ずる處に従へば、歴史の將來豫測は全く此れと反對だ。世界歴史の上には、大戰の前後を以て明瞭に其の精神と個性と中心力とを變更せしめて了つた。現在我々の眼前に見て居る生活の危機は、戦争の終結と共に消滅す可き一時性のもものでは無い。其れは當然の歸結を追求した永遠的疾患である。少くも此の根拠が根本的に壊滅せられぬ限りは、寧ろ其の疾患の程度を深めこそすれ、何程か此れ以下に減退せしめる事の無い文化の結論である。其れ故に世界は今にして根本的に改造せられる必要を我々に痛感せしめる。世界の改造とは我々の生活の基礎を置いて居る文化前提を、甲より乙へ全然移動せしめる事だ。即ち其れが改良では無くて改造である所以だ。私は現今世界の事實的根拠の上に立つて此の事に確信を持つて居る。

其れ故に私が日本の社會論を爲す前に、兎に角世界改造の必要が思想家の單なる一時的要求で無い事を證明するは、何よりも必要の仕事であらうと信ずるのである。

二 新世界の待望

歐米の事實を語る事は歐米人自身をして爲さしめるが、一先づ公平な仕方である。世界大戰が現在文化の將來に如何に力強い決定を與へたかは、恐らくは我が國人の大多數が豫想して居るよ

り遙か以上のものであつたのだ。新舊文化の間に交替の時が来た。大戦は正しく此れに一の機会を與へたものである。世界は根本的に改造せらる可きだ。文化は當に其れの基礎を變改す可きだ。かうした公言を現在世界の具眼者の論著の中に求めようと思つたならば、十百を以て數ふるものは餘りある状態に達して居る。私は次に其の典型的なるもの、一二を紹介して見よう。

エドワード・カーペンターは爛眼を持つた文明批評家である。彼は詩的豊滿なる人間生活を願求しつゝ、他面に細心なる計算を立て、現代生活の缺陷を暴露して行く、選ばれた批評家の一人である。其のカーペンターが今から數年前に世界文明の趨勢を批評して行く時には、明かに現在の疾患に匙を投げて居た。彼は羅馬史家フェロの語を引用して、今や世界は最後の審判の日に臨んで居ると斷言した。大事件が世界に成熟した。世界歴史に未曾有の大いなる審きがすべてのものゝ上に及んで、世界的の冠と力とは彼等の古代の光彩と彼等の偶像と彼等の祭壇と、及び彼等の信仰とを以て、明かに泥土に委せられようとしつゝある。今や時勢は當然「理性と正義の上に置かれた新しい世界秩序」を要求しつゝあるにも拘らず、各國の政治家政策家は「地震の真直中にあつての賭博者の如くに、古いゲームを遊んで居る」。カーペンターは歐洲の現勢に就て此の診斷を下した。何人か其の忠告の大膽さに驚嘆しないで已まう。歐米の政治家政策家に於て尙ほ且つ然り。彼の言の如きは我國の政治家政策家に取つては、痛快を好む詩人の幻想から出た一

幕の悲劇構想に過ぎぬかも知れない。

併し私は次に多少此の構想に、我が一般の政治家政策家の信用を恢復して見よう。其れはやはり英國で政治批評の自由良心を持つた、卓越せる政治家ロバート・セシル卿の批判である。彼は曰く、現在我々の生活の背景には甚だ深い礎を置いた焦燥と失望の感情が其れの基調をつくつて居る。よし其の表現は異なるにせよ、すべての階級を通ほして直ちに彼等を支配する言葉は此れだ。「我々は一の變化せられた世界を望んで居る。我々は嘗て休戦が新時代の始めであり、貧乏と壓制と病氣とは、戦争の終末によつて全く驅逐せらる可しと教へられた。併し事實に於てすべてのものは戦前以上に頽廢した。賃銀はより高くなつたが物價と租税はやはり同様に、より高くなつて居る。我々は依然として勞資間の古い闘争を見る。貧乏と病氣と詰め込み本位の不健康な住宅とは、寧ろ以前よりもより以上に悪い状態に達して居る。人は最早事物の古い秩序を以て満足して居ない。彼等はよし如何に其れが尊嚴なるものなるにせよ、何等かの權威の上に立てられた社會的及び政治的組織の「戦争前期の公理」を受け取らない。彼等は言ふ。(其れは實に眞理なるが)古い組織は許された誤謬の上に立つて居た」と。

セシル卿は、英國の實際政治家としては可成りに自由思想を持つた一人に數へられて居る。併し彼はやはり英國の政界に責任を持つた實際家だ。徒らなる放言によつて以て自ら痛快とするに

は、彼の従來の、又特に今後の地位の許さないものがある。なほ且つ此れを現在の新しい社會主義者等の思想と比較するならば、其の懷抱する人生觀はすつと古い。しかも彼は右の如き批評を戦後の歐洲に試みた。

最後に私は、保守的批評家の範圍に一層退却して、安全なる經濟策の上に依然として舊世界秩序の延命を計つて居る一銀行家の叙述を紹介して見よう。其れは嘗て我國への來遊によつて我が國人には著しい信頼を得て居る米國の銀行家フランク・ヴァンダアリップの其れである。ヴァンダアリップは歐洲の財界を視察するや、歸來直ちに其の見聞記を敍したが、其の概論の眞つ先きに述べた言葉は何であつたか。彼は曰く、歐洲に於て余が感じた最も著しい事柄は、産業的生産の解體と癱痺とである。癱痺は戦争地帯にだけ限られては居ない。其れは中立國の地帯にまで擴張して居る。此の状態が繼續して行く限りに於ては、革命的發達と及びボリシェヴィキ的傾向との危険がある。古き疾病、即ち無政府主義に對する新しい名稱、即ちボリシェヴィズムへと不安の發達し行く、其の到るところに於て傳染の危険がある。疾病は隣接せる地方へ次第に擴がって行つて居ると。

以上私は代表的批評家の言説を三人だけ紹介して見た。其れは最も徹底的なる文明批評家に始まつて、政治家中の割合に進歩的なるもの、代表者を經過し、最も保守的なる財界の代言者に終

つた。併し此等の人達の語るところは、兎に角歐洲の文化が戦前と戦後と全然其の特色を異らしめた事で無かつたものは無い。たゞラヂカリストの眼に「最後の審判の日」と見えたものが、保守主義者の感情に「新しい名稱の疾病」として映つたの相違が其處にあつただけだ。而して前者が此の地震の最真中にあつて依然たる古い凡俗のゲムをなして居る世界の政治家政策家の無識をもごかしがつて居る間に、後者は、此の疾病が偉大なる速度を以て歐洲の諸地方に傳染しつゝある現況を危険だと見た。此の兩者の間に立ち、寧ろラヂカリストの立場に秋波を送つたものは、政治的リベラルである。彼はラヂカリスト同様に、大戰を以て明確に歐洲文化史上に一線を劃したものととして、今や歐洲人は「戦争前期の公理」の上に立つすべての組織を「許されたる誤謬」であつたと反省するに至り、たゞ一の變化せられた世界を願求して居ると告白したのである。

此等の批評の中の何れが當を得たものであるかを、私は評論の最初に、單に獨斷的に決定しようとは思はない。歐洲の現今文化が歐米人のあらゆる階級の心理に如何に映じつゝあるか、其れ々々の類例を挙げれば、其れで私の今の目的は達せられて居る。此等の評言は公平に見て、其れ々々に彼等が立つて居る階級や地位の主觀的評價を加へて居るであらう。實際社會と特に密接な關係を持つ評論家に、其れは免れ難き一の傾向であるとしてよいかも知れぬ。併し其等の主觀的着色のヴェルを除き去つたとしても、尙ほ且つ此等の批評の背景には、或る共通の具象現

實の敘述が明瞭に潜むことを、何人も否定し得ないであらうと私は思ふ。

私は先づ私の批評のプロログとして、歐米人の諸階級の心理に映じた大戦後の社會印象を叙説した。次には愈々本論に立ち入つて、一々の具象事實に就き、大戦後の歐洲文化の特色を解明しなければならぬ。其れを爲すは結局世界文化が根本的の改造を必要とする事の信念を我が國民の間に喚起しようとするからである。

三 歐洲經濟の復興如何

歐洲の社會現況を敘述する第一に、大戦によつて偉大なる恐慌を惹起した歐洲の經濟社會は、果して復興の希望を有するや否やを私は問題として見たい。此れを爲すに適當なる人は我國に澤山あらう。無論私は直接に其等の狀況を視察する好機會を持つた譯では無い。此處にはたゞ其の問題に關して敘述せられた歐米の經濟専門家の言説の中に公平なる取捨を試み、且つ自ら幾干かの統計報告を参照して、此の問題の概括論を爲すだけの事である。

私は最初に其の結論だけを言つて置かうならば、私は歐洲の經濟が現在の社會秩序と及び其上に立つた幾多の方略を以て、一の健全状態に復歸し得ることを、大いなる疑問として殘したい意見を持つて居る。併し此れは敢て私だけの感想ではあるまい。歐米の經濟評論家の中の進んだ

意見を持つた人達を見て行くに、殆ど其の全部が歐洲の經濟恐慌に對して悲觀論を爲して居るのである。無論彼等の多くは此の恐慌状態の存続と、及び其の究極に於て豫想せられる經濟組織の一大變革を歓迎して居るものでは無い。何とかして此れを免れる方略を考案し出さうと力めて居ることは事實であるが、併し如何にしても其れを考へ出す事が出来ないのである。此の一事だけは我國の實業家や經濟評論家やも、許容せざるを得ない現實の事實である。凡そ一の經濟が恐慌状態を惹起したとすれば、何等か其の恐慌の原因の除去せられるまでは、此れが状態を中止するものでは無い。然るに多くの人は漫然として時間がすべてを解決すると考へて居る。併し歐洲の恐慌までが其の公算の支配内にあると考へるは、偉大なる誤算だと私は考へざるを得ない。

私の考へるところを以てすれば、歐洲經濟の恐慌は二の大いなる原因によつて齎らされた。そして其の二大原因の相互關係は、亦此の恐慌に永遠性を與へ、我々に經濟復興の希望を與へてくれない。其の原因とは何かといふに、第一は生産の減退であり、第二は信用の失墜である。

歐洲に於ける一般生産の減退は、すべての統計が指示する一の否み難き事實である。併し單なる生産減退は、其の國の經濟界に取つて其れほど恐る可き現象では無いかも知れない。蓋し其の生産の中には、一般の加工的復生産が餘程の部分を占めるであらうし、また多少奢侈的なる財が此れ亦可成りの量に包含せられて居るに相違無いからである。此等の生産の減退は經濟恐慌の原

因としては微力なものであるし、又よし其れによつて一旦恐慌が起きたとしても、其れは單に經濟界の一部に止まり、随つて恢復も迅速に行はれるのである。併し此處に最も恐れねばならぬ性質の生産減退がある。其れは生産力自身の減退と及び生産資料の減退とである。歐洲の恐慌は正しく此等の原因によつて惹起させられた。

生産は生産資料に對する生産力の働きかけによつて起る。何等の資料も無くまた何等の生産力も無いところに、すべての生産は起りやうが無い。此れは生産の物理的原因である。敢て經濟的の考察を要しない。其の社會制度が資本主義的であらうと、社會主義的であらうと、此れだけの事は其れに無關係の要素だ。

生産の資料とはいふまでも無く原料品を意味して居る。すべての主要原料品は綿、羊毛、麻、銅、石油等、大戰の爲め著しい程度に其の生産額を減少せしめた。原料あつての複生産であるから、原料の生産乏しき時に一般の生産減少を來すは當然の理である。生産力は又二つに分けて考へられる。其の一は物理的生產力であり、其の二は人間的生產力だ。前者は主として石炭石油を意味し、後者は人間の労働を意味する。此の兩要素の合同形態としては運輸を考へることが出来る。此等は生産の根本要素として非常に重要な役目を果たすものである。然るに此等の諸要素は今歐洲に於て甚だしい程度に其の勢力を弱めて了つた。此の傾向は敢て今日に馴致せられたといふ

ふては無く、全く大戰の經驗が等比級數的に盛り上げて來たものである。石炭は現在の經濟ではすべての産業のエネルギーだ。石炭産出の減退は、結局に於て歐洲の全經濟面の活動量を其れだけの割合で減少せしめた事を意味する。労働量の衰退は主として戦後歐洲人の生活の衣食住低下に原因する。殊に食料の缺乏と其の分配の不良なる事とは歐洲人の精神的及び肉體的の能力を如何ほど低下せしめたか知れないものである。獨逸露の諸國の如きは、恐らくは此れが影響を少くも今後一世紀の間に及ぼして、彼等の創造と實行の力を衰弱せしめるに相違無い。

以上は歐洲の經濟活動の物理的原因についての解明であつた。生産資料と生産力とが、五六年の間繼續して衰退した經濟界は、最早普通の方法では其れと同等位の年限で復興出來ない。況んや現在歐洲の經濟界は其の前途に恢復の曙光さへも見え出して居ないに於てをや。生活の不安は容易に除かれず、人間の體質と能力とは益々損傷せられ、其の影響は更に次代の中堅たる可き現代の幼年者の上に及んで居る。

資本主義的經濟社會は、其の經濟活動に就いて其れの物理的要素の考へられたゞけでは、真相の明かにせられないものがある。經濟活動には、尙此れに特有なる一の純粹經濟的要素を考慮しなければならぬ。經濟的要素とは何かといへば第一には信用である。信用は生産に於ける資本の源泉である。即ち我々の社會の生産は生産資料と生産力とだけでは起る事が出來ないで、其處に

は資本と呼ぶ或る特別のもの、存在を必要として居るが、資本は一の靜態であり、此れを經濟の實際活動の動態に移すものは信用だ。第二には金融である。貨幣經濟の社會にあつては、金融と呼ぶ或る獨特の現象が全體の經濟に重大なる影響を及ぼすは理の當然である。然らば歐洲に於ける近年の信用と金融とが如何なる程度のものであるかと言へば、此れはあらゆる統計の指標が示す如く、非常の程度に不良状態を持ち續けて居る。例へばかの通貨の膨脹による金融状態の悪化の如きは、大戰以來何人にも熟知の現象であるけれども、さて此れを根本的に救済する方法は何人によつても發見せられて居ない。

經濟活動は物理的要素と純粹經濟的要素とを持つて居る。歐洲に於て現在此等の現象のすべてが異常なる程度に恐慌状態を繼續して居る事は今述べた通りである。併し此等の恐慌は、それぞれの方面から次第に手を付けて其の復興に熱中したら、或は遠からざる將來に恢復の見込みが無いものでもあるまい。其の物理的要素が恢復したのもよければ、經濟的要素が復興したのもよい。其の何れかを一端から常態に復歸せしめれば、歐洲經濟の復活に曙光が認められる。我々は次に理論的に斯様に考へる事が出来るかも知れない。併し事實に於て其れは至難中の至難事である。

物理的要素と經濟的要素とは、資本主義的經濟社會にあつては相關の關係にある。物理的要素

を顧慮しないで經濟的要素の發達することは全く無いことであるし、又其の逆も同様に眞理では無い。現在の社會では、信用や金融の經濟的要素を土臺として物理的要素が働き出す。資本の無いところに生産は行はれず、信用や金融の悪いところに生産資料や生産力の集まる理由は無い。資本主義とは、言はゞかうした經濟的要素の上に全經濟機關の運用せられて居る、其の經濟社會の前提となつた精神であるといつてよいのである。次に兩要素の關係を逆にして考へて見る。物理的要素の不完全なるところに經濟的要素の發達は望まれない。換言すれば生産資料や生産力が豊富であつて生産が般販に行はれて居るところでなければ、金融は活潑である筈が無いし、またさうした生産の擔保を豫想しないでは、全體としての信用は十分に維持せられない。此くして經濟活動を熾盛にするには非常に面倒な關係を顧慮しなければならぬこととなる。物理的要素を發達させる爲めには經濟的要素を發達させなければならず、又逆に經濟的要素を發達させる爲めには物理的要素を發達させなければならない。

然るに今歐洲では此の兩要素が共倒れとなつて居る。此の經濟を救済する爲めには、兩要素を一緒に持ち起すのでなければ何の効果をも奏しない。併しさうした大仕掛の仕事は、少くも現在の經濟社會の下では實行の不可能なるものである。資本を公債に仰いで大いに生産を發達せしめようと欲すれば、生産の擔保無きところに募集する公債の成功し得よう筈は無く、又あらゆる信

用の恢復の爲めに生産事業を盛んにしようとするならば、さしづめ此の事業に要する資金を得る爲めの信用を如何ともし難い。歐洲の經濟界は今や全く資本主義組織の經濟自身が立つて居る法則によつて資本主義組織の經濟自身を苦難に陥れ、遂に此れに死の宣告を與へる時に瀕して居る。

歐洲の經濟恐慌の原因と、及び此の原因を除去することの不可能なる理由は以上の如くである。私は今の場合依然として歐洲經濟界の將來に悲觀説を持するものだ。

四 獨逸賠償への信頼

大戰後の歐洲社會の特色を叙述する第二として、私は聯合諸國が獨逸の賠償に適當の信頼を置いて居る事實を指摘しなければならぬ。此れは歐洲現在の經濟的恐慌の將來を判断するに、直ちに關係を持つた問題である。

一九二一年の一月から二月へかけ、聯合國の最高會議が其の決議として獨逸に對し命令した賠償條項は、實に驚く可き苛重のものであつた。此の條項の決定せられる時に、最も執拗に其の苛重の條件を支持したものは佛國である。然らば聯合國は大戰により既に此くも疲弊し盡した獨逸に對して、何故其の如き苛重の賠償條項の實行をせまつたのであるか。聯合國の最高會議は、此等の條項が今後獨逸によつて實際履行せられることの可能を信じて居たのであらうか。其の間に

處したる聯合國の經濟的政策家の心裡を機敏に探索して見る必要が我々にはあることと思ふ。

無論賠償は戰敗國に對する一の懲戒である。殊に獨逸の接壤國としての佛國にして見れば、獨逸が今後數十年間に亘つて根本的に再起する事の出來ないだけの保障を得て置かなければ、不安心で仕方の無いことである。併しかの場合に佛國で起つた輿論の意味は、敢て其れだけのものでは無かつたと私は觀察して居る。然らば獨逸賠償條項の眞意は那邊にあつたらうか。私の考へる處を以てすれば、其は實に歐洲經濟界の恐慌を緩和する爲めの重要な一策に外ならなかつた。換言すれば獨逸賠償といふ保證金を擔保として兎に角歐洲經濟界は其の失墜した信用を幾分だけ恢復する事の出來るといふことだ。

經濟恐慌の原因は前既に叙述した通りである。此の場合何等かの恢復策を計畫するとすれば、兎に角我々は經濟生活の純粹なる經濟的要素の状態を良好にして行く事を第一着手としなければならぬ。言ひ換へれば、歐洲經濟の信用を鞏固にして金融状態を良好にしなければならぬ。若し現在の信用の儘を以てすれば、歐洲の各國政府は經濟的に全く破産の状態にある。一旦國家が取付に遭つたと假定すれば、何れの政府も根柢より破壊し去られる。歐洲の各國政府と及び資本家とは、大戰によつて築き上げた國費や公債や財産やを、一片の空文に歸せしめる事無く、其れ々々表記の數字は其れ々々表記だけの價值を今後に維持して行く事の出來るものだとする爲めには、

出来るだけ安全に大戰前の社會秩序を保持して行かなければならぬ。其の實質はどうかあらうと、舊經濟秩序は少くも其の勘定尻だけを合つたものにして置かなければならぬ。其事だけが完成せられたとすれば、各國の政府や資本家やは、一時的に、又名目的に其の信用を恢復する事が出来て、現在の危急を一寸逃れに逃れて行く事が出来る筈である。

此くして聯合國の政府や資本家の不信用の穴埋めに利用せられ、恐慌の一時的彌縫に利用せられたものは、獨逸の負荷せしめられた苛重の賠償條項であつた。

其れと同時に巻き添へを喰ひ、或る場合には現在よりもなほ甚だしい經濟恐慌の襲來を豫期しなければならぬ運命を將來に望んだものは米國である。併し此れは獨逸賠償の如何に拘らず、米國が其の參戰の日に既に決定的に自らへ招致した運命であつたのだ。否な寧ろ正當に言へば、米國に取つては、其の參戰如何に拘らず大戰と同時に此の運命が築かれたといつてもよい譯であつて、米國は其の恐る可き運命の程度を出來るだけ輕微な範圍に減少せしめようとして、換言すれば戰爭を出來るだけ早く終熄せしめようとして、聯合國と共に其の武器を取つたと考へてもよいのである。歐洲經濟の恐慌は即ち米國經濟の恐慌である。歐洲の經濟的救済は最初より米國の手に委ねられて居たことであつて、又實際米國は現在其のあらん限りの力を盡して此の事業の完成を計つて居る。軍備制限の提案が彼の如く急速に決定を見た所以は、英國も今となつては現在

の經濟的行き詰まりを容認せざるを得ず、且つ此れを救済するものは米國の外には無い事を知つて居るからである。講和會議と華府會議と、僅かに二年を隔て、佛國の國家的信望が如何に下落して居るかを觀察しても、時代の問題が那邊に動きつゝあるかを推知するに難くは無い。軍備制限の提案の如き、恐らくはヘアディング自身の發案ではあるまい。歐洲經濟の救済に其の怪腕を揮つて居たフウヴァーの暗々裡の發言權の如き、我々は十分に注意しなければならなかつたのだ。

形式としての獨逸賠償は、聯合國に取つて右の如き意味がある。併し我々が歐洲經濟復興の將來を卜知する爲めには、更に立ち入つて其の實質如何を究明して見る必要がある。獨逸が完全に其の賠償條件を履行し得ると豫測出来れば、恐慌の將來はさほど憂慮す可きものでは無いかも知れない。併し我々は不幸にして獨逸經濟の將來に其の樂觀を爲す事を許されて居ない。最も疲弊したものは聯合國では無くて獨逸であつた。其の物理的要素も經濟的要素も恢復なし難き壊滅を蒙つたものゝ最は獨逸であつた。聯合國すら前述の理由によつて現在の恐慌より復活し得ない場合に、獨逸が平態に恢復する事は、現代の社會組織としては全然推測せられない。然らば聯合國は此の如き空券を擔保として其の危険なる信用の維持を試みて居るのである。其れは全く一の奇術的彌縫策だ。歐洲の經濟恐慌の將來は愈々益々暗黒となつた。

併し此の批評は敢て私だけの獨斷では無い。具眼の社會評論家は其の場合に一致して此の批評を公表して居た。例へば其の最も重要な一人に英國のノルマン・エンジェルがある。エンジェルの批評によれば、此の如き賠償條項は、一年か二年の間は社會公衆の耳目を欺いて行く事も出来ようが、結局は全く狂氣じみた非常識の表明だ。歐洲の状態は到底今日の其れを維持する事の出來ないものになつて居る。此の賠償條項の履行せられると豫想せられる將來には、佛國が英國かには、或は革命が起るかも知れない。云々。又佛國のジュウオーは當時宣言書を發して言ふところには、賠償に關する仕事は、佛獨兩國の労働者の共同の仕事でなければならぬ。其れ以外には歐洲の平和を復活させる方法が無い。賠償條項を獨逸が履行しない場合、聯合國は直ちに獨逸領土の占領を爲すとの聯合國最高決議の決定には、佛國労働者は斷乎として反對の意を表することゝを聲明すると。

獨逸は聯合國の威嚇に逢ひ、其の場合兎に角苛重なる要求を受諾する外に方法が無かつた。併し其れは單に口先だけの受諾である。獨逸自身此の賠償に意の無い事は勿論、其れは最初から不可能だと豫定の出來る事である。嘗てヴェルサイユ會議によつて講和條約の議せらるゝや、獨逸は其の結果苛重なる條約に調印しなければならぬ事となつた。時恰もパウエル新内閣の成立した時であつたが、獨逸社會黨の領袖ハアゼは國會に於て演説して曰く、我々は此の條約が將來國

際プロレタリアの連帯によつて、結局は其の形態を變せしめられるに至ることを信じて居ると。社會主義國家としての獨逸が此の豫想を歴史の將來に置くは誠に當然である。

獨逸賠償金問題に就ての右の批評を私は一九二二年の春に書いて置いたが、其の豫見の一部は確かに適中した。また其れは適中することの餘りにも至當なる平凡事であつたのだ。一九一九年春に開かれた聯合國最高會議の決議は其後全くの空文に歸し、幾多の迂餘曲折を経たのち、最近のドオズ案となつて殆ど絶對的の決定を見た。けれども何等かの新味が此の案の内容に見られるといふ譯では無く、其の精神は従前のものを其儘繼續しただけのものであつた。此れによつて歐洲經濟界の將來に新らしい社會秩序の曙光を見せたのでは無かつた。併し其の將來の豫測を許さないところに歴史の意義がある。今後歐洲の經濟が如何なる發達を遂げるかは、全く我々の豫測の外であるかも知れない。併し我々に既知の事實を根據として合理的に其の結果を推及して見れば、我々は如何にしても全然の悲觀論者に左袒せざるを得ないのである。併し其の悲觀とは現在の經濟社會秩序を其のまゝに維持して行く爲めの其れだ。正しい文化發達の將來には、或は寧ろ一の光明が見え始めて居ると言つてよいかも知れないのである。

全歐の經濟生活が「物の古い秩序」換言すれば「戦争前期の公理」の上に其の基礎を置く以上、此の大戦より受けた恐慌を乗り切り、戦前の状態に復歸する希望の無い事を私は既に前数節で述べて來た。此の難況を切り抜ける爲めに、現在の世界國家は如何なる方策を盡して居るであらうか。其の政治的の方策として取られたものには、第一に國際聯盟があつた。第二に華府會議があつた。(そして最近には第三としてドオズ案を擧げなければならぬかも知れぬ。)現在政治の水平線上に出て居る世界の政治家は、勿論此等の方策だけで永遠平和を齎らし得るとは考へないであらうけれども、しかも其の全力を擧げて畫策し、其の結論に達し得たものは、僅かに此の二つであつた。其れ故私は第三に、此の二盟約が凡そ世界平和にどれだけの制約權能を持つて居るかを吟味しよう。

私は此處で世界の國家的對立と及び國家間の戦争を問題にしようと思はぬ。世界の改造には順序が必要だ。よし否定す可き多くのものがあつたにせよ、其れの現實的否定に先後がなければならぬ。又經濟的政治的に考察して現在の國家は否定せられ、戦争は全然絶滅せしめらる可しとしても、人間の行爲を決定する自然的要素は、經濟政治の文化的要素以外に其の甚だ強盛なる勢力を維持して居るから、例へば人種の相互的憎惡、個人の英雄的野心等が、如何なる時代にも根本的に絶滅せられるとは考へられないから、一概に國家形態を否定し、今後の戦争を豫定しない

譯にはいかぬ。永遠の理想に向つての我々の憧憬其のものは、直ちに現實に向つて加へる我々の修正案で無い。此の状態が何時まで續くか。其れは我々の豫測を許さぬ。其れ故私は、兎に角國家形態を前提しての改造論を古いとはいはぬ。より、近い改造案は寧ろ其の前提を有するのが當然だ。國際聯盟や華府會議やが、國家形態の前提の上に立つて居る、其れだけの事を擱へて、私は此等の二者の價値を全然的に否定しようと思ふもので無い。

其れにしても私にはなほ多大の疑問の餘地が残される。國際聯盟や、更に其れを一層事實化した華府會議やの意義は、一體何處にあるか。便宜上華府會議を省略して國際聯盟に就いてだけ考察を進める。國際聯盟の目的は平和條約第一編國際聯盟規約の首文が雄辯に此れを語つて居る。其れは「戦争に訴へざるの義務」を受諾したものだ。「各國間に於ける公明正大なる關係」を規律するものだ。「國際法の原則」を確立するものだ。「正義」を保持し、且つ嚴に「一切の條約上の義務」を尊重するものだ。要するところ、「國際協力」を促進し、且つ「各國間の平和安寧」を「完成」せんとするものである。少くも其の目的に就てだけいへば、此の世界に此くも美しく樹立せられた樓閣を従來見なかつたといつてもよいものである。

エルツベルグは一九一八年十二月、柏林の高等商業學校での講演で次の様に論じて居る。從來の國際政治組織は全然暴力と競争との上に立つた。此の組織の衝動の外部に示されたものは、

亦同時に國內に向けられて居るものであつた。即ち暴力である。道德と政治とは何等の共通點も無く、寧ろ此れは相反する對極の範疇に其れ／＼所屬する。此の組織は、よしお上品の格好になつて居るとはいふものゝ、要するに昔の劫掠組織だ。今や此の暴力無秩序の全然的壞滅が起つた。一の新しい組織は其れに入り代はりとなつた。其れは權利の組織である。すべての人間、すべての國民の共働によつて、共働社會の思想、國際聯盟の思想を實現しようとする事になつた。數世紀の間誤まれて居た道德と政治との分離が、今や撤回せられんとして居る。國際聯盟は國民秩序の上に押し及ぼさうとするものだ。此の演説は、勿論現實としての國際聯盟の成立より前に爲されて居る。併し眞に國際政治の一形式として國際聯盟が各國家に締結せられるものとしたならば、其の理想は少くとも氏の述べた點にあるに相違無い。併し現實としての聯盟規約は、氏の期待からは甚だ遠いものになつた。否な其れは敵國側の要求に比較して甚だ遠いのみならず、聯合國側の首唱者ウィルソンの要求に比しても、悉く淺薄化せられ、悉く凡俗化せられて了つたのだ。

國際聯盟は依然として「劫掠組織」の延長線である。其の規約は、大戰當時の戦闘状態を休戦のまま、將來へ繼續しようといふものである。獨逸側は此の聯盟により、聯盟前以上の不正義と暴力とを自らの上に蒙つた。曩きには道德と政治との一致であると推奨したエルツベルゲルも、今は寧ろ國際聯盟を以て一國又は國家の群が、他の一國又は國家の上に加へる暴力であると解せざるを得ぬ事になつた。敢て氏一人だけでは無い。獨逸國民全部が聯盟に對して極端の憎惡心を抱くに至つた事は、聯盟國に屬する我々の良心から判斷しても寧ろ當然の感情であつた。

普佛戰爭後四十年間の獨逸の勃興は、眼覺ましいものであつた。其の間に獨逸の貿易額は百七十パーセントを増加したに拘らず、英國の其れは百三十パーセントを増加したに過ぎない。英國の最も重要な産業である紡績に就てだけ言つても、獨逸は當時全く物の數に入らなかつた状態から、もう數年で英國を凌駕しさうな優勢にまで發達した。リヴァプールとブレエメンへ輸入せられる綿の數量は明かに此の競争を語る。織物業についても同じい比較が立つ。製鐵に就て見れば、獨逸はロオレン州の産鐵地方併合と、英人トオマスの新精鍊法採用とによつて、當に英國の主産業を排除するに垂んとして居た。其他すべての産業や教育や軍備が、皆な此れに並行しての急速なる發達を遂げた。此れは英國のすべての資本家政治家に排し難き嫉妬心を養ふに十分の材料であつた。英獨の經濟的爭覇が世界大戰の主原因である事は、何人も知つて居る。併し此の嫉妬心を持つたものは世界列國中敢て英國に止まらない。此の進歩は正に一の脅威である。脅威ではない、事實一の危険である。今此の大戦により獨逸が大敗を蒙つたとすれば、英國なり佛國なりが、再び立ち難き重荷を獨逸に負擔せしめ、自らは一つの聯盟をつくつて利益の獨占を心掛け

るは、當然の成行きといふものである。其の遣り方は辛辣だが其の精神は古い。正に戦前の公理の延長線の一點だ。

古い國際政治の原則を許して此れを形式的に、表面的に見たゞけで、國際聯盟の精神の古い事は前述の通りである。更に此れを内面的に、實質的に見て行くと、聯盟は到底世界永遠の平和に貢献し得るだけの實力を持たない。此れを以て新社會秩序の基礎だと考へるは痴人の夢だ。聯盟は國家と國家とが平和を目的にした盟約である。國家觀念は現在のところ廢棄出來ないにしても、併し此の聯盟は斷じて新社會秩序の礎石では無い。何故なれば其の聯盟の組成員になつた各々の締盟國家が國內的に實は少しも古き劫掠組織から離れて居ないから。國家は依然として資本家の國家だ。大資本家が小資本家を打ち仆して、自己の商業主義の基礎を愈々鞏固なるものにする爲め、政治的權力の支配を借らうと努めて居る、其の資本主義の國家だ。國家間の戦争は亦此の資本主義者の鬭争の外的表現だ。或は國家形式其のものが實は資本主義の外骨格だといつてもよい。其の外骨格と外骨格とが、何處に聯結の關節を求め得るか。劫掠組織の項結合から生れ出るものは劫掠組織の方程式だけだ。新社會秩序建設への憲章では無い。國際聯盟は畢竟、大資本主義者相互の戦時國際法であるに過ぎぬ。

華府會議の海軍制限決議は、國際聯盟に幾分の現實味を附加したゞけのものである。彼の空想

的であつたに對し、此れは一層の事實を包含せしめたが、併し其れだけ精神に於ては一段と露骨に古い劫掠精神を示す事になつた。軍備は幾分制限せられたにしても、其れは各國家の海軍々備の絶對値が減少したといふだけで、相互の鬭争的要求比率が減却せられたといふ譯では無い。

舊社會秩序の支持者の眼にも、現在の世界が今のまゝで立ち行かぬとは、寫つて居ると見える。其れだけの覺悟を決めて、自發的に何等かの方略を主唱するものはまだ上々の部だ。此れさへ時勢外れの進歩案だと考へる政治家が至るところにある。殊に我國に於てさうだ。軍備制限は國家の基礎を危険ならしめるなど、野暮をいふものもある。併し要するに國際聯盟と華府會議は、世界に新しい秩序を齎らすだけの實力を持つて居ない。其れは寧ろ古い政治家の狼狽だ。悲鳴だ。

六 勞働者の勃興と其の新要求

資本家の國家は聯盟して相互間の戦争を防止せんとして居る。併し今後の世界大戦を阻止する事があるとするれば、其れは國際聯盟や華府決議やの空文によつては無く、其れとは全く別の原因から來るに相違無い。今後の歐洲に大戦が起るなど、私は想像して居ない。其の原因とは世界の勞働者の勃興と、随つて其れの新要求である。世界の勞働者は今全く舊式の國際政治運動から

絶縁した。彼等は自己によつて決定せられる經濟運動の實力に信頼して、政治家の棋盤を無視せんとして居る。労働者は衷心より戦争を好んで居ないから、國際政治家が戦争を欲しても、其れは實行の不可能なものになつて了つた。世界全體の空氣が如何に根本的の變化を受けたかを檢する第四の要目として、私は次に労働者の問題を一瞥する。

私は今英國の労働黨が其の手に政權を收めた直前の政況を懷顧する。一九二一年三月下旬、時の首相ロイド・ジョージは自黨の晚餐會席上、激越な口調で労働黨を攻撃した。曰く、英國の各政黨を一致させた大戰によつての危機は過ぎたが、今や英國には國家に取り、其れよりは一層惡辣執拗なる危機が迫つて居る。其れは労働黨近來の勃興だ。労働黨の目的は全然破壊的であり、其の名稱は労働黨でも其の實質は社會革命黨だ。社會組織の根本的破壊を目的として居る。最近の補缺選舉の形勢に鑑みるも、労働黨の得票は僅に此れに全得票の四分を増加せしめれば政府黨と同數になる處へまで迫つて來た。労働黨の勝利は即ち何等の經驗も責任觀念も無き社會革命黨領袖の勝利である。若し此の形勢が馴致せられ、危險思想が國內全般に行き互つたとすれば、社會組織は異常の危險に瀕するから、今にして國民に此の危險分子の驅逐を訴へ、宣傳する必要がある。英國の社會に取り、其れは目下の急務だ。併し首相の演説は、黨略から爲された一の宣傳である事が容易に看破せられ、其の影響は却て首相を不評にしたゞけであり、何等の效果をも舉

げずに已んだ。労働黨は却て益々其の名聲を擧げ、ついには自黨によつて内閣を組織するところへまで到達した。

英國労働黨の黨是は、急進的運動者の要求に比較し、著しく右傾して居る。彼等は必ずしも流血の革命を歓迎しようとするものではなく、露國の第三インタナショナルに加盟する事に反對して居る。其れにも拘らず首相が極力此れを攻撃したのは、要するに一の政黨根性の打算から出たものに相違無い。併しなほ一面から考へれば、ロ首相の此の演説に多少の根據が無いでも無かつた。其れは大戦後の労働者の異常なる勃興である。労働黨が名の如く労働者を代表する一政黨だとすれば、労働者の勃興は、舊社會秩序の支持者に取つて此の上も無い危險である。成る程労働者の大部分は流血革命には賛成しなかつたかも知らぬ。しかも舊社會秩序がロ首相によつて意味せられた所謂「危機に瀕せる社會組織」だとすれば、労働者は如何にも其の組織の廢滅を希望して居る。即ち彼等は首相の所謂「社會革命」を目的として、自己の運動を進めて行くだらう。危險思想は此の遠慮無く國內に瀰漫した。

今後我國の労働運動の程度が一段と進んだ時、英のロ首相によつて發せられた時代推移の嘆聲や誤魔化しの宣傳やは、其の儘我が國首相の嘆聲や宣傳やになつて、幾度か議會に、其他の公開場所に聞かれる事とならう。歴史の推移に際しての必然的苦悶の例證に、私は豫め此の一例を掲

げて置かう。

労働者は労働者自身によつて組織せられる新社會秩序を仰望する。併し大戰前の彼等の大多數は、實際のところさうした新社會秩序が今世紀や次世紀やに現出して來ようとは考へて居なかつた。其れは依然として一個の天上ユウトピアであつた。彼等は世界の全労働階級を糾合して全資本階級に對抗することの合理的なるを知りつゝ、しかも眼前の大戰に臨んでは、舊來の國民主義を廢棄して理想態の國際主義に就くだけの大膽さを持たなかつた。目下の國際關係として此れは一の冒險に外ならなかつた。何故なれば各國の國家的權力は非常の程度に鞏固であつたから。然るに大戰後の彼等は全く此の人生觀から擺脫することが出來た。新世界秩序は「百萬年後」では無い。如何なる國家的權力も彼等の前に出ては頭が上らぬ。労働組合の宣言は國家的權力の宣言の外に超在し、威信と實力とを持つて居る。國家間の戦争も、最早事實に於て彼等の力で左右せられる。彼等は永久に國民主義へ止まる必要が無くなつた。工場の技術的指導も政治の實際的統御も、大戰中の経過によつて見れば、些の停滞なく、彼等の手で遣つて除けることが出来る。指導や統御は知識的専門家の獨占によるより外は無いどの舊來の迷信が、遺憾無く事實の前に屈服した。舊世界秩序に屬する歐洲の資本家は、獨逸賠償金だとか、公債の保證だとか、不可能に近いほどに困難な救済聯盟を結ばなければ、歐洲經濟生活の復活を爲し得ないと焦慮して居る間に、

彼等は即刻其の難局を引き受けて何の苦痛も無く遣つて行くだけの氣輕さと自信とを持つて居た。新舊の距離は、時間が経過すればする程一般には一層明瞭なものとなり、社會から新は愈々信頼せられ、舊は愈々嫌惡せられる。其れが大戰後の實狀である。

露國の勞農軍が波蘭に攻勢を取つた時、聯合國側は此の緩衝地帯の壞滅せしめられて獨逸が勞農化するに至る危険を意識した。佛國に取り是れは大した頭痛の種子である。聯合國政治家の首腦者達は武器を輸送するなり、援軍を送るなりして、波蘭の急を救はうと欲した。併し全歐各地の労働者は、此の無意味なる戦争に従ふ事を欲しない。交通労働者は、其の武器や軍隊を輸送することからだけでも侮辱を感じる。彼等は斷乎として宣言を發し、此の戦争に従事する事を拒絶した。流石の舊政治家も其れには何等手をつけられぬ。事件は自然消滅に任せて置くより外は無かつた。獨逸が賠償金を支拂はぬならば、聯合國は直ちに軍隊を送つて、獨逸の要地を占領するといふ計畫も亦、苦も無く労働者の反對宣言によつて退けられた。英國の如き、眞に三角同盟が共同して起てば、數日ならずして革命を成功せしめるだらうと言はれる。一炭坑夫組合の罷業だけでも、どれ程の耐久力によつて支持せられるかの實例は、一九二一年四月の罷業で十分に示された。

新らしい事實は新らしい要求を生む。労働者の勃興は必然的に彼等の間に新要求を育醸せしめ

た。労働運動の意義は舊日の其れで無い。(此の事は尙ほ後に論ずるけれども、今議論の順序として必要のことだけをいふ。)多くの政治家や経済家は、労働運動と言へば、單に労働時間の短縮、賃銀の増加、労働状態の改善だけを意味すると考へて居る。勿論現在の労働運動は常に此れを口火として起る。又恐らくは今後すべての労働運動が此れを眼目に動き出すだらう。併し労働時間問題、賃銀問題は、今や労働運動自身の目的で無くなつた。此等の問題は焦眉の急だ。運動の中核では無い。彼等は實に労働者自身によつて組成せられる新社會秩序を目的にして居るのだ。

賃銀値上は賃銀制度の廢止に進んだ。團體交渉は産業の自治に向つた。何故なれば賃銀値上は賃銀制度自體を前提とし、團體交渉は資本家による産業經營を前提として許容する。併し賃銀制度は、人間の労働が商品として賣られる制度だ。人格が人格の下に物品として隷屬する其れだ。人間の道徳的見地、價值的見地から見て、此れの間違つて居る事は言ふまでも無い。資本家による産業經營は、商業主義によつての産業支配だ。又同時に不勞所得者の存在認容だ。併し商業主義の産業支配は産業従事者の労働より人格性を奪取する許りでは無く、労働生産物の品質を俗惡無趣味のものにする。不勞所得者の社會的存在は人間の正義感に矛盾する。此くして労働運動は一の人格運動だ。價值追求の運動だ。文化主義實現の運動だ。苟くも人間に價值的見地を認容するものは、労働運動に此の意義を認めざるを得ない。賃銀制度の廢止と労働者による産業の自治は、人道的に見て全く正しい、天地に恥ぢない公道を進むものだ。

今や労働者の新要求は、人道の深底に基礎づけられた。此れに反對す可き口實は他に與へられて居ない。併し此の新要求の實現は、即ち舊社會秩序の徹底的破壊である。新社會秩序の理想的建設である。労働運動は天地の公道を濶歩して、其の處女地の開拓に進む。我々は此の正しい武者振りを讃嘆する。彼等には其れだけの實力もある。何人も彼の途を阻止する理論根據を持たず、又事實に於て其れを爲すだけの實力を持たない。

七 勞農露國の實驗的刺戟

私は最後の要素として、一節を勞農露國の實驗の問題に割かう。

我々のヴィジョンが其の何れの端に於ても一の實驗例を示して居ない場合には、ヴィジョンの懷抱者にヴィジョン實現の心熱を與へることは割合に困難だかも知れない。併し一旦其の何れかの端が幾分の事實的耐久性を示したとすると、形勢は俄然たる變化を示す。今其の場合は勞農露國の現實的成功だ。私は此處でレニンの遣り方や、其の革命的理論に就て批評を加へよう欲しない。(其れは後章の題目である。)併し今の場合、勞農露國の革命は、多くの宣傳的誤報にも拘らず、事實的に立派に成功して居ると明言しよう。從來の何の革命が齎らしたよりも、以上の、

或は比較の取れないほど高度の精神的勇氣と事實的改造を、露西亞人の生活に加へたと斷言しよう。世界の勞働者は全般的に此の革命に賛成して居る譯で無い。否寧ろ或るものは之れに反對の氣勢を擧げて居る。其の反對者が勞働者自身の利害を尊重する程度は、彼等革命者に比して何等の遜色を持たぬ。併し其等の反對は主として新社會秩序を齎らす爲めの手段の上に向けられる。無産者が無産者自身の手で成功せしめた新社會秩序なる點に於て、世界の勞働者はすべて等しく勞農露國の成功を祝し、且つ其の完成を仰望する。其の點で彼等の露國に對する態度は全く一致したもものになつて居る。

舊世界秩序に固執する現在政治家に取り、露國の成功は偉大なショックを與へるものだ。併し彼等は最初此の現實から眼を外らし、故意に其の方向へ注意を拂はない素振りを示した。或は其の間に露國の形勢が一變しないものでも無いと考へたからである。けれども露國は依然として生長する。其處に何の凝滯も無い。次に彼等は露國內の賭博者や野心家の後押しをして、其の爲めに幾分か勞農組織が動搖するに至る僥倖を待たうとした。けれども露國は依然として生長する。今は勞農組織其の物に反對する世界の評論家でさへも、兎に角現實の露國をよりよき方向へ進める爲め、勞農共產主義を發達せしめて行くより外に途の無いことを認容し、勸説する様になつた。最後に彼等は、彼等自身の舊世界秩序を支持する上から見ても、勞農露國を仲間入りさせ、

此れに相談を持ち掛けるより外に策の無い事を氣付き始めた。露國は愈々益々生長する。其れが現在の状態だ。歐洲經濟生活の徹底的復興を計る爲めに、舊政治家は勞農革命首腦者を招致するの必要を感じ出して居る。

結局のところ聯合國政治家は彼等に讓歩し、彼等は聯合國政治家に讓歩するところがあらう。妥協といへばやはり一個の妥協だ。併し英佛獨の經濟的復興の立場から見て此の外に良策は無いし、又露の將來の生活危険防止、共產主義社會完成の立場から見ても其れより以上に好手段は無い筈だ。世界歴史の進展の上に我々の描く事の出来る面白さは此れからだ。妥協は妥協でも其の協約者は、一は水、他は油だ。舊社會秩序と新社會秩序とは、其れを支配する人生觀の質を異らしめて居る。此の二を加へて等分したところで、平均の社會組成原理の生れて來る道理は無い。現在のところ新を進めるものには七分の強味あり、舊を維持するものには七分の弱味がある。何故なれば新は人間性の合理的深底に其の改造礎石を据ゑたから。此れが破壊を計畫するものは人道に弓を引く虚偽者である。見て他が許さないのみならず、自らも亦理性化せられて其の行爲を恥ぢる。其處に足場のぐらつく根拠がある。時勢は舊式政治家に對して有利で無い。

勞農組織の基礎は愈々鞏固に、愈々堅實になつて行く。世界の勞働者は其の一步々々に歡呼の聲を擧げる。そして彼等も亦其の成功の跡に追隨して、自らの要求する産業自治の實績を收めよ

うとあせり出す。至るところの労働運動の氣勢が、今後は力を強めて来るに相違無い。聯合國の政治家は、露國を仲間入りさせるには露國に對し宣傳禁止の口止め策を取らなければならぬと思つて居る。併し宣傳の必要なのは最初の未熟時代だけだ。事實に於て盲く行つて居れば、事實以上の好宣傳者は無い筈だ。勞農露國の幹部は其れ位の事を最初から知つて居る。露國の共產主義社會は、最早如何なる力によつていも破壊させられないものだと思つれば、露國の存在する事自身が世界の無産者に對して此の上も無い刺戟であり、隨つて資本家階級に對して此の上も無い脅威である。英國のメラアは言つて居る。露國は今日全資本主義を脅かす。而して到る處に、世界の二大勢力、即ち労働と資本主義との間の敵對を激成した。ボリシェヴィズムを壊滅せしめる事が今や到るところの資本主義者に殘された唯一の希望である。私は此れを至言だと思ふ。

農農露國の理想や其の取りつゝある手段に就て今私は何等の批評を下さなかつた。併し勞農露國の壊滅は世界の資本主義者の取る可き最後の希望であると思つた。又勞農露國は今後容易に顛覆させられず、其の基礎は益々確實となるが故に、此れが顛覆を待つは寧ろ夢想に過ぎぬと思つた。然らば世界に於て舊社會秩序の維持を計る人は、凡そ人爲の所作として最も困難なる途を選びつゝあると思はざるを得ない。世界の改造はあらゆる妨害にも拘らず已む無き大勢だ。いや其れは理論に於ては無く、事實に於て否定出来ない進行だ。誤解を恐れて附言するが、私は此處で

改造せられた社會が露國の如くなる可しとは何等言明して居ない。此の事實の直視によつて、新社會秩序の建設が必然の大勢なることを我國の有識者に訴へるだけである。

八 社會改造は避く可からず

以上私は數項に互つて、大戰後の歴史進行を敘述し、社會改造の止む無き事を指摘した。私は今舊社會秩序と、新社會秩序との理想的優劣を述べない。たゞ事實は舊より新への推移の避く可からざる趨勢を語る。(1)歐洲經濟生活復興の不可能。(2)期待するを得ない獨逸賠償金への過當信頼。(3)國際聯盟及び華府會議決議の無力。(4)労働者の勃興と其の新要求。(5)勞農露國の現實的實驗の刺戟。我國の舊式政治家は、此等の事實の僅かに一つをでも如何に理解し、更に其れに如何に對策しようとするか。

舊式政治家の日本改造策を計畫す可き時代は過ぎた。勿論彼等が我國の進歩に全然貢獻しなかつたとは斷言しない。否寧ろ開國五十年の過去に於ける彼等の功績を私は少しく過當にさへ見積もるものである。現在の過誤を責める爲めに、過去の功勞を無視するのは正義的で無い。併し彼等の施設は其の過去に於て意義を發揮し、現在に於て全く無力に歸した。青年は卓越した理論と、不動の實力を持つ。國民は全然此れに信頼して可なりだ。

新階級
階級
日本
の
道
義

併し彼等は其の死力を盡して自己の立場を支持し、國民の前に歴史の進行事實を蔽はうとする。世界は大戦を境界として全く一變し、其の兩端に於て文明の有する人生觀、價值標準、社會感情を異らしめたこと、社會の變化は量的の其れで無くて全く質的の其れであることを、すべての國民が落着に信じて居ない。我々は現在の日本を改造する爲めに、先づ此の信念の改造を爲さねばならぬ。併し理論は國民の前に或は蔽ふ可くも、事實は時間によつて解決せられるから、最後まで蔽ひ盡せる譯合ひのもので無い。國民は次第に舊政治家の行動に幻滅を感じ、新社會の建設聯盟へ加擔する。スノウデンは、現代社會的不安の一般社會へ擴がつて行く原因として、次の六つを數へ、此等は全く不可避の現象であり、其の不満は必然的に新社會秩序の建設へ進まざるを得ぬと論じた。其の原因とは、(1)すべて資本主義國家の勞働階級の中に於ける産業的組織。(2)解放の擴張。(3)通俗教育。(4)安價なる新聞。(5)勞働者階級の國際的聯合。(6)社會主義的宣傳。如何にも此等の一者といへども、時代の進歩に伴ふ必然の現象であり、何人の力によつても阻止出来ないものだ。社會のすべての人間は此等の影響の下に、次第に舊社會秩序の奇術的機構を知り、新社會秩序の合理的組織を憧憬しないでは已まぬ。例へば其の一項「安價なる新聞」に就て見れば、現在の新聞は濃厚に資本主義的色彩を擔つて居るにしても、全然的には世界の大勢を誤報する譯にいかず、又此の改造形勢を無視する事が出来ない。其の論說で舊社會秩序支持の御用論

を爲せば、國民の一部は却て其の論の裏を見て、其れと反對の自信を持つまでに進んで來た。例へば新聞が社會の有産階級に阿附せん爲めに、富豪の庭園住宅の壯美を示した寫眞を掲げたり、舞踏の如き貴族的娛樂を讚嘆した記事を載せたりすれば、讀者の中の無産階級は最初は古いブルジョア心理から、此等に一の嫉妬感情を感じるだけで済むけれども、時代の進むに伴ひ、嫉妬は反感となり、反感は自覺となつて、新社會組織の必要痛感となる。此の自然的趨勢を、何人も阻止することが出来ない。他の五項目に就き、一々同様の事が言はれる。社會の改造、新社會秩序への仰望は、事實的に否定出来ない。其れへの現行進展は、國民の前に蔽ふ事が出来ない。すべては歴史の時間が決定する。

然らば舊社會秩序と新社會秩序とは、其の如何なる點に差違ありといふか。此等二社會秩序の有する人生觀、價值意識、社會感情の全然の質的相違とは何であるか。

世界秩序變化の原因

一 世界混沌の原因

我國に於て、社會改造の論議は一向に信望が無い。新聞雜誌の表面に其等多くの言説を見、又熱狂的に、或は寧ろ焦燥的に改造宣傳運動に努める。一部の無産者青年を見たといふものゝ、國民大部分の實生活に這入れば、社會改造は、彼等により、要するに概念の遊戯だと見られて居る。國民の代表者の集合と稱する帝國議會に行はるゝ論議を見ても、彼等議員の或るものは、いかにも其の運動に同情を持つらしい議論をするけれども、衷心に於ては此の運動への何等の執心も無い。國務大臣は近時の思想動搖を指示するに止めて、此れに對する措置對策を語り得ない。要するに彼等は世界改造の已む無き大勢を知らないのだ。其れ故今日我が日本の改造を計畫するものは、何より先きに此の必然の大勢を語つて、我が國改造の不可避なる運命を、國民の腦裏に印刻しなければならぬ。

私は其れだけの目的を腦裏に描き、前節ではやゝ詳細に、世界改造の事實的、大勢を敘述した。

然り、其れは單に「事實的」の敘述であり、其處に何等の理論的解明も無かつた。事實は事實として其のまゝに容認せざるを得ないものだ。私の見る處では、全歐洲は、今や戦前と戦後と其の立つ所以の文明の基調を一變せしめた。改造は避けられぬ運命だ。次に解明すべきは、此の事實的大勢の背景に潜む理論である。何が故に、歐洲は此の如き改造の必然に逼られたか。歐洲の秩序の混沌が戦前の公理の上に立つては復活し得ない理由は何であるか。私は今其の解明に努めて、益々強く國民の決心を動かして見たい。此の理論に二種類ある。其の第一はなほ一層事實に接近したものであり、現社會の政治的經濟的組織の前提其のものだ。其の第二は、其れよりは一層遠く事實から離れたものであり、現社會の文明を支配する人間の人生觀其のものだ。此の兩者は、共に必然的に現社會の根本改造を由來する。大戦は僅に其れの機會を提供したに過ぎない。

世界全體が改造の必然に逼られたといつても、其の氣運の緩急は國により同一で無い。例へば我國の如きは、現在の儘を以てしても尙ほ將來可成りに長い期間、根本改造の必要を痛感しなかつたかも知れない。米國も亦割合に痛痒を感じない立場にある。何故なれば彼はよし歐洲戦争に放資した全部の資本を回收し得なかつたとしても、米國全體の社會として見れば、其れが爲め國民生活に何等かの變革を加へさうに無いからだ。たゞ此處に已むを得ざる改造を逼られて居るのは大戦當事者としての歐洲諸國だ。近時、歐洲經濟混沌の恢復法如何は新聞雜誌に著書に熱心に

論議せられるけれども、如何なる經世家批評家も、現組織のまゝを以てして恢復の可能である方策を發見し得なかつた。國家政治の幹部である有力政治家も亦其の大勢を容認せざるを得ぬ。歐洲の社會混沌は救済出來ない。社會組織の根本改造は此の數年の中に逼迫するが故に、今にして根本治療を施さなければ、其の時に臨みより以上の無秩序混沌を招致すると忠告する批評家は頻々として現れ出た。

此等歐洲諸邦の混沌の一例として私は今英國の場合を顧みたい。何故なれば英國ほど適切に舊世界秩序の公理の上に立つて從來の國策を動かし來り、大戰後又痛切に其の前提の缺陷を意識したものは少いから。蓋し英國の歴史發達と地理状態に緣由するのである。佛國は舊世界秩序の無理押しを爲して、新世界の展望を何等有しない。彼にあつては舊世界秩序を失ふことが即ち國家としての佛國を失ふ事だ。獨逸は英國に後れて、英國の取ると殆ど全く同じ組織前提を採用し、彼の克己勤勉を以てよく英國と競争し來つたが、其の前提の壊滅を教へるものは其の前提自身では無く、實に今回の大戰であつた。此處に於てか、一典型としての、戰前戰後に於ける英國社會組織の前提を研究することは、即ち世界全體の社會組織の其れを考察することになつて居る。

二 英國の經濟生活基調

人生觀の根本基調を共通ならしめる處より、私は平常英のアーサー・ジェー・ペンティイの所説に推服す可き多くの意見を見出すものであるが、英國の經濟的混沌の原因として最近ペンティイの擧げたものには、私も亦殆ど全部的に同意する。此處に述べることは、同君の意見に負ふところ甚だ多い。ペンティイは現今英國の社會を診斷して、若し英國が現在のまゝの國策を支持し、何等か此れに根本的の變革を加へない限りは、英國の飢餓は慢性となり、ポリシエグイズムは全然的に蔓延し、偉大なる變革を已むなくせしめられる、そして其の状態の到來は英國の取る此の二三年の態度によつて定まり、其れを經過すれば救済は全然可能で無い、といふ意見を主張した。

英國は大戰前、經濟的には如何なる方策を以て、其の國民生活を維持して來たか。英國國民は先づ自己の消費する食料を何處よりか齎らし來らねばならぬ。此の場合英國自身の生産する分量は、英國國民の全部の生活を支持するに足るものでは無かつた。否寧ろ彼等は、近代的には其れよりもより一層有利なる經濟的生活方針を發見したが故に、積極的に此の後者の方針へ信頼し、其の途を猛進し、食料の生産に努める事が少くなつて了つたのだ。其の所謂近代的なる經濟的生活

方針とは次の如きものである。産業革命は英國産業状態を一變せしめた。英國の實業家は頻りに其の工場を擴張し、此れに大資本を注ぎ込み、新式の機械を採用し、主として工業的加工生産に従事した。農業は自然的要素の支配を最も多く受ける。資本より生ずる利潤の回收期には一定の限界があつて、其の循環を人為的に早める事は或る程度以上不可能だ。工業には此の憂ひが少ない。茲に於てか英國の實業家は、農業的原料生産を廢して、工業的加工生産を全經營の根本方針にした。彼等は世界の各地より原料品を購ひ來り、此れに彼等の資本的要素を加へ、自らの大工場組織に移して、加工生産を爲す。此の加工せられたものは再び世界の各地に輸出せられる。即ち彼等の經濟的努力は、自己の資本と大工場の組織の網を潜らすに、世界の原料品を以てする事だ。資本は其の場合偉大なる利益を生む。此の利益の一部は自己の食料費となり、外國への輸出品と相殺し、英國は其の食料の殆ど大部を外國に得る。なほ殘額の利益金は其の儘に放置せられる事無く、否な寧ろ資本の性質として其の儘に放置せられることが出來ず、再び資本として同様の目的の事業に投せられ、英國の産業組織の規模を一層大なるものにするか、然らずんば内地外の諸地に放資せられて、此處に新らたに英國産業組織の分枝を見ることゝなつた。我々の資本は經濟行程上に投せられるや否や時間の経過と共に絶えず増殖するは、其れ自身の根本的に持つた約束だ。英國は尙ほ其の偉大なる海運と銀行業とを以て世界の經濟に貢獻し、其れによる収益は此

れ亦大量の資本と化し、英國人の放資力を増大せしめた。

約言するに英國人の生活は、自らの大工場組織と及び世界の各國への仕事の勤勞とによつて維持せられ、此れと食料品との相殺によつて生ずる價值殘額は、再び必然的に此の經濟生活の増大を來さしめるのだ。英國の政策が國際的になつて來るのは、右の根本豫定に鑑み、此れ亦必然的の経過だ。我々は其の立國の方針を國際的工業主義といふ事が出来る。併しよりよくは此れを國際的商業主義といふが當つて居る。工業は實業家の直接目的で無い。其れは單に資本の能作に永遠の加速運動を與へる手段物だ。根本原理は資本の流通による自己自身の増殖だ。資本が流通すれば利子を産むとは、全く歴史的行程に生じた一個の人間約束に過ぎないが、一旦其の約束の成立した以上は、其の流通を出來るだけ敏活ならしめる事が、此れ亦必然の人間約束である。然らば英國の取つた立國方針は、大戰前の公理が無條件的に許さる可きものだとするれば最も賢明妥當の其れであり、列國の羨望に値する。事實に於て、英國以外の歐洲諸列強が亦此の經濟的生活方針を採用し、追究しようとする。各國は激烈なる商業戦を續けた。商業戦は科學の進歩を刺戟し、資本の流通期間を短少ならしめる多くの機械や化學的方法やを發明應用した。若し其の競争が何等の障害も無く今後永久に繼續せられたとすれば、世界全體の投資額はどれだけ莫大のものになつたか知れぬ。又此の投資機關の生産する貨物の數量は、此れ亦如何ほど莫大な數量にのぼつた

か知れぬ。英國の交通労働組合幹事、ロバート・ウィリアムスの言つた如く此の大量の貨物生産は、社會主義的社會にあつてこそ何等の支障も無く繼續せられるであらうが、消費者の經濟的購買力（自然的購買力では無い）を顧慮しなければならぬ現組織にあつては、自己の立脚する商業主義自身の足場を危険ならしめるものだ。

76

三 大戦による戦前公理の壊滅

此の危険が刻々、加速度を以て我々の眼前に通り來つた時に起つたのが歐洲大戰だ。英國は、自己の商業主義自身を擁護し、維持せんが爲めに、此の大戦を戦ふ。併し其の大戦を戦ふが爲め、英國の經濟生活は刻一刻と危機に陥つて了つたのである。

英國は先づ、其の工場能率の可能限定を擧げて武器彈藥の製造に努めた。所謂工場動員が行はれたのである。工場動員は誰れが見ても讚美す可き方策では無い。併し戦争繼續の焦眉の急は、如何なる悪方策をも其の可能なる限界度にまで採用せざるを得ぬ。此の結果は、普通の貨物の生産減退だ。英國がより、一層軍需品の供給量を増大せしめ、戦争に於て有利なる立場を獲得する時は、彼が其の普通貨物の生産減退によつて經濟生活の危機に陥つて居る時だ。輸出は減少し、輸入のみ増大する。其の輸入超過を決済する爲めには、彼は國外放資を手放して、此れを代償にす

る外の途が無い。英國本來の經濟生活の前提である商業主義に龜裂が出來た。其の他面には、彼が從來各國經濟生活に貢獻して其の報酬を得、商業主義の大いなる資源と爲つて居た海運や銀行業にも龜裂が出來た。自國の船舶は、戦争の慘禍の爲め其の数を減少せしめ、或は軍事上の目的に供せられて居る間に、戦争に直接關係の乏しい國の船舶は著しい比率を以て其の数を増大せしめ、英國從來の航路を奪つた。經濟生活の危機に臨んだ國家の銀行が信用を有しないのは當然であり、信用經濟界における英國從來の地位は、全く米國によつて取つて代られた。

併し此れは戦争の爲めに起きた消極的の現象だ。英國は更に其の國家の安危に關する死力戦の爲めに、國家の全資力を擧げて積極的に軍事費を消費しなければならぬ。此の爲めに國家は多額の租税を國民に負擔せしめて、直接に其の生活を劫かし、加ふるに長期の國債を募集して、其の惡負擔を將來の國民生活の上に及ぼさしめた。餘剰収入と貯蓄とは消費せられて餘す處が無い。併し其れだけでは尙ほ歐洲大戰の全費用を償ふ事が出來ぬ。此の缺乏の部分が歐洲全體を通じての不換紙幣の濫發である。信用と通貨とは、從來會つて見た事の無い程度に膨脹した。物價は天井知らずに騰貴した。外國爲替も亦其の同じ法則の支配を受けて奔騰し、其の經濟生活は二重三重に不利益のものと化した。

此くして招來せられたものは戦後の經濟恐慌である。彼の經濟前提を以て此の戦争を爲せば、

77

現時の恐慌を招來するは不可避的の運命だ。そして英國の苦みの理由は其のまゝに佛獨の苦みの其れだ。事實的に中歐諸國は遙かに英國以上の苦惱を経験して居る。要約するに、恐慌は次の如くにして起つた。歐洲には原料と食料とが無い。此れを得るは露國と及び歐洲以外の諸國に於てゝあつた。前者に對しては自ら此れを封鎖し、後者に對しては、此れより供給せられるものと交換す可き自らの生産品を有しない。換言すれば、歐洲は戦前に有したる資本の全額を失ひ、剩へ資本を外國より借款して、其の商業主義の趨勢を全く逆ならしめた。彼等は自らの消費する食料品をすら得る方途を失つた。のみならず彼等は戦争の爲め、直接的に、其の生産能率を極度に減退せしめた。農場と炭田は破壊せられ、機械は銷廢し、人間は不健康になつた。又よし彼等が戦前の大工業主義を復活し得たにしても、戦前の原料國は、大戦中の經驗により獨立の工業國に化し、原料品は今や歐洲の産業網を潜る必要を持たなかつた。資本を失つた時は、歐洲が其の立國の方策を失つた時だ。歐洲人は其の商業主義の生む過剰價值によつて食料品を得ようとしても、次年の産業に費消す可き原料品購求の資力を持たない。爲替關係は日一日と惡化せざるを得ない。

現在英國で苦んで居る焦眉の問題は失業者の措置だ。其の數は著しい比率を以て増大しつゝある。併し政治家も實業家も、結局は袖手傍觀するの外は無い。戦時中國家へ忠實に軍需品生産に

骨折つて居たものが、其の報酬として得たところは失業である。労働者は國家と資本主義とに根本的の呪咀心を懷いて、社會革命者の群れへ轉籍する。失業は全労働者の賃銀を下落せしめる。資本家としては此の恐慌期に當然の措置だ。併し賃銀の下落は全消費者の購買力を減退せしめる。其の趨勢は又逆に生産者の方に向ひ、工場は全生産能力を一層退却せしめなければならぬこととなる。各人の消費生活を見るに、物價は高く、収入は此れに伴はぬ。今や其の状態は一時的のもので無く、次第に慢性症狀を現はし始めたのである。

此の恐慌生活の慢性は、必ずや社會組織の根本的的革命思想を生まないでは已むまい。たゞ其の徹底的の革命が僅かに露國だけで止まつて居るのは、僅かに人間の懐く保守的の人生觀の力である。人間の人生觀だけは一朝一夕には變改せられない。其れ故人間は此の堪ふべからざる恐慌生活の中にあつて、依然として戦前の文明に基調となつた人生觀に未練を持つ。現在の生活は堪ふ可からず、何等か新しい組織を要求せざるを得ぬとする感情の半面に、なほ不合理的に、執拗に、舊人生觀と離れられない何と無き感情が、多くの人の心理に残つて居る。其れが僅かに現社會組織を根本的に變革せしめない爲めの控制力となつて居る。併し其の感情は元來不合理的なものであるから、時間の経過と共に其の影を薄くし、舊社會秩序への控制は其の力を弱める。此の結果は急激的なる社會革命だ。此に於てか我々は、ペンテーターと共に、此の數年間の政治家經濟

家の態度が、歐洲の社會に革命を招致するや否やの分岐路になることを斷言して、國民に一の警告を發せざるを得ない。其の時に臨んで臍を噬むも、時は最早餘りに遅い。

四 生活の混沌と文明

ペンテラーの或る論著が、エチ・デイ・ウエルスの或る論著と全く對偶的の題名を取つて居る事でも明かなる如く、兩者の主張は其の要點に於て對極的に反對して居る。併し歐洲經濟の混沌の將來を豫測する場合に、不思議にも兩者の其れは、主たる論點を一致せしめることゝなつた。ウエルスも亦歐洲經濟生活の將來を悲觀する論者の一人だ。

華府會議に際し、ウエルスが一通信員として華府へ行き、日支米佛諸國の文明の批評を書いたことは世人の記憶に新らたなるものだ。其の中で彼は、舊世界の文明の破壊する形勢を次の如く論じて居た。歐洲は再び動き出す譯にはいかぬ。戰前の状態へ恢復する譯にはいかぬ。何故なれば世界の大部分の交換手段は全く不信用となり、使用す可からざるものとなつた。其れは舊世界の文明を破壊しつゝある直接物件だ。我々の全經濟的秩序は貨幣に基礎を置いて居る事を我々は記憶す可きだ。貨幣支拂によつての外は、大事業も、製造工業も、大農園も、鑛山も働き出す譯にいかぬ。物々交換は太古の遺物に過ぎない。歐洲の大都會はすべて此の貨幣の基礎の上に立

つて居るが、一朝其の貨幣が意味を失つたとすれば、彼のベテルブルグが俄然として壊滅に歸した如く、倫敦も巴里も柏林も、此等の大都會は、直ちに壊滅の運命を見るだらう。然るに實際歐洲の貨幣は其れの信用を失ひ、價值は動搖し、購買力は不定であり、人は貨幣の爲めに働かず、貨幣を貯蓄せんと欲せず、貨幣取引を尊重しない様になつたと。然らば此の批評も亦、私が先きに述べたと全く同一の趣旨を語つたものである。

文明の壊滅、勿論其れは何人の希願するところでも無い。ウエルスの批評には直ちに幾多の贊否論が現はれた。其中には樂天主義的の意見も幾つかあつた。例へば其の一つにフランク・クレインの批評がある。クレインは言つた。文明が勝利を得る、文明が今日困難より立派に浮び上がり得る事は自分の信念だ。其の點に於て予は一の樂天主義者だ。其れは事實や理論によつてでは無く、單に予の信念たる自然の宇宙的エナアジイの故を以て斷言するのだ。健康は病氣を、正氣は狂氣を、眞理は虚偽を、究極に於て打ち負かす事は、此れは自然の宇宙的エナアジイだ。併し此の意見は、現在の政治家經濟家の代表的の其れだと思つてよい。何故なれば多くの人間は、單に何等の理由も無しに健全は不健全を、眞理は虚偽を打ち倒して、如何なる難境も最後には全く除去せられるとする漠然たる信念を持つて居るものだから。此れを自然平衡の眞理といつてよければ、宇宙調和の眞理といつてもよい。其の虚偽如何に拘らず、人間の感情生活には、最も自

然的に受け入れられ易い。併し自然平衡の眞理は嚴密なる意味に於て毫も眞理では無い。不健康が健康を打ち負かすから人間は死ぬのだ。虚偽が眞理を壊滅せしめるから歴史の發展は其のまゝ歴史の進歩では無いのだ。歐洲經濟生活の場合に、同じく適切に應用せられたかごうかは大きな疑問である。

のみならず此の樂天主義には、一の重要な吟味が忘れられて居る。よし自然平衡の眞理は絶對の眞理だとしても、歐洲の舊世界秩序が健康であり、正氣であり、眞理であるか、其れが第一に我々には問題となる。若し此の秩序其のものが不健康であり、狂氣であり、虚偽であるとしたら、貨幣の上に建設せられた歐洲文明の壊滅は寧ろ賀す可き平衡だかも知れぬ。換言すれば舊世界秩序の壊滅と、人間の理想の壊滅とは同一物で無い。其れ故にフィリップ・スノウデンの如きは言つて居る。舊秩序は滅亡するが人間性は生き残る。そして今日存在する混沌と壊散の中から、社會保存の本能は、恐らくは苦惱し、匪勉して、よし今はなほ不完全にして動的なるにせよ、なほ人間の大多衆に向つて、より幸福なる、より豊富なる生活を提供する新世界秩序を發展せしめるであらうと。

私は嘗て現今社會に瀰漫する人心の不安を論じて言つた。其の不安は現實の社會秩序に對して言へば大いなる悲觀だ、將來の理想に對して言へば大いなる樂觀だ、現實悲觀は即ち理想樂觀だ。私は今も尚ほ其の見解を捨て得ない。

併し現今社會秩序の價值を判定する事は、私の議論の後の題目である。今はたゞ歐洲の生活に混沌の來つた理由を公平に考察すれば其れでよい。私は既にペンタイやウエルの批評を紹介したが、其等の批評は、現今經濟生活の前提其のものに、此の生活秩序の壊滅の原因を藏して居ると斷言する點に於ては、全く一致したものになつて居るのである。

五 資本喪失の危険

私は今此處で、現在社會の經濟秩序の上へ何等かの道德的批判を加へようと思はない。たゞ世界秩序變化の原因を明かにする爲めに、此の經濟秩序自身の立つ前提を分析して見るのである。此れを分析するには、種々の方法があらう。今は併し現在の經濟恐慌と直接の關係を求める事が出来るといふ立場に立つて、其の分析を進めて見る。此の分析の項目としては、第一、商業主義第二、國際産業主義、第三、大工業主義の三項を注意しよう。其れは本章の前節までに述べた事を、今一度概括して一般的に叙述する仕事である。

第一には、現在經濟組織のすべてを蔽ひ盡した商業主義の本質を分析し、其れ自身の中に現在文明を壊滅せしめるに至る矛盾が包含せられて居た事を考察して見よう。現在我々の所謂經濟生

活は、我々の能力の生産し、我々の要求の消費する、單に其れだけの生産消費を意味して居ない。其れは經濟生活の實質基底を爲すとしても、其れだけの事さへあれば經濟生活は成立したとはいはれない。此れだけの實質のものは、一の商業主義によつて支配統御せられて居る。換言すれば、其の實質は、あらゆる場合に於て貨幣關係なる表面形式を成立せしめて居る。そして貨幣は甲より乙への移轉に隨ひ、常に何程かの利子を産み得る。此の二約束が其の實質たる生活のすべてを蔽ふ。其れ故に我々の生産消費を眞實の經濟生活と言ふ可くんば、現在の所謂經濟は、既に其れに法律的統制を顧慮せしめた表面形式だ。經濟は法律無しには考へられないが、其の法律は必ずしも一定した制度形式を約束しない。現在の經濟生活は、此の制度形式の僅かに一種だ。さて若し現在の經濟組織が以上述べた二約束の上に成立して居るものだとすれば、我々が實質としての經濟活動を爲さうとすれば、形式として貨幣の移動が豫定せられる。貨幣は此處に資本といふ形式を得る。資本は現經濟組織の前提の上に立つた貨幣の一形式であつて、實質としての生産材料を意味しない。我々が此の地殻の物質の上に生息する限り、實質としての生産材料は、或る特別の場合に於ては無い限りは、絶無になるとは考へられない。そして又或る特定の材料の缺除は他の代用材料によつて填補せられ、全然に生産行程を破壊せしめはしないであらう。併し形式として資本は、何等かの關係で絶無になるか、或は又生産行程を起す原動力となり得ないほどの少

額になる場合を幾らでも考へることが出来る。其の場合には經濟の實質生活に於けるとは異り、此れの代用形式を求めることが出来ない。或は信用が其れの代用を爲すとも考へられるが、其の時には信用も實は資本の一種になつて居たのであり、或る全く新しい代用形式だとはいはれなかつた。形式として經濟活動の中止は、實質としての生産消費行動の全然的停滯だ。要言すれば、現經濟組織に於ては、一形式としての資本の缺除は實質としての生産消費生活を癱痺せしめる。實質として生産消費要求が其のまゝ、素朴に組織形式として經濟制度を表現するのでは無い。こゝに於てか商業主義に支配せられる現經濟組織は、其の至るところに危険なる陥穽を見出す。何故なれば、資本形式は、或る一人が偶然の機會に其の占有を失ふとは、甚だ考へられ易い豫定であるから。其れは一人に起る場合にも危険であるが、更に何等かの社會團體に起る場合には一層危険である。全然的に其の團體生活を破壊せしめざるを得ない。歐洲の經濟生活が今衝突した岩礁は其れであつた。

六 勞働者の自給

或る土地、或る材料、或る機械を以て、貨物を生産し、或る種類、或る分量の貨物を消費する。生産は我々の生産興味に應じての其れであり、消費は我々の精神的身體的必要に應じての其

れだ。此の場合我々は何等かの經濟生活を營んで居るけれども、其處には資本無く、又所謂勞働が無い。生産材料は資本だといはれぬ。興味に随つての生命活動は所謂勞働で無い。材料と生命活動とは、經濟生活の自由表現であり、所謂資本と所謂勞働とは、現在の資本主義、商業主義の前提に立つての術語だ。資本は人間の生命活動を拘束する法律上の形式凝結であり、狹義の所謂勞働は資本によつての制約換算を豫定する。勞働あつての資本、資本あつての勞働だ。其れ故に我々が經濟生活といつた場合、常に其れには二義がある。即ち眞實に我々が生産し消費する内容としての生活と、及び其れの表面を形式的に制約決定する法律形式としての其れとだ。本質的には、前者無くして我々の經濟生活なるものは無に歸するが、併し現實的には後者無しの前者は存在し得ぬ。資本と勞働とは、相關概念である。兩者の相關作用が我々個々人の經濟生活だ。國際的の世界經濟生活だ。

併し資本は、流通行程の中に這入つて利子を産出しなければならぬ。利子を豫定するが故の資本であり、此事無ければ、當初より資本形式は存在しなかつたのである。一資本は他資本の上に利子を負課せしめるかも知れぬ。負課せしめられた資本は、随つて又自己の成立意義を發揮する爲めに、自己の利子を他の何物かの上に負課せしめなければならぬ。併し我々の經濟生活は、資本と勞働の相關々係であつて、其れ以外の要素は此れに考へられないから、如何なる經濟

行程の末端も、勞働の上への利子の負課を以てする。即ち資本と勞働との相關は、勞働要素より資本要素への何物かの貢賦寄與によつて維持せられる。勞働が自らの作用を廢した時、我々の現實的經濟行程は其の輪道を絶縁せしめる。

此の相關々係は、現實の資本主義組織を成立せしめる根本前提であるけれども、其の前提は同時に又資本主義組織自身を破壊せしめる歸結である。此の自己矛盾は悲惨なる運命だが、併し白日の眞理だ。資本は其の利子を勞働の上へ一方的に負課せしめる。資本主は同時に其の周圍の甚だ多くの資本主と競争する。國家は商業主義の競争を無制限に許容し、且つ此れを保護する。其れが我々の社會の所謂「自由」である。資本主が互ひに商業主義の自由競争を爲せば、自然の勢ひとして自らの生産する商品を、出来るだけの安價で市場へ提供しなければならぬ。此の自由競争に資本主が勝利を占めれば、貨物の生産分量はいくらでも増加せられる事が出来、勞働者は其の資本主の工場に職を得、幾分の生活安定を見出す。此の意味に於ては、多くの資本主が勞働者に説示するところは眞理であり、資本家の利益と勞働者の其れとは平行する。勞働者は資本主の事業を何處までも盛大ならしめる様に努力しなければならぬ。併し其の平行が何處まで繼續せられるか。資本家が自由競争に勝利を占める爲めには、商品は其の競争に堪へ得る程度に安價とならなければならぬ。商品を安價ならしめる爲めには、資本家は出来るだけ其の生産費を減少せしめなければ

ばならぬ。生産費の減少は、一方では其の材料の安價なる事だ。此れは結局材料商品の安價だから、其の経過は今言つた事を繰り返す。材料を除外すれば、後には労働者の提供する労働だけが残る。即ち労働者は自己の労働を資本主に賣却する價格、即ち労働賃銀を出来るだけ低額に下さなければならぬ。此くして労働者は自己の労働者たる地位を存続する爲めに労働賃銀をば何等の限定無く低額に下すことが必要である。言ふ迄も無く此の賃銀低下は、其の極少に限界の無い事だ。商業主義の自由競争が、其の勢ひを激甚ならしめればならしめるだけ、此の傾度は著しくなつて行き、資本労働の相關々係は深刻のものとなる。

現在我國の労働賃銀は、大戰前に比較して概ねは高いものになつて居るだらう。然るに今日の如く景氣の悪い時には、賃銀の高いことは生産費許りを多額ならしめるから、資本主は何とかして其の賃銀をもつと低いものにした。然らば彼等資本家の中の所謂有識者は、此れに對する處置として何をいつて居るかといふに、殆ど一樣に其れは物價を下げる事だ。天井知らずに揚つた物價を下げることを要求は、今や單に消費者だけから出す、生産者としての資本家からも熱心に唱へ出されて居る。併し物價を下げるにはどうすればいゝか。彼等資本家によれば、商品の生産費を下げるより外の道が無い。即ち生産費の大部としての賃銀を低くするより外は無なのだ。此くして關係は一巡して了ふ。賃銀を下げる爲めには物價を下げることを要し、物價を下げる爲め

には賃銀を下げることを要する。益々不利益な立場に置かれるものは労働者だけだ。労働者自身としては物價の高い事は強ち問題にならぬ。何故なれば其の場合には此れに比例しての賃銀も高いものになつて居るからだ。大戰當時の状態は其れであつた。問題になるのは物價と賃銀との比率だ。資本家が他の資本家を打ち負かす爲めに、此の比率は労働者の立場に取つて益々不利益のものとなる。併し労働者は、少くも現在の社會制度にあつては、資本主あつての彼等である。彼等は資本主の利害と自己の其れとを共通ならしめる。労働者は現制度の下にあつては我れと自ら其の首を縊らざるを得ない。歐洲の經濟生活が今衝突した岩礁は其れであつた。

七 人間性の破壊

商業主義自體が、其の前提としての現在文化生活を壊滅せしめる傾向を含む矛盾として、私は既に二點を擧げた。第一には、現制度では資本形式無きところ何等の經濟生活も起り得ないが、其の資本形式の喪失は極めて偶然的に起る。其の喪失が大戰後の歐洲の如く、甚だ廣い範圍に互つて團體的に行はれた場合には、資本主義は壊滅の危機に瀕する。第二には、労働と資本とは對概念であるから、現制度では或る點まで労働者は資本家と其の利害を共通ならしめる。併し一旦

労働者が資本家の利益を計り、其れによつて自己の利益を維持することが出来るものとすれば、労働者は結局のところ自ら我が首を縊ることを爲す。此のことによつて資本主義に對する根本的懷疑が労働者の中に生じて来る。

最後に私は、商業主義自身が、其の前提として立つて居る文明の精神生活を壊滅せしめ、隨つて商業主義自體に對する根強い反感を一般民衆の間に喚起することをいつて見たい。

此の條項として擧げることの出来るものは澤山ある。資本主義的社會では、資本家は他の資本家と競争する結果、自づから其の資本額を増大せしめる。競争に勝つた資本家には、必然的に其の資本が増大するのみならず、又競争に打ち勝つたためには、彼は同様のことを爲さざるを得ない。此の如き資本集中の結果としては、時代一般に英雄主義が瀾漫する。他を打ち敗る爲めに其の手段を擇ばず、他を打ち敗ること自身が我々に快樂を與へる。或る人達は、現在の資本主義社會には、此の英雄主義の激烈なる競争心あるが故に社會は動的となり、沈滞を來さないけれども、其の競争の無い社會例へば社會主義社會の如きでは、人間は一般に怠惰となり、文明の質を低下せしめるに至るとさへいつて居る。併し其れは全くのところ、英雄主義心理の痼疾者から健康人を見ての迷信である。競争によつて産み出された文化と、文化自身に對する純潔の興味によつて産み出された其れとは、其の質に於ても又量に於ても、互ひに雲泥の相違を持つ。例へば

試験の結果の爲めにのみ勉強した學生と學問自身に對する興味に浸つて居る學生との相違だ。我々は今英雄主義病の慢性患者になつて居るから、此の批判を正しくは爲し難いだけだ。

次に商業主義の興隆は、我々の生活に價值換算を起す。我々の文化生活は、學問、藝術、宗教等、其れ々々の方面に隨つて其れ自身の價值を持つて居る。價值は其の生活に固有の理想だ。人間生活は深刻にして廣汎なる領域だ。たゞ一種の價值のみが全體を決定するは、生活を一方的的のみ決定して、より深刻、より廣汎なる生活を、甚だ俗套、甚だ狹隘ならしめる事であるのみならず、自律的なる可き價值の本質に甚だしい傷害を加へる。現在の商業主義が現代人の生活上に其れを爲す。歴史的經濟價值の僅に一種に過ぎない貨幣價值は、現代生活のすべての價值を決定して居る。人生争闘は即ち價值争闘だ。其處に價值聖域恢復の十字軍戦が起る。

又商業主義は贅澤と濫費を生ずる因となる。蓋し資本制度に必然的なる過剰生産は、必然的に或る社會人の贅澤と濫費を生み出さざるを得ないからだ。併し文化人の文化享受は、或る時處位に關係しての或る限度を持つたものであり、過剰享受は寧ろ單純高尚なる人間性を傷害する。更に商業主義は生産者より生産自身に對する興味を奪取する。人生は意義ある創造苦痛では無く、生存の價值無き機械苦痛である。結局するところ商業主義は、現代人の人間性を、愈々益々粗質ならしめる。其の傾度は、商業主義發達の加速度に伴つて、近來甚だ著しい加速度を示す。

此の究極は、商業主義自身に前提としての現代文化生活をば根本的に壊滅せしめることとなる。歐洲の經濟生活は今衝突した岩礁は其れであつた。

八 個性的地方的要求の滅却

商業主義の分析を以上に止め、第二には國際産業主義の分析を試みよう。商業主義は即ち國際産業主義では無い。併し前者の發達は必然的に後者の興隆となつた。今やすべての産業は單なる國家經濟の其れから國際經濟の其れに轉化し、隨つて現代文化の本質と分量とに大いなる變化を與へた。

併し國際産業主義自身の異常なる發達は、寧ろ現代生活に大いなる危機を齎らして居る。第一に國際産業主義によつては、人間本來の性情である個性主義、地方主義に矛盾を來す。其れは生産と消費の兩者に於て共にさうだ。人間が其のすべての活動に於て他と異なる特質を持つたもの、換言すれば個性的地方的のものであらうとする事は、或る價值的立場より肯定の出来る當爲である許りでは無く、實は我々の自由要求に根ざす必然的の人間性情だ。産業が國際的に經營せられる場合には、一面では我々の文化生活は個性的、地方的に其の内容を豊富にする。生産消費の兩者に於て其れがある。例へば或る藝術裝飾の天分を持つた家具製造人が、狭い範圍の消費者

を顧客として生産するとすれば、其の製造品の種目と分量とには一定の限界が置かれる。或る最も個性的地方的の生産は、其の仕事を廢せざるを得ない。然るに産業が國際的となれば此事は或る程度まで克服せられ得る。又例を消費に取るならば、我々の消費生活は、其の取引範圍の擴大せられるに伴つて、其の内容を豊富ならしめる。例へば、孔雀の羽毛、金剛石等は我々の生活範圍では絶対に得られる希望無く、綿、羊毛、皮革、機械、石炭等は、よし我々の範圍で得られるとしても、其の分量に限界あり、其の品質は劣る。産業の國際的なることは、其の生活缺乏を補ひ得る。兎に角國際産業主義が、我々の生産消費生活を量質の兩面に於て擴大する大功を、我々は没し去らうと思はない。併し他面に於て、國際産業主義は我々の文化生活の個性的地方的を破壊する。生産消費の兩者共にさうだ。我々の生産品は、其の價格が安價なるため、其の生産費が少額なるため、其の種類に多くの個性を帶ばしめる事が出来ない。其の個性の種類は或る少ない一定數のものに限られる。そして此の生産の間に分業行はれ、一種目の生産者は、生涯たゞ其の同一商品を生産する。即ち生産は個性的地方的である事が出来ぬ。消費者は、出来合ひの某々種類の商品を購入ふやう、或る少數の種目に就き選擇せしめられる。即ち、消費に於ても個性的地方的は顧慮せられない所以だ。生産を支配するものは資本家である。資本家の唯一標準は其の商品の多額に賣れる事だ。多額に賣れるものは甲乙の極端に赴かない中間平均のものだ。即ち我々

の市場のすべての商品は、個性的地方的の中間平均を焦點として集中せられるから、我々は我々の個性に順應せしめて生産し消費することが出來ず、國際産業主義に立つ資本家の選擇した中間平均に向つて我々の生産消費興味を凝集せしめなければならぬ。此くして我々の國際産業主義は、或る一面では我々の生活の個性的地方的に鮮奇なる内容を供給するけれども、他面では我々より其れを奪つて居る。此の加増と、此の減殺と、何れが力強いかは一概に定められないが、併し以上の關係の原則としては、生産消費の脱個性的脱地方的傾向がある。鮮奇の内容として我々の生活の豊富にせられた部分も、要するところは此の中間平均者である。其れ故原則的には、我々の個性的地方的特質は、其のまゝに表現せられて現實の生産となり、消費となるのでは無い。

九 地方的自律と國家組織

次に國際産業主義によつては、生産及び消費の地方的自律が失はれる。限られた或る範圍が、何等かの偶然的機會に、其の範圍自身の産業生活を自律せしめなければならぬ場合を持つたとすれば、此の範圍内に生息する住民は、即刻彼が産業を壊滅せしめ、其の甚だしい場合には飢餓の危険に瀕することゝなる。歐洲は現に其の場合に面して居る。

商業主義的なる現在の國際産業主義は加速度を以て各經濟生活範圍の地方的自律を奪つて居る。或る地方では綿絲紡績だけで立ち、他の或る地方では鐵機械業だけで其の生活費や餘利利得を得る。此くしなければ、資本家は國際的に他の資本家と競争する事が出來ぬ。併し此の組織の下では、我々はいかにしても國際的に此の産業結合を破壊せしめることが出來ぬ。利益本位の現在經濟人は、其の必然性に隨つて、一應は此の産業結合へ執着する。併し産業結合を法律的に制約し得るは國家の範圍内だけであり、其の力は國際的に及び得ない。其れ故此の國際的結合を破る機會は甚だ頻繁に來る。一旦此の結合が破れれば、再び其の結合の成立するまでに可成りの時間の経過を要する。國際産業主義の罅裂の續く長い期間、彼等の生産物は捌け口無く、彼等の消費は輸入口を杜絶せしめる。此の期間の長さによつては、國民生活の弾力性は其の眼界を破り、國民は眼前に自らの飢餓を見るのである。

最後に、國際産業主義は、其の發達傾向の自然に隨へば、現在の國家組織と矛盾せざるを得ない。我々は先づ、現在の資本主義が國家組織と不可分離の關係に立つことを知らねばならぬ。蓋し資本主義は一の制度だ。社會生活の組織的拘束だ。制度と拘束とは何等かの法的規定を豫想する。社會生活の上に法的規定を爲すものは、現在のところでは國家だ。資本主義と國家との關係を内容的に見て行かないにしても、單に形式的に考へてさへ兩者の間に此れだけの不可分離的結合がある。併し國家組織の前提に立つた所謂經濟生活の自然的醱酵である國際産業主義は、其の

發達と共に、世界の經濟生活の上に國家的限界區劃あることを不都合だと感じ始める。今や其れは單なる感情から嚴密の理論に進んだ。けれども見よ、現在の經濟生活様式である資本主義自身は、本來國家形式を前提として成立するものでは無いか。二者の間には理論的に全く必然的な相關々係を成立せしめながら、國家形式の發達が極度に進めば、國際産業主義を害し、後者の興隆が極端に至れば前者を傷害する事となつた。現代經濟生活の内部的矛盾は根柢深い。

一〇 大工業主義

私は最後に、第三の要素としての大工業主義自身が現代生活の上に加へる傷害と矛盾とを指摘す可きところに到達した。併し此の項目は、今や餘りに多くの闡明を要しないほど、社會一般の常識となり、且つ實感となつた。其れ故に私は此の項目の爲めに多くの時間を費さうと思はない。

人間は科學と機械とを發明して自然を征服したと思つた。併し其の科學と機械とを手段として自然を征服する爲めには、人間は更に其の科學及び機械の手段となり、此等の爲めに征服せられざるを得ぬ。眞に機械を使役するものは其の機械の所有主たる資本家だけだ。労働者は、たゞ此の機械が複雑なる組織を立て、人間を壓服し、彼をして疲憊せしめる工場の中の、工場の爲めの

一手段だ。併し資本家と労働者の數の比例はそれだけのものだけだ。社會人の大多數は機械のために手段となり使役せられて居る種類のものである。結局のところ、大工業主義の發達によつて人類は其の機械の犠牲に供せられた。人間の文化は質的には高級のものに進んだとしても、量的には、精神的にも身體的にも現代人を甚だ著しい程度に傷害して居る。人間は粗質になつた。其の生活は單調になつた。

更に大工業主義は其の自然の勢ひとして大量生産をなさざるを得ない。我々の經濟生活が、私有財産制度で無い他の其れの上に立つて居たとすれば、我々は寧ろ此の結果を賀す可きである。何故なれば其の生産品は潤澤に我々の生活へ供給せられ、我々の生活は豊滿せられたものになるであらうから。併し此の大量生産品は、現在制度では貨幣價值との對照の均衡を失して居る。過剰供給は其れに伴隨する需要を缺いて居る。詳しく言へば心理的需要は少しも缺乏しないが、經濟的需要は其の供給と相撲を取つて行けぬ。此のことよりして我々の社會では種々の忌む可き現象を惹き起す。商業主義の競争が其れだ。捌け口を國外に求めての植民地略奪競争が其れだ。其の結果としての弱國民の壓制が其れだ。其の結果としての商業國相互の戦端開始が其れだ。商品の粗質と賃銀の低下が其れだ。世界の上よりの無秩序なる原料銷盡が其れだ。人間生活は低質となり、世界の文化は行き詰まり始める。

以上の叙述は、すべて嚴密に科學的態度に止まつての其れだ。世界秩序變化の已むを得ざる理由は、悉く政治的經濟的に現示せられた。言ふまでも無く私は此の變化の理由の上に何等の倫理的價值批判を加へて居ない。次に私は其の第二の理由に現代人の有する人生觀を擧げて、此れを次章に叙述し論評して見たい。併し其の問題を除外したにしても、兎に角現在の世界秩序、社會制度は、現在のまゝでは維持し得られず、其の進展は必然的に自らを壊滅せしめるに至る運命にある事を、我々は日本社會觀の最初に當つて固く信じたい。結果は豫定せられたのである。我々の的は其の結果を無視した時に何の意義をも持つことが出来ない。

第四章

現今社會人の人生觀

一 人生觀の内容

資本主義の經濟制度は、必然的に資本主義制度自身を壊滅せしむ可き要素を其の中に包含すると、私は前章で結論した。即ち全歐洲を蔽うての秩序混沌、否な寧ろ全世界を蔽うての現今經濟恐慌は、其れに先立つ資本主義全盛の必然的歸結であり、世界資本主義の發達は歐洲大戰期に近づくに隨ひ、異常の加速度を示して居たのである。トロツキイの研究によると、過去百三十八年の間に恐慌と盛況との循環週期は、略々十六回になつて居るが、此の一高一低の曲線を圖記すれば、資本主義が最近如何に加速度的なる發達を示したか、而して同時に現今の恐慌の性質がいかに斷末魔的のものであるか、分かるといふ。數次の曲線の動搖に遭遇しても、資本主義は結局恢復せられ、高上した。此の百三十八年を五期に分つ。一七八三年より一八五一年までは、資本主義は甚だ徐々に進行し、曲線は極めて小さい角度で上向した。一八四八年の革命後は、歐洲市場の骨組の擴張した時であり、其處は頂點になつて居る。一八五一年より一八七三年に至るまで

は、發達の曲線は急に上向する。一八七三年には擴大せられた生産力と及び市場の擴張との間の撞着は發達に潰崩を齎し、不景氣時代は其の後引き續いて一八九四年に至る。勿論此の間といへども曲線の週期的上下振動が全く起らぬのでは無いけれども、併し全體の發達としては曲線は殆ど水平に進行して居る。一八九四年には資本主義隆昌の新時代が始まり、曲線は殆ど戦争の開始まで急速なる上向を續けて居る。最後に一九一四年を以て始まる第五期があり、其は資本主義經濟の壊滅時代であつた。

資本主義發達の加速度は、勿論主としては、上述の如く資本主義自體の構造の前提より生起する。即ち其の原因は全く機械的のものである。併し我々は又他面に、此の機械的要因と並行しての社會人の人生觀が、等しく此れの強力なる原因となつた事を忘却してはならない。人生觀も亦經濟組織の機械的支配を原因として積聚せられる。けれどもなほより、遠い原因としては、人生觀は却て此の經濟組織の原因であつたともいへる。現在に於ては、機械的なる經濟制度と、動力的なる社會人の人生觀とは、相互的に因果し、補助して、此の急速なる資本主義發達を招來したのである。其れ故に我々は、現在の經濟組織の構造前提を知つた後には、現今社會人の人生觀の本質を解剖して見る事が要だ。

社會人の人生觀が、現今世界混沌の原因になつたといふことは、直ちに現今社會人の心理が非

社會的、個人主義的になつた意味では無い。此點では多くの社會學者が既に指摘した如く、文明人は野蠻人に比較して遙に社會的であり、非個人主義的である。原始社會の對人關係は、今よりも以上に道德的であつたと考へる社會學説はすべて誤謬である。又原始的野蠻社會にまで溯らずに、單に中世と近代、田舎と都市とを比較しても、前者は後者よりも遙かに狭い社會的連帶感情を持つに相違無いのである。其れ故に或る社會學者は、此の社會的連帶感情の發達を指標として人間の道德意識を測定し、道德的自覺は文明の進歩と共に發達しつゝあると主張する。併し私は強ち此の説にも同感しない。社會的感情、社會的動機の育醸は、其の儘に人間の道德感の進歩では無い。現代人の動機を刺戟するものは、古代に比較し、其の社會的性質を多くした。又其の文化的性質を豊かにした。而して同時に此の刺戟への反應は、古代に於けるが如くに衝動的、一時的の性質を帯びず、永遠的、批判的の其れになつた。行爲の結果に對する責任感、社會的影響への反省心も亦確に蓄藏固定せられつゝある。併し其の社會的、文化的なる動機の對象は、此れを永遠的立場から批判すれば、必ずしも社會文化の健全なる進展に貢獻し得る性質のもので無い。動機の形式は整頓した。併し其の内容の價値は乏しい。社會人の連帶は密接になつた。併し其の結紐の意義は少ない。或は寧ろ、此の内容、此の結紐が、直ちに現社會を導いて壊滅の方向へ押し進めつゝあるといつてよい。

二 價値の顛倒

現今の資本主義的經濟制度の中に我々が生活する限り、我々は財の所有を無視出来ない。我々は先づ消費物を所有しなければならぬ。消費物の所有無き時我々の生活は直ちに破滅する。次に我々は此の如き經濟財を生産する爲めの勞働を自己に所有しなければならぬ。勞働は經濟財産の第一原因だから、勞働を持ち合せないものは、社會的意義の生活を確保する事が出来ない。最後に我々は生産手段を所有しなければならぬ。生産手段の所有は經濟活動自律の第一要因だから、此れ無きものは、社會的意義の生活を自由ならしめ、獨立的ならしめる事が出来ない。完全の人格自律は此の三者の所有を條件とするけれども、併し社會人の多くは其の全要素を所有して居ない。殊に大多數の人間が所有し得ないで居るものは生産手段だ。此れを所有するものは極めて少數の社會人に過ぎず、しかも其の所有は、人間の努力や修養やによつて支配せられるのでは無く、殆ど全く偶然的機會による。其れ故に此れを得ないものは、何等かの僥倖を以て此の機會に際會しようと思案し、一旦其の好機を握つたものは、此れを失へば再び得る見込みを持たないから、あらゆる方法を講じて機會の遁逃を防がうとする。要言すれば、社會人の人格自律は、財の所有を必然の條件とし、しかも其の自律は、他動的の偶然性に支配せられる。

所有は、現代の社會に於て、人間生活のネセシティーだ。所有無ければ我々は既に其の生物的生活をすら維持する事が出来ない。人格生活どころの話では無いのだ。次に所有は人生の享受である。享樂は要求の放肆なる擴張であるけれども、要求の至當なる充實は人格生活の内容としての生活享受である。我々は生活享受が快樂要素を持つことを以て、此れを排斥す可きで無い。たゞ其れが價値的に形式づけられて居るかどうかが問題なのだ。其の人間の享受生活は、所有により始めて可能となる。最後に所有は人生の價値である。價値は人格のみが持つ品位だけれども、所有なければ人格は正當に其の人格を擁護し、操守する事が出来ない。恒産無きもの恒心無しとは此事を言ひ現はす。此くして我々は其の人格生活を社會の中に固守し、主張し、擴大して行かうとすれば、所有が直ちにネセシティーであり、享受であり、更に價値でもある。人格と所有との關係は單に密接だといふよりは寧ろ相即だ。一無ければ他止む底の不可分離的結合だ。後者は前者の手段としてのみ意味を持つといふ位の關係は、少くも現今の社會制度の下では許されない状態に立ち至つて居る。此くして我が社會人の人生觀を決定し、社會進化に重大なる影響を及ぼしたものは、多くの評價方針中、所有即價値の其れに若くものは無い。

マルクスの「資本論」開卷第一には次の如くにある。資本制生産方法の蔓つて居る諸々の社會の富は「尨大なる商品集積」として現はれ、個々の商品は其の成素形態として現はれる。故に我々の

研究は商品の分解を以つて始まる。ブデインは有力なる經濟學書の開卷第一の文章を幾つか並列比較した後に、マルクスの卓見は既に此の開卷の言葉に於て十分に現はれて居ると恐嘆した所
以は、マルクスが一般に人間の經濟心理學を取扱ふ事無く、事實的發達の上に確乎たる歴史性を
有する資本制生産を取扱ひ、更に其の資本制經濟の真相を究明する爲めに、「商品」の研究を以て
其れが歩調を始めた事である。マルクスの着眼も卓偉だが、併し其の事に正しく氣附いたブデ
インの考察も凡では無かつたと私は思ふ。資本主義社會の全體的特色を示すものは實に商品だ。商
品の本質と作用とだ。我々は現今社會にあつてたゞ商品を生産し、其の他のものを生産しない。
商品は單に價値の量を以て計算せられ、價値の質を以て鑑賞せられる事が無い。甲商品と乙商品
とは、其の質を抽象し、何等かの數比的比率により交換せられる。我々はたゞ其の比率の大を欲
して某商品を生産する。此れが現社會に於ける大部分の人間の、大部分の創造的勞働行爲を支配
する社會學的法則だ。たゞ量をのみ生産して、質を創造せずとは、此れを社會人の觀點より言へ
ば何を意味するか。いふまでも無く、其の事、其の物、其の關係に固有なる客觀的價値は抽象せ
られて了ひ、單に經濟的所有が其等すべてを評價するといふ意味だ。マルクスの經濟學は其の社
會的事實の上に立つて、甚だ卓拔に、且つ大組織的に建設せられる事が出來た。併し此の基礎は
必ずしも經濟學にだけ意味を持つのでは無い。道徳學が、慣習學が、法制學が、將た人間文化學

一般が其の基礎的事實の上に立つて、其等固有價値の内容的發展を、最も適切に叙述し得るのである。

文化價値を一の體系に組織立てようとする計畫は、哲學者によつて從來幾度と無く試みられ
た。私は今此等の價値體系論に何等かの批評を加へようと思はないが、我々の社會の人生觀の間
題に關係する點だけをいふならば、價値を體系づける仕事は、少くも二つの方法を以て試みられ
なければならぬと思ふ。其の一は、純粹の哲學的理論問題としての價値體系論だ。其の二は、從
來價値體系論としては何等の注意をも惹いた事が無いけれども、文化歴史的發展に於て、其の時
代毎に價値は事實的にいかなる體系を以て、其の社會人に見られて居たかといふ事だ。略言すれ
ば前者は其れの理論的考察、後者は其れの發生史的觀察だ。前者の立場からは意味無しと見られ
たものも、後者の立場からは十分の意味を持つて見られ得る場合が多い。例へば唯物史觀説が其
れだ。前者の考察は今の場合に必要が無いから此れを省き、後者の其れに就き一言するならば、
現今社會にあつて、價値の大群は二つの系列に編入せられる。其の一は、經濟的所有價値、其の
二は、此れを除いたすべての價値だ。そして其の關係を言へば、前者が後者を壓制して居るとい
つてもよければ、又其れは全く逆だといつてもよい。經濟價値の或る歴史的表现であり、僅に其
れの一部をしか占め得ない所有價値が、其の他すべての價値を評價し、抽象する點では、見方は

前者である。又固有價値の實現の爲めには、我々は先づ經濟的所有を必要とし、經濟は諸文化生活に手段たる意味をしか持ち得ない點では、見方は後者である。更に事實的に言へば、現今社會人が富者を羨望し、資本家が政治を決定し、財産が道德内容を變化するは前者の見方だ。人間が商品を生産し、労働者が生産の悦びを有せず、労働運動が賃銀値上を目標とするは後者の見方だ。要するに資本主義社會にあつての現實的價値體系は、健全なものになつて居ないのである。

三 道德意識内容の分析

メンガアは現今の資本主義的社會構造を壯大複雑なる建築物に比較した。勿論其の所説の内容と及び譬喩の構想の暗示はマルクスの唯物史觀説から受け取つたものに相違無い。メンガアによれば、此の大建築物の第一階には貴族、僧侶、軍人、官吏等が住み、順次に第二階には商、工、農業の經營者が、第三階には民衆の精神的指導者たる學者、藝術家が住み、さて最後の屋根裏には大多數の労働が詰め込まれて居るといふ。此等數階の譬喩が正當に我々の社會の構造を示して居るか否かはなほ重大の問題であるが、併し兎に角現今の社會が一の平面圖によつては示されず、立體圖によつてのみ表はされる事を、何人も疑はうとはして居ない。

此等數階の住者は、悉く所有價値によつて評價せられ、又或る點までは所有價値を動機として

行動するの外無き社會人だ。所有價値は同一の所有價値であつても、數階の住者はすべて其れと異つた利害關係に立つ。即ち此處に現今社會人の道德意識内容に於ける相違がある。第一階には第一階に特有なる、以下順次に各階に特有なる道德意識内容が成立する。併し其の相違の本質を解剖して見れば、皆な同一の所有價値だ。所有價値の所有者は、あらゆる點で社會に優越者だが、其の優越感直ちに彼の道德意識内容と化した。次に所有價値を所有せざるものは、全く前者に反して此の優越者へ從屬的地位に立ち、其の從屬性を彼等の道德意識内容に凝固せしめた。此くの如くにして、現代人の道德意識内容を分析すれば、其れには概ね二通りの種別ある事となる。第一は、すべて自己の欲求を抑損して社會の傳統的形態の維持に奉仕するを根本動機と爲す可き奴隸道德だ。第二は、出來得る限り自己の要求を擴張して社會の事業構造に支配者たることを日常の信條と爲す可き英雄主義だ。奴隸道德と英雄主義と一見しては其の内容を全反的たらしめて居るが、現代では其の二の動機の何れをも社會道德だとして居る。しかも其等の動機は、何れも利己主義の其れでは無く利他主義の其れだと見られて居る。蓋し奴隸道德の奉仕性は、社會に對しての其れだし、英雄主義の凌駕性は、社會の機能を促進する意味に於ての其れだから。此の前者に就ては説明の要が無い。後者に就て例示するならば、現代の所謂實業家なるものは實際に其の事を言つて居る。彼等が企業し、投機し、交易して莫大の富を集積したとすれば、

畢竟此れ、其の國、其の社會の富を増大したものだ、彼等は即ち公益に貢献したものだ、勞働者及び其他の社會人は、すべて彼等の事業の隆昌を協翼す可きだ。此れが彼等の信條である。蓋し此れ宏壯なる錯覺だ。彼等實業家の道德基調は依然として一の英雄主義である。我々は彼等の活動によつて、直接には何等の益をも蒙つては居ない。隨つて彼等の製造した粗製の所謂國産品を、義理立てに購求するよりは、安價にして良質なる所謂輸入品を使用する方が、遙かに我が社會の最高目的へ合理的の仕方だ。併し此等すべての事が却て社會生活を破滅に導くもの、如く見られる所以は、社會人が奴隷道德と英雄主義とに幻惑癡痺せしめられて居るからである。一見全反的に見られる兩道德動機が、社會性なる癡痺劑によつて結合せしめられた場合には、其の動機の本質は全く同一である。即ち從屬階の住者は奴隷道德を取り、優越階の住者は英雄主義を取る。奴隷道德と英雄主義とは、一枚の衣の表と裏だ。社會構造が數階の立體構造を示さない限り、此等の動機は社會性を有し得ないものである。

ラッセルに隨へば、人間の欲望は、先づ生活の必要に對しての第一次的欲望と、其の上に築かれた第二次的欲望とに分たれる。第一次的のものは、食物、飲料、衣服、住居、性等の欲望だ。第二次的のものには四種ある。第一、所有欲、第二、虚榮欲、第三、競争欲、第四、勢力欲が其れだ。政治生活に於ける大事件は、すべて物質的條件と、此等の人間激情との相互關係によ

つて起るといふのである。今第一次的欲望に就ては論じない。第二次的のものを見れば、此等の欲望が深く動物の本能性の上に根據を置く事は疑へない。例へばラッセルも言つた如く、所有欲は貯藏本能からデライヴせられたものであり、虚榮欲は他の動物にも見る求愛性の發達したものであらう。併しなほ注意しなければならぬ事は、資本主義社會にあつての財の所有は、動物が消費のための對象物を今現に所有して、此れを奪取せんとする他の動物の侵略を防ぐとは、全く性質を異にする事だ。後者にあつては、所有は單なる心理的所有であり、其の對象の質的認識を基本とする。然るに資本主義社會の所有は、經濟財の所有だ。經濟財は單に量的に測定せられ、此れに質的認識を缺く。次に虚榮欲、競争欲、勢力欲も亦、其れだけが心理的に發表せられるといふでは無しに、我々の社會では必らず其の根基に經濟財の所有を置く。即ち我々にあつては、財所有の上への虚榮、競争、勢力だ。而して此等の欲望は、其れの反面にすべて其れと性質を全反的ならしめる欲望を持つことを、我々は忘れてならぬ。蓋し其れは動物には存在しないで、人間社會に於てのみ見る特有の現象だ。例へば勢力欲を舉げれば、此れとは其の性質を全反的ならしめる服従が亦一の人間欲望である。現代の婦人が本來的に男子の附屬となり、其の服従によつて却て心理的快樂を得るは其の一例である。併し其れは必ずしも現代の婦人にのみ限らぬ。一括して言へば、社會建築の優越階は英雄主義を、從屬階は奴隷道德を、其れの當然なる本務と爲

し、随つて又其れの自然的欲望と爲しつゝある。

以上の如くにして、現代社會人の道德動機は次の如き數種に包括せられるものとなつて居る。

第一は英雄主義だ。第二は社會奉仕道德だ。此の二者は前述の大綱其のものだから説明の要は無い。近來我々の周圍にあつて社會奉仕の聲を聞く事甚だ頻りである。併し其の所謂社會奉仕なるものゝ内容を見るに、依然として一は英雄主義、他は奴隸道德だ。其れが貴族婦人、官僚、社會政策者等によつて唱へられる時には、上より下への恩惠的遊戯心發動であり、其れに何等の奉仕心を見ない。又其れが勞働者、俸給生活者等への強制的標語なる場合には、奴隸心養成の便宜哲學であり、優越階住者の一利用策に外ならぬ。然らば現今の所謂社會奉仕流行は、其のまゝに現代社會の道德意識内容を表現したものである。

次には此等の二動機を基本とし、其れよりデライヴせられた幾多の道德動機がある。其の例としては、歴史主義だ。外觀本位思想だ。事業本位思想だ。此等も亦現代人には抜き難き行爲の根本動機となつて居る。

歴史主義の發達を見るに、其れには二種類ある。發達初期の歴史主義は舊社會秩序の維持を目的とし、後期の其れは却て舊社會秩序の破壊を目的とした。蓋し後期の其れは、前者の甚だ破り難きを觀取し、寧ろ其の武器を利用して前者の牙城を突撃したものである。社會主義者が人間動

機の發生を動物生活にまで還元し、道德慣習制度の基本を此處に求めて、既成權威の剝奪に力めたのは此の一例である。然るに前期の其れは此れと全く逆の見方に立ち、すべて歴史なるものは、其の然らざるを得なかつた理由を必然的に其の中を含むものとして、此れが支持を志した。併し畢竟するに此等の歴史主義は、何れも純粹には歴史主義と呼ばる可きで無い。其等はすべて歴史以前に彼等の價值哲學を豫想する。そして自己の價值觀に隨ひ、便宜的に歴史的事實を整理したゞけのものである。主觀的歴史主義であつて客觀的妥當性を持たない。併し此の種の見方は、現今社會に甚だ強い勢力を持つて居る。殊に優越階の住者は、前期の歴史主義に對して本能的の執着を持つ。

外觀本位思想、事業本位思想は、ラッセルの虛榮欲、競争欲、勢力欲に相應す可きものであらう。すべての價值が所有價值により量的に計量せられ、其の質を抽象せざるを得ない場合には、外觀と事業とは、蓋し人間動機を刺戟する好餌だ。現今社會人にあつて、學問、藝術、勞働等はすべて此の外觀と事業との爲めに意義を有し、其れが動機であり、其れが評價である。其れ故に此の動機と評價とによつて洗禮せられ盡したものは、凡そ人間活動は、此の虛榮、競争、勢力等を除いて、純粹には起り得ないものと考へて居る。例へば社會主義に反對する人達は、社會主義的世界では、人間はすべて安逸を貪り、競争心を缺き、其の勞働を出來得る限り縮少しようとする

めるだらうから、社會文化は忽ちにして沈滞するに相違無いといつて居る。すべての點に卓見を示したアントン・メンガアすら、此點では誤謬に陥つたによつて見れば、其の道德意識のいかに根柢強く現代人心理に執着して居るか分るのである。此等の意識は、近來ホブソン、ベンテュー、コオル、ラッセル、ホルムス等の諸氏によつて甚だ明瞭に分析せられたが、併し其の試みの先驅を爲した人として、ラスキンとモリスとの名を我々は決して忘却してならない。

四 社會概念と人生觀

社會とは抑々何であるか。我々は多數の學者により試みられた幾多の定義を見て居る。併し要するに其等の定義は社會を決定するに其れの形式と及び其れの内容との兩面から爲したものであり、或は其の一方を高調し、或は其の兩者を併説するものゝ如くである。私も亦此の兩理解の併説を主張したい。形式的に見られた社會の定義は今必要で無い。内容的に見られた社會は、畢竟するところ幾多の人生觀の相作用だ。人間は此の人生に生息し、環境としての自然と人間とに對して何等かの態度を取る。態度を取らざるを得ない。蓋し行爲とは、此等の環境に對する人的態度の外的表現其のものだ。さて態度を取るとは、環境に向つて何等かの價值附けを爲す事だ。價值の性質の從屬關係と及び其の量的評量は、唯一時に於ける唯一行爲を決定する。此くして我

々が、我々の社會を内容的に考察しようとする場合には、我々をして現代社會人の人生觀に第一の焦點を集中せしむ可き必要を切に感せしめるのだ。

併し私の所謂人生觀は甚だ廣義のものである。私が讀書をする。其處に人生觀が動く。散歩をする。他人を訪問する。買物をする。すべて其等のところに私の人生觀が動く。人生觀は我々の行爲の個々の場合に其の環境内容と結着して、頗る個性的のものになつて居る。或る人には其の場合に動く人生觀が反省せられて居ない。随つて其等の間の相互的鍵關も考へられては居ない。其等の場合には、過去の人生觀の積聚としての習慣が機械的の支配を爲す。併し我々は其等の人生觀の個性を仔細に分析し、歸納して、現代社會の内容如何を知悉しなければならぬ。其れは個々の場合に應じて特色を有するにしても、何等かの價值を中心にして動く。其のいかなる價值をいかほどの程度に容認して居るかは、其の人の行爲の特質を決定する。換言すれば、一個人の行爲は數本の價值坐標軸に對する坐標の量的決定を以て表示することが出来る。此の坐標軸の質と及び其の上に描く坐標の量とは、即ち各人の人生觀の一括的作圖なるのみならず。亦直ちに現代社會の内容の全部的作圖なのだ。

個人の場合に於けると同じい様式が社會の其れを支配して居るから、私の考察は直ちに社會の場合へ進んで行かう。社會は制度、習慣、小社會構成、其等の間の相制的運動等、甚だ複雑の構

造物であるけれども、内容的に見れば其等の個々及び其の複合は、常に何等かの人生觀に依て捕捉せられて居るものであり、總ては其の社會の價值作圖により支配せられて居る。其れ故に我々が特に内容的に注意すべきは、某々の制度、習慣、構成等では無く、其れに關係する、其れを支配する價值坐標軸だ。今若し其等の坐標軸の数が僅少に限られて居る時は、其の社會は甚だよく統一せられて居る。併し其れは歴史の發達段階に寂寥の感じを帯びしめる。例へば西洋中世時代が其れだ。此れの反對は直ちに價值坐標軸の数の煩多なる場合であり、其の社會の統一は乏しいが、併し歴史は豊滿である。支那に於ける諸子百家の時代、西洋に於ける希臘時代の如き其の適例だ。我々が其の社會の内容を批判するとは、此の坐標軸の價值特質を評價し、更に其等の諸軸交叉が、正しく一點を通過し得るや否やを見る事である。其等の價值特質が人間生活を卑少ならしめるものであるとき、又其等の坐標軸が一點に交叉しないとき、よし其の社會内容はいかに豊富を極めるにせよ、其の社會は、内容的には既に壊滅の徵候を呈したものと診斷せざるを得ない。社會内容としての人生觀を分析する時に、直ちに重大なる意義を持つのは、其の社會に於ける教育の理想だ。教育は社會生活と別のもので無い。最近にフリッツ・カルゼンも其の論文の中で言つた如くに、教育は社會相制であり、社會生活の一片である。其れ故社會の考察は直ちに教育の其れを覆ひ得る。併し私が特に社會生活の内容から取り離して教育を注視する所以は、教育は

特に社會人が此の社會内容を持して其れを將來へ押し進める積極的動力であるからだ。人生觀としての社會内容は社會内容の靜的立體像だ。教育は此の立像を舞臺の上に動かす演劇だ。すべての行爲が一の價值によつて指導せられる事を私は先きに言つて置いたが、教育に於て其の性質は特に顯著である。教育は一の有目的々な行動である。其れ故に我々は、現代社會を一の人生觀の相制として考察した後は、其の社會の教育理想の特質を評價する事を忘つてならないのである。

五 近代的産業文明の得失

現代社會人の有する人生觀の特質を鋭敏に觀察した結果、世界は近き將來に於て悲惨なる戰爭を経験すると豫言したものは全く無いでもない。私は今さうした傾向にあつた思想家の一人としてエドモンド・ホルムスの名を挙げたい。彼は明瞭に今回の大戦を豫言しては居ない。併しさうした文明の大破壊が不可避的の運命にある事を、既に戰爭に先立つ數年以前より主張して、社會へ熱心なる警告を發して居たのである。戦後の今彼れと同様の主張を爲すものは決して少なく無いが、併し當時全世界の人間を擧げて彼の指摘した様な人生觀を追求して居た時に、此の忠告は少くも異數であつた。ホルムスによれば、現代の文明は、「結果に對する支拂の文明」といふ一

語で、其の特質を蔽ひ盡せるといふ。私は今此の語に多少の科學的整頓を加へて、併し其の意味するところは彼と全く同一なる、「功利主義的文明理想」といふ語を使用する事にしよう。

我々の人間活動は、幾多の人格作用の統一であり、そして其等の人格作用は其の作用に固有的なる理想を其れ々々に追求する。此の理想は即ち我々の所謂價值だ。一々の作用は其れ自身を以て完結自律し、随つて其れの價值は、他の何等かの作用の價值によつて批判せられない。況んや此等の價值によつて批判せられる質料は、價值に對して從屬的であり、自ら價值の批判者となる事が出来ぬ。此れが我々の文化主義的態度だ。然るに我々の文明史の教へるところでは、各々の思想家にあつて、亦各々の時代にあつて、一作用の價值が他の作用によつて制約せられ、或は亦被制約者によつて逆に制約せられる場合は少くなかつた。例へば徳は知なりと呼ばれた時には、道德價值は眞理價值によつて限定せられたのであるし、又美は快樂なりと定義せられた時には、藝術價值は却て被制約者なる心理學的感觸性質の屬隸となつたのである。哲學史上に快樂說なる一主張がある。此れは支配者と被支配者とを顛倒した一の誤想であつた。價值は其れ自身評價の坐標軸であり、其價值追求の心理學的結果としては我々に快感が起きる。碎いて言へば、此の顛倒が、「結果に對する支拂ひの文明」だ。其れの一層整備した形に於て文明理想は畢竟功利主義だ。功利主義の内容は快樂である。快樂が近代の聰明を得たゞけのものに過ぎない。

然るに我々の周圍には、實に多くの形式の功利主義がある。故意に快樂主義や物質主義やを標榜するものは論外だ。其等の快樂主義物質主義を人格的に克服せんと努力するものが、依然快樂主義物質主義の變形の上に立つて、移る事の出来ないのは憐れである。寧ろ社會に害毒を流す。畫龍は點睛を得て誠の畫龍だ。私は從來屢々其等の論者から、同じ人格的立場にある改造論者の仲間争ひは我々の究極の戦争効果を傷害すると非難せられ、忠告せられたけれども、併し私にして見れば究極理想の誤想ほど大なる影響を改造過程の上に及ぼすものは無いと思ふのだ。況んや其れが俗耳に易く、人情に阿るものである場合に於てさうだ。我々は甚だ無遠慮にすべての現代的誤想を指摘しなければならぬ。

現代人の人生觀を支配し、其の一般的特質を形成した功利主義的文明理想の第一表現は、現代社會人の文明進歩謳歌であつた。

新並びに舊なる概念は甚だ強く現代人心理を支配して居る。新は常に正しく、善く、美しく、舊は必らず誤り、悪しく、醜いとは、知らず識らず我々を支配して來る心理だ。そして此の心理が文化史始まつて以來、今ほど強く我々に意味を與へて居る時は無いのであつて、其處に近代文明の特質が發揮せられ、且つ近代社會構成の前提の反映が見られる。我々は生活の新らしい世界が、所謂文明開化によつて我々の眼前に展開せられると考へた。絶えず進歩する自然科学は、其

の精巧なる技術によつて、どれだけでも大量の、亦複雑の物的享樂を我々に提供する。生活の視野は無限に擴大せられる。時間は短縮せられ、勞力は節約せられる。我々は此の文明開化をどれだけ輝やかなしい眼で仰視して居たか知れないのだ。自然科学は鍊金術の時代の其れと異り、將來への整然たる發達を豫望せしめる方法を確立しはじめた。經濟活動は小手工業的の其れから大産業主義の其れに移り、隨つてカルテルやトラストが横行し出した。工場的機械生産は家庭的地方的小規模生産に取つて代つた。此等はすべて都會を手段として發達し、且つ其等の物的享樂は都會に於てのみ可能なるが故に、人口は急速に都會へ集中した。都會は一個の特殊なる社會である。其の範圍の擴大に伴ひ、其處には特殊の道德と罪惡とが醸成せられ、其の内容は此の發達を示す事の出来ない田舎の道德や罪惡と對照せられ、隨つて近代人に現代文明への反省の必要と機會とを與へる事が多くなつた。此の偉大なる構造の文明機關を障礙無く運轉する爲めには、個性主義地方主義は餘りに規模の狭いものと見られ、機械主義集中主義が此れを壓倒した。併し其れにも拘らず、此の大機關の運轉には間斷無き故障が起り、近代人の反省心批評心を愈々旺盛ならしめた。

所謂文明開化、此れを別の名稱では近代的産業文明と呼ぼう。右の如き近代的産業文明は確かに優處を持つて居る。何故なれば、其れは我々の生活内容を潤澤豊富ならしめ、我々の文化生活

様式に多方的複雑性を附與するを得るからである。人間欲望の發達には限度が無い。我々が生活するといふことは、不斷に其の欲望を改新し、暢達せしめつゝある事だ。其れ故に生活内容が豊富になり、生活様式が複雑になるのは、人間の生活に已むを得ない經過でもあれば、又然か進むのがより、善く生活を生かす道でもある。併し近代的産業文明は、他方には大いなる缺點を持つ。此れによつて我々の生活の各部分は獨立的に發達し、其等の間の生命的聯絡を失ひ、我々をして悲惨なる生活分裂を経験せしめる。其れを避けることは我々が社會人なる限り、殆ど不可能なる如くに見える。生命の固有性が失はれて機械的凝結を來す。人は組織の支配者では無く、組織は人の支配者である。此の如き社會にあつては、政治經濟生活は、一の固定機關による外的強制となるは不可避的だ。即ち集中主義が近代的産業文明の伴隨物だ。集中主義は人間の個性的地方的要求を無視し勝ちになる。

嘗て英國に於てフェビアン協會派社會主義とギルド社會主義との間に文明觀に就いての論争のあつたことを多くの人は熟知して居る。殊に前者に屬するウェルスの「新世界」高調に對して、後者に屬するペンティの「舊世界」高調は、兩々互に持する處有り、其の論争は今後の社會思想の選擇に有力なる參考資料を提供した。社會主義諸派の論争や實際運動の差違を比較するに、其の經濟政策より以前に文明新舊觀の異同あることを、我々は容易に觀取出來る。そして其の異同は

單なる經濟政策の相違以上に重要な意味を持つて居る。主張者たる個人にしても、此の文明觀の相違は互に融和し得られない。何故なれば、其れは抑々自然人生に對する人的態度の問題だからである。ウエルスは自然科學的產業文明の謳歌者だ。隨つて其の社會主義は未來的である。不漸に發展する産業生活の頂點に社會主義的ユウトピアがあるのだ。ペンテラーは全く其れの反對だ。生活内容の豊富は必ずしも生命の豊富を意味しない。生活とは豊富以上の純潔なるものだ。內的統一の宗教的感味に彼は寧ろ絶對の價値を置かうとする。隨つて彼の社會主義は懷願的であり、中世的である。ギルド組織の復興は、此の文明觀の一尖兵としての聲であつたのだ。

併し見よ、其れと同一の反對は敢て英國に於てのみ見られて居るので無い。其れは露國にもある。レニンは大産業主義の賛成者だ。露國の社會主義を完成する爲には無産者の訓練と大組織により小工業、小資本主義を廢滅して大産業主義の勝利を示さねばならぬといふのだ。即ち今勞農政府は國家資本主義への道程を急いで居る。全露の電氣化は其れへの必須的手段となる。産業の集中主義が至るところに高調せられ、中世主義は公然と反對せられた。然るに露國內部には、レニン等の集中主義に賛成せず、なほ其れ以上に徹底的なる人間の自由と個性を高調しようとするアナキスト、或はアナルコ、サンディカリストがある。此等は英國に於てのペンテラー等と共通の人生觀文明觀を持つものだと言へる。ポリシエヴィキの集中主義とアナキスト

の個性主義とは當然同一の途を進み得ない。併し今勞農露國の政治的權力者はポリシエヴィキだ。其れ故に彼等はアナキストにメニシエヴィキなる一括的名稱を附し、小資本主義者や反革命主義と同一視しようとする。其れは一の戰術であつて理論では無い。又所謂無産者の獨裁は、甚だ屢々アナキストの上へのポリシエヴィキの獨裁になつて居るのである。文明觀の差違は根底的である。

英國に於ては、等しくギルド社會主義を標榜するものゝ中にも、其の文明觀には多少の相違があるから、彼等は自からポリシエヴィキに、近いものと、アナキストに近いものとに分れる。此れ亦已むを得ざる勢ひだ。例へばコオルは集中主義を或る程度まで必要だとして、非集中主義者を攻撃し、ペンテラー、テイロアの諸氏は徹底的に非集中的であらうとして、鐵道全廢論をまで唱説する。併し最近のペンテラーの態度などを見て居れば、實際政策案としては可成りの集中主義を採用せざるを得ないと見え、公定公正相場の設定を主張したりして居る。新世界人生觀と舊世界人生觀とは容易に融和せられさうに見えぬ。

社會主義各派の中にすらさうした文明觀の相違はあるが、近代資本主義は此の文明觀の選擇の場合に當然新世界文明觀の謳歌者である。蓋し資本主義、商業主義は此の文明觀の前提無しには成立し得ないから。生活内容の豊富への願望は人生必然の其れであるが故に、其の點では大に人生

に寄與する所のあるらしく見える資本主義は、其れだから社會より廢滅せらる可きで無いと強辯し詭語することすらある。ペンタラー等は此の文明理想の共通を指摘して、資本主義と英國正統派社會主義とは同一根柢の上に立つものとし兩者を一括して排斥する。

近代的産業文明の新世界へ賛成すれば、我々の生活内容は豊富になるが、併し其の統一的生命感味は失はれ勝ちである。中世的藝術生産の舊世界に左袒すれば、人間生活のインタイムエシイと藝術的感味は保存せられるが、併し其の内容の複雑性は大いに減損せられる。此事は全體の政治經濟組織の構成の上に常に對立して生起するし、又部分的限定の上にも現はれて来る。例へば汚穢なる勞働をいかに處分す可きかの問題の解決に當つてさへ、學者の間に其の反對解決が見られることとなる。けれども私は其等すべての細末の問題を統括して、此れを一根本原理に要約し、二の文明觀の基底に融和す可からざる價值觀の相違を見ようと思ふ。其れは最も基本的の考察である。私の考へるところでは、近代的産業文明の謳歌の根柢には、功利主義的文明理想がある。次に中世的藝術生産の復活の根柢には、人格的價值文明觀がある。兩者は互に相容れない。我國は維新以來、生活内容上の異常なる革命を経験した。文明開化といふ言葉は、恰も現在文化なる語が一の流行語となつて居る如くに、維新後の甚だ長い間を支配する流行標語であつた。文明開化其れ自身が價值多い事柄だと見られて、少しの疑念も挟まれなかつた。實利主義は同一

の理想樹から出た分條だ。我々は從來、文明開化なる標語と並行していかに屢々國利民福なる標語を聞かされて來た事だらう。新建設の日本は、此くして五十年の星霜を閲した。其の半世紀の歴史は、功利主義哲學を無上の人生信條と奉じた記録である。

六 近代人の教育理想

功利は結局快樂だ。行爲の結果に伴ふ心理學的感情的性質だ。其の快樂感情の量的計算上に知的聰明を加へようとしたものが功利主義であつた。故に功利は飽くまでも受動的なる價值批判の結果であり、能動的なる批判に規準となるものではない。規制せられるものを規制するもの、地位に上せば、其等は個々の的に分裂して居るから、一の標準は一にだけ通用して其の他からは排斥せられる。此れを快樂の場合に就て見るに、一人の快樂は一人の心理學的實在經過に對してのみ眞實であり、他人の其れになり得る見込みが無い。快樂は全く主觀的のものだ。功利主義は此の難點を免れようと欲した一の試みではあるけれども、併し本來主觀的にして被拘束的なるものを、客觀的にして拘束的なるものに化さうと欲した空なる希望をのみ残す。其れ故に實生活の上では、功利主義は不斷の社會的利害鬭争を惹起する。世界永遠の平和はさうした功利主義によつては招來せられない。人格的價值觀が此れを救済する。其れは社會人の甲と乙と丙とを主觀的評

價の中心と爲すこと無く、被制約的なるものゝ代りに制約的原理を、主觀的效果の代りに客觀的動力を持ち起こす。

現代にはさうした人格觀價值觀が無い。此の社會の教育理想は亦必然的に功利主義的文明理想を目標とする。明治維新は一舉にして固定した舊制度を破り、社會の上への自由なるイニシアティブと及び個性的なる文物附加を可能にした。其處にはいかにも進化的な、自由競争的な視野が展開せられたのである。此の場合に、父兄は其の子弟を、教師は其の生徒を、朝に夕に訓練した標語は何であつたか。第一には實用に適する人物となつて國利民福を興せである。第二には偉い人物になつて名を挙げ身の譽れを増せである。無論私は此の思想を維新時代にのみ特有なりし心理だとは言はぬ。併し平民の子も大臣大將になり得るとの解放、劍の價値の代りに算盤の其れが高く評價せられるとの商業的自由は、教育の中に、理想としては實利實用を、處世法としては「偉い人間になれ」の競争心を高調した。即ち次代の青年は、功利主義的文明理想と英雄主義的競争心を其の第二の天性と爲すに至つたのである。

私は現代の少年心理を觀察して、維新以後半世紀の間に教育せられた青年達の心理と、其處には多くの距離ある事を見て居る。後者にあつては、英雄主義的排他心により立身出世を爲すことが男子の本懐になされて居た。然るに現代の少年は自から生活本位的に價値の批評を爲し、自己の趣味や個性やを生かすやう努力することを悦び出した。昔時に見た英雄主義は、餘程の程度まで其の力を弱めた。勿論此れは社會組織が固定的になり、個人の立身出世に乏しい機會しか與へられない様になつた事や、現代の少年が東洋流の強い意志力を失ひ始めたことや起因するかも知れないが、併し一面には確かに過去に於ける功利主義と英雄主義の教育弊害を免れんと努める時代的一現象だと觀測せらる可きである。併し社會の老年者は、其の第二天性を捨て得ず、其の功利主義や英雄主義やを文明建設の第一原動力だと考へて居るのである。

七 世界 の 改造

功利主義的文明理想と英雄主義的競争心とは、世界的に近代文明の支持者であつたが、又同時に其れの破壊でもあつた。すべての個人が、すべての國家が、またすべての民族が、此の理想と此の精進とを志す以上、其處には當然世界的の闘争を生起せしめざるを得ない。トラストやカルテルの完全支配、大銀行の全支配、國家の大植民政策、軍備の大擴張、帝國主義の大建設事業、其等は敢て經濟的・政治的生活の必然性からのみ發達したもので無い。必ずや此れが根源には、前述の如き人生觀の誤謬が潜在したであらう。しかも其の潜在因は寧ろ顯在因より有力だつたかも知れないのである。要約するに世界は其の全力を擧げて征略競争を爲した。そして其の征略競争

は、必然的に現代文明の壊滅を招來した。エンゲルスの如きは既に一八九一年に、今回の世界大戦の避く可からざる運命を豫言して居た。其の大戦の直接原因は、英と獨との征略競争であつた。

基督を以て言はしめれば、今や世界は其の人生觀の上での根本的悔ひ改めを餘儀無くせしめられて居る。文明の戦前公理は將來に通用しなくなつた。戦前の貨幣が戦後に其の價値を失墜したと全く同様に、戦前の文明理想は戦後の換貨を下落せしめた。世界は一新せられねばならぬ。改造の曙が世界の一端より他端へと明けて行く。

以上を以て私の觀察には一段落が附いた。世界が現にいかなる變革を遂げつゝあるかを我々は見た。次に世界は何故此の如き變革を遂げねばならぬか、其の事實的原因を我々は見た。此れは單なる主觀的感想で無い。現前の事實の偽らざる叙述だ。我々は其の事實を事實として率直に認容し、然る後此れに處する對策を講せねばならぬ。私は次に其の改造方策の根本原理を考究して見よう。

第二篇

社會理想論に於ける理想主義的理念と社會主義的理念

第二篇

社會理想論に於ける理想主義的 理念と社會主義的理念

第五章

理想主義とマルキシズム

一 理想と唯物史觀

我々は今や日本の生活を改造する爲めの根本的基準を立てねばならぬ。即ち其れは我々の根本理想だ。根本價值だ。日本を改造する爲めの理想は、世界を改造する爲めの理想を離れて居ない。寧ろ前者は後者の一部だ。又今、此の、現に在る世界を改造する爲めの理想は、凡そ永遠に人間を改造する爲めの理想と別なるもので無い。寧ろ前者は後者の一部だ。若し此等相互の間に理想争闘を起すことすれば、後なるものは當然、前なるものに優越する。日本は歴史的に、存在的に、現に此の形勢を保つ。其れは内に日本の本質を要求する。日本の本質を發揮するため、非本質の日本を打破するに我々は勇敢でなければならぬ。そして本質の日本は本質の世界と一致す

る。否寧ろ後者其の物だ。本質の世界は本質の人間と一致する。否寧ろ後者其の物だ。

理想は現實によつて制約せられない。現實によつて制約せられるものは單なる手段だ。其の點で理想ほど高翔するものは無い。何等か此れに到達し得る飛翔ありと見れば、理想は既に其の飛翔を超越し、優駕する。此點で私は、現在私の周圍に眺める多くの現實重視論者現實一元論者と自らを區別するだらう。彼等は言つて居る。現實こそ理想を産み出す唯一基準だ。事實が價値を決定するのだ。事實を超越する理想の、事實の上への制約は、專制だ。獨裁だ。其處に政治の、經濟の腐敗が招來せられたと。併し其の意見は少くも認識論的には誤謬だし、歴史的には肆意的比論である。彼等は我々の批判的觀念論を誤想し、其れを素朴的觀念論に變形せしめて居るのである。我々こそは眞の現實論者だ。認識するがまゝの現實以外に何等の實在を許さず、又故意に此の上に知的改容を試みる事も無い。現實一元論者こそ、概念的改容を眞實在と見、且つ獨斷的形而上學の陥穽に落ち込んだのである。價値は事實に先行する。此れが我々の認識論の根本前提だ。此の前提無ければ、凡そ我々の認識は眞理たり得ない。然らば其處にたゞ蓋然的の、又相對的の眞理があらう。眞理の蓋然相對は眞理の部分的否定だ。部分的否定は直ちに眞理の眞理性否定だ。そして認識が眞理たり得ずとは、認識の不成立を主張することである。彼等事實重視論者は論理上當然の誤謬に陥らざるを得ぬ。故に我々は一の事實が既に確然たる理想を前提すると

論する態度を取るのだ。

マルクスが其の著「經濟學批判」の序文の中に公言した所謂唯物史觀說なるものは、其の言餘りに簡單なる爲め、理想と事實との關係をいかに決定したかの深き根據は其れに於て明瞭で無い。これを解釋する場合、我々は少くも理想なる語を二重に解釋することが出来る。其の一は絶對的理想であつて、凡そいかなる事實の根據にも前提せられざるを得ない普遍妥當的、永遠不變的の其れだ。認識論的意味の理想は此れである。其の二は、一の經驗人が現實的に、歴史的に何を最高の標的として選定したかの内容的批評理想だ。其れは個人に就ただけでは無く、一の現實的、歴史的の社會意識に就ても言へる事だ。此れを経験的、社會學的意味の理想と呼ぶことが出来るかも知れない。例へば今或る人が、金錢を儲けることは理想的行爲だと、眞に良心的に判断し、且つ其れに随つて行爲したとすれば、其處には既に此の理想の二義が分析せられる。勿論其の判断は誤つて居た。併し彼は理想の永遠性普遍妥當性を目標として居たのだ。此の意味の理想は認識論的意味の其れだ。けれども彼は一個の經驗人であり、神の如くに、理想自體の具現の如くに判断し得ざるが故に、何ほどか其の永遠的なるものより偏倚した判断を取つた。此の場合に、彼の經驗的意識を支配する有力なる要素として、彼の社會的存在のあつたことは否定せらる可くも無い。此の意味の理想は經驗的社會學的意味の其れだ。マルクスは其の何れを意味したか。彼の著

の他の部分を參酌して私の觀察するところでは、恐らくは彼は其の兩者を共に意味して居る。併し勿論後者の意味が強く主張せられて居たのである。前者の意味のものを唯物史觀説だと解した人は可成りに多い。唯物史觀説反對論者は、殆ど全く然か解して居る。此れが唯物史觀説の眞義ならば、言ふまでも無く其れは存在一元論の形而上學に立脚した誤謬である。次に第二の意味に解する人は、此れ亦多くの學者を包括して居る。其の解釋の上に立つとするも唯物史觀説は論議の餘地をなほ多く残す。或る人は、マルクスの説を其のまゝに取り、一の社會的感情、社會的徳等は悉く其の社會的存在によつて支配せられて居たと論ずる。例へば奴隸制度が不道德だとは思はれなかつた時代もあつた通りに、現代の經濟制度の下では、賃銀制度自體を非人格的惡制度だと考へる道徳意識は乏しいといふ。併し又或る人はマルクスに全然反對して、人間の意識こそは彼等の存在を決定するのだと主張する。蓋し人間は單に動物の如き機械的有機體では無い。彼等の行爲を決定するものは彼等の自由意志だ。私は一の行爲の選擇に際して或は甲とも、或は乙とも言へる。我々の有意的道義心が機械的盲從判斷を打破する。例へば現在、一般の社會意識は賃銀制度を人類的罪惡と感じないにせよ、私自身は其の社會意識から離れて、此れを無上の罪惡と感じ得るでは無いかといふ。此等兩説は、唯物史觀説の批評として、從來幾度も繰り返された論議である。私は今其等の論議の内容を考察して見るに、理想の第二の意味に於ては、マルクス

主義者も亦其れの反對論者も部分的に眞理だ。何れも直ちに否定せらるべきでは無い。經驗的個人の意識、随つて其れの交雜關係する社會意識は、大いに事實的環境の支配を受け、機械的に其れの判斷標準をつくる。其處に社會の道徳、禮儀、慣習、制度、法律等の含む機械的要素がある。其れは一の惰性となつて、更に個人の現實的判斷意識を決定する。此れは社會が一の存在世界のものである證據だ。併し同時に社會は理想的結合である。生物學的有機體とは異なる。社會有機體説は既に打破せらるべき舊説となつた。各個人は社會より多くのものを與へられると同時に、自ら亦個性的に此れに多くのものを與へて居る。其處に社會の有意的發展がある。生物學的進化と同一視せらるべきで無い。マルクスは個人の社會より與へられる要素のみに留意して、個人の社會に與へる要素に留意しなかつた。そしてマルクス主義反對論者は全然其れの逆である。我々は其の何れにも半面の眞理を見なければならぬ。

唯物史觀説は全然的に誤謬では無い。少くも其れが社會學的に主張せられて居る場合、其れは社會發展の眞理の半分を語つて居る。此れが唯物史觀説を最も正しく理解する仕方だと思ふ。併し最も危険なことは、此の社會學的眞理によつての哲學的認識論的眞理の壓倒だ。我國での唯物史觀論者は寧ろ形而上學的唯物論者と呼ばれるが至當だ。第二の社會學の見方の理解さへ證明せられれば、其れで第一の認識論的の見方は不用であるか、然らずんば第二によつて同時に證明せ

られたのだと考へて居る。其れは却て唯物史觀説を殺す仕方だ。認識論的には、我々の理想はマルクスの言ふ如く、我々の社會的存在によつて決定せられるものでは斷じて無い。理想は事實に先行す。此れほど明白な真理は考へられないのだ。其れ故に私は今廣義の唯物史觀説に反對し、理想主義の社會目的論を建設するのである。

二 理想の本質

理想とは如何なる成立であるか。此の問ひに對して我々は單に其れが普遍妥當性を具有することを切言するだけだ。普遍的に妥當するとは、空間的には地理的環境を離脱し、此れを萬人に共通せしめることだ。次に時間的には永遠不變性を失墜しないことだ。約言すれば認識論的に判斷意識一般の主觀に立脚する事だ。

歴史の事實は普遍妥當性を持たない。或る國民、或る民族が、現に其の如くに存在し、且つ歴史的發達を遂げたことは毫末も其の存在に理想的着色を帶びしめるもので無い。一人に眞なる、善なる、美なることは、其のまゝ他人にも眞なる、善なる、美なることであり、又然かなければならぬ。併し此れは其の本質に就て言ふのである。事實的内容がすべてに同一でなければならぬと主張するのでは無い。個別性は其れ自身では何等の價值をも持たぬ。其れが特定の文化的理想

の實現經過に、一系列たる地位を占め、以て社會的文化生活の内容を豊富ならしめ得る限りに於て價值を持つのである。即ち個性が有意味的だとは、其れが文化的に本質を含むことだ。

理想の理想たる所以は、其の普遍妥當性にある。理想主義的であるとは、人間性の中の個人的主觀的着色を擺脫して、人類的、客觀的本質を追求することである。即ち人間性が自然的偶然性で無い文化的必然性を發揮する事である。或る固定した概念内容や、現實經驗を超越する形而上學的本體やが、我々の生活を拘束するのは、他律主義であつて、理想主義では無い。(併し世間では屢々此れを理想主義だと思つて居る。)理想主義にあつて、人間性は、人間性自身、其の内なる本質的のものによつて非本質的のものを決定する。其處には、倫理的にも、學問的にも、亦た經濟的、政治的にも完全なる自治自律がある。人間性はあらゆる非本質的拘束から解放せられ、最も自由に、彼が當然取らねばならぬ途を選択する。本質的なるものゝ自由は、非本質的なるものゝ肆意で無い。後者は全く不自由であり、束縛であり、壓制である。即ち理想主義とは人格が完全に自由となることだ。當來日本、當來世界、當來人類は、人格の自由活動を基準としなければならぬ。其れを措いて凡そ他に何の理想、何の目的があるか。

理想は單に形式的に語られるだけだといふことは、我々の理想主義的努力を寂しくし、其の努力への勇氣を阻喪せしめるものでも無ければ、又理想主義は無内容主義だとの非難を成立せしめ

るものでも無い。何故ならば、リップスが賢明に其點を釋明した如くに、理想的形成を充實する内容は、無限に豊富なる、我々の生命内容其のものに外ならぬから、此の場合、理想を内容的に決定するものこそ、内容の二重性對抗を起し、後に加へられるものは生命の進展を害する概念的固結である。生命は無限だ。歴史の生起は永遠に新らしい。一の形式は一の内容を要求することが出来ても、其の要求は、現實的生起の豫測では無い。其れ故に個人の理想的努力と、環境としての歴史的生起とを對立せしめれば、後者は常に前者への「與へられたるもの」である。此の所與としての内容が普遍妥當の意味を發揮したとき、其れは單なる所與では無くて、既に獨立した個別文化だ。理想主義は所與を文化たらしめる爲めの努力である。

此點に關し、理想主義の反對者は概ね理想主義を誤解して居る。或る者は批評する。理想主義は無内容的教説なるが故に、我々に何等のヴィジョンをも見せてはくれぬ。其れ故に將來努力への激情を社會人へ與へる事が出来ない。又或る者は非難する。理想主義の理想は人類的发展の極限概念だ。其れは現實の人間のいかなる努力によつても到達し得られないことを豫め前提する。併し結局到達し得られない理想とは、理論的にも實踐的にも無用の理想と呼ぶに等しい。此の二つの見解は理想に就て正しい理解を持たないものだ。先づ前者に就て答へるならば、理想が單に形式的規定なる所以の理論的根據は前述したところだ。要するに事實の二重性の過誤を侵

さゝらんが爲めである。なほ此の形式的理想主義が内容的理想主義乃至内容的機械主義よりも實踐的效果の薄弱なる理由を私は理解することが出来ぬ。ヴィジョンの化城を與へる法華式心解が現實即悟の華嚴式法悦よりも、其の質と、其の深さに於て優越するとはどうしていへよう。化城は畢竟化城の價值をしか持たぬものだ。なほ言へば、固定した内容的理想を律せず、生命の限り無き流動を信するものが、却てより、強き心熱の持ち主であることさへ珍らしくは無い。其の適例はサンディカリストだ。

次に後者に就て言へば、此の考へ方は理想に就ての誤想だとは言へないだらう。併し其の結果は屢々大いなる誤想に導く。理想は極限概念だ。歴史的發達の究極地だ。併し此く考へる時には、理想は歴史的發達の一線上、其の何れかの一に内容的地位決定を爲すものだを考へられ易い。此れもなほ一の誤謬では無いかも知れぬ。併し其れは我々の全生命内容を此の一點に於て包括し得ると假定した上のことだ。事實的には全くの不可能事である。此の考へ方は、其れ故に内容的理想主義の誤謬に導かれ易い。我々は理想を此の意味のものに考へない。現實は無限の所與だ。其の何れの所與の上に立つて、此れを單なる偶然的所與から必然的文化の形に結晶せしめようと努める。理想を望むは永遠の彼岸で無い。理想は現實の此岸に今日も明日も照臨するものだ。

三 理想とユウトピア

マルクスの社會主義は科學的の其れであり、マルクス前期の其れはユウトピアニズムであるとは、一般に認容せられた學說である。然らば科學的社會主義をユウトピアニズムより區別する標準は何處にあるか。社會主義者がマルクスに就て力説するところを見れば概ね次の如くである。マルクス前期の社會主義者の理想世界は、すべて人間空想の藝術的産物である。其の理想境の記述は奔放に、我々の感興を惹くに十分であるけれども、併し其れは依然として一の空想だ。彼等は此の理想境と現實世界とに堂々たる融貫一路を見出すことが出来なかつた。此れに反しマルクスの立脚地は飽くまでも現實的である。彼は理想を想像する以前に先づ現實を解剖した。そして現實の必然的進化の道程に社會主義的理想社會を見ることが出来たのだ。マルクスは實に、從來の社會主義者により、久しく見失はれて居た理想への科學的大道を發見したのである。此の言説は其の説かれた内容の範圍では正當である。併し單に其れだけの理由がマルクスの所説をユウトピアニズムより區別する根據であり得るか。今若しマルクス前期の社會主義が、其の後になつて此の理想境への道程を發見し得たとすれば、彼等の理想境は其の時より一變し、科學的のものになり得たのであるか。マルクス主義者の批評を正當のものとすれば、彼等は當然此の論結に來な

ければならぬ筈であるけれども、私は決して其れに賛成しない。寧ろ此れはマルクスの學說を一面では餘りに小さくする事でもあれば、又他面では餘りに大きく見積もつた事でもある。マルクスが現實の自然必然的進化の道程に理想世界を置いたことは、確にユウトピアニズムより遙に高い進歩を示したものであるけれども、其の爲めに理想たる本質は失はれて、彼の所説は存在一元論の素朴的見解に墮して了つた。其れ故にマルクスを正當に解する爲めには、一面では彼が現實の中への理想の内在性を主張した事を偉なりとすると同時に、他面では彼の存在一元論を破却して、現實の中よりの理想の超越性を主張しなければならぬのである。理想は現實を離脱し盡した形而上學的存在では無い。其は飽くまでも現實に内在する。併し同時に其は現實に没却しないで現實から超越する。此れだけのことを忘れてはならない。マルクス前期の社會主義者は理想の超越性を高調して形而上學にまで墮し、マルクスは理想の内在性を高調して自然主義にまで墮した。其れが兩者の正當なる批判である。ユウトピア的と科學的との區別は、其の相違によつては、少しも明瞭にせられて居ないのである。

ユウトピアニズムと然らざるものを區別した點では、サンディカリストはマルクス主義者よりも正しい見解を持つて居た。例へばソオレルはユウトピアを以て一の知的生産物であるとした。知られた事實を觀察し、論評した後、現實社會が其の中に包含する善惡の量を測定する爲め

に、現實社會を比較せしめることの出来る一の模型を建設しようとする理論家の仕事だといふのである。彼は此の立脚地に立ち、自由主義經濟學と及びマルクス社會主義とを一括してユウトピアニズムの典型だとした。彼の所謂「神話」は行爲せんとする決意の表現であり、一の事物の記述では無い。此のソオレルの批評を私は頗る正當だと思ふ。ユウトピアは一の主知的生産物であり、一の事物の記述である。換言すれば、理想を形式的に律せずして内容的に律したものである。ユウトピアニズムのすべての誤謬は此の根本的錯誤に基づいて起つた。

理想は内容的に決定せられる譯にいかぬ。若しいさゝかでも理想に内容的記述を加へたとすれば、其れは單に一の手段であつて理想では無い。何故なれば此の如き内容的記述は、何等かの標準に照らされて然る後に理想的だといはれ得るのであり、其の場合の標準が眞の理想である。内容は他によつて批判せられるが自ら他を批判することが出来ない。理想の内容規定は、其の能動的規定者を無限に遡原して此れが究極するところを知らないものである。然るにユウトピアニズムは常に其の内容的記述だけで甘んじて居る。眞の理想主義の形式的規定を爲すことゝ其れの間には本質的の溝渠が横はる。理想はユウトピアをより濃厚にしたものでも無ければ、又其の規定條件をより現實的にしたものでも無い。其れ故にユウトピア的といふには、科學的といふ概念が正當には對立しない。等しく知的産物だ。規定の精粗は、今我々に問題とならぬ。要は其れがユ

ウトピアであるか、理想であるかの根本的分離だ。

歴史は無限の経過を以て個性的に生起する。歴史は不合理的に進展してダイアレクティッシュに進化しない。マルクスは歴史を考察して根本的に幾多の誤謬に陥つた。第一に彼の社會論は社會有機體説なる舊説の上に立脚して居る。第二に彼の歴史理解は餘りに主知的であり、歴史の歴史たる所以の不合理の個性を没却して居る。其れ故に見よ。我國でのマルクス主義者も亦殆どすべて此の誤謬に陥つて居るでは無いか。此の謬見の上に立脚するが故に、社會主義者の理想は亦一の合理的ユウトピアニズムに墮せざるを得なかつた。我々の理想主義は、随つて少くも二點で彼等の主張と相違して居る。第一に、我々は歴史を單に知的に、合理的に理解しない。歴史は全文化的の進展であり、随つて不合理的、個性的、一回的生起である。第二に、我々は理想を内容的に理解しない。理想は歴史の無限内容を、其のあらゆる時と場處とに於て規制する形式原理である。かくして歴史は無限に合理的に進展するが故に、すべての内容を理想化し盡した全理想的一點なるものへは到達することが出来ない。然るに理想を内容的に規定するユウトピアニズムにあつては、理想は現實的に到達の可能なる、未來の或る一點である。

併し此の如き理想観、歴史観は、マルクスの所説の中にも全然的に含められて居なかつたので無い。其れを發見して新らたに、正しい意味のマルクス主義を建設しようとしたものはベルン

シュタイン一派のカント化せられたマルクス主義、所謂修正派社會主義の其れであつた。私は彼の社會改造の具體的方法論、殊に彼の議會主義、立法主義等には同感出来ない多くの點を見出して居るものであるが、併し少くもベルンシュタインの理想觀、歴史觀の根本的立脚點には、正統派社會主義者の其れより一段の進歩を爲したものと見て居る。ベルンシュタインによれば、歴史は無限の進展である。其れ故に改造は或る未來のユウトピアの爲めに意義を持つので無く、刻々に経過し行く現實の爲めに必要であり、且つ其の意義を發揮することが出来るのだ。

理想を内容的に規定して、現實的に可到達的であると考へるユウトピアンに伴ふ弊害は、第一に、此の理想境への到達を餘りに容易に、餘りに短時間的に考へて了ふ近視だ。第二に、此の目的へ到達する爲めの現在を悉く過渡期と見做し、随つて其の過渡期ではあらゆる非常手段が許され、其の手段は時に非理想的になつたとしても、懸て來る可き目的が其の總てを淨化し得ると爲す事だ。社會主義者が此の焦燥心に弄ばされて居る半面の熱情を、私は甚だ美しいと讚嘆する事は出来るけれども、併し其の熱情は却て彼に科學的嚴密性を失はしめたことを惜む。私の考へるところでは、内容的理想は既に概念的に誤想である。なほ且つ其れを許容するとしても、彼等の理想する理想境への到達は、然かく容易に、且つ短時間的なものでは無い。随つて其の改造方法は、十分に遠望的に、統一的に、細微のものでなければならぬ。次に現實を理想への過渡期と

呼ぶならば、歴史は永遠の過渡期である。此點で完全に理想的なる點へ到達したと呼ばれる時のある可き理が無い。

若し強ひて理想に到達するといふ概念を使用するとすれば、其れは所與としての現實を、此の處、此の時に於て理想的に規制し盡すの謂、換言すれば現在の環境に於て其の可能的なる最上を盡すの謂でなければならぬ。又目的は少しも手段を神聖ならしめるもので無い。此の考へ方は、再び理想を可到達的と考へる誤謬に基く。可到達的であればこそ、目的は手段を神聖にするとも考へられようが、理論上其の然らざる場合、現實的なる手段こそは、理想の照臨し得るすべてだ。此の他に理想の活動し得る曠野は無い。過渡期の價值を輕視するものは現實二重性の誤謬に陥つて居る。随つて彼等は永久に現實を手段視するの外無く、以て現實を空幻化し、人生を冒瀆するのだ。

私が斯様に論じたのは、正統派マルクス主義を自任して居る勞農露國のポリシエヴィズムを根本的に非難せんが爲めだ。ポリシエヴィキの獨裁主義は、私が右に述べたユウトピアニズムのあらゆる錯誤に陥つて居る。我々はマルクス主義のユウトピア的要素を訂正して、却つてマルクスの眞義を發揮したと全く同じ論理をポリシエヴィズムの上へも適用し、ポリシエヴィズムの進む當然の大路を發見しなければならぬのである。

文化生活と人格權

一劃一と個性

生活は貧素なのより豊醇なのが望ましい。生長は寒縮したのより伸達したのが好ましい。今若し我々が理想主義を樹立して、此れを生活の規定原理にするとすれば、其の爲めに我々の生活は固定した、劃一的のものに化しはしないか。主義はすべて一面觀だ。相對觀だ。具象的なる生活の上に一の截斷を置き、其の個性的なるものを脱出せしめて其の普汎的なるものを採擇する仕方だ。主義といへば既に主義への拘泥だ。眞に生活を豊醇に、伸達せしめて生きるものは、寧ろ主義に融通無礙だ。右の如くに言つて或る人は私の理想主義に反對するでもあらう。

併し此の反對は、依然として批判的觀念論を素朴的觀念論と誤想し、判斷意識一般を心理學的自我意識と混同して起つたものだ。後者の上に立つものは小主觀主義である。其れこそは生活の一面觀だ。相對觀だ。何等か變化するものを規準として此れに拘泥したのだ。此れに反し、理想主義こそは有りの儘の現實を肯定するものだ。現實の必然的連結を客觀的證示とし、小主觀の好

惡を寧ろ此の世界の中に没入せしめる。理想主義と小主觀主義とを今一度對比すれば、後者は内容的の規定であり、前者は形式的の其れだ。歴史の上に個性的に進展する内容を規準とすればこそ、其れにより規定せられる生活は固定的劃一的に陥るのだ。理想主義の形式本位觀は、凡そあらゆる拘泥を離脱する爲めの遠望だ。

劃一的といふには前景と後景との對比が必要である。然るに此の對比には、兩者に共通なる一規準を豫定する。即ち其の規準が理想主義の臺石だ。個性的といふには、其れに個性としての意義を與へる價値の源泉が必要である。價値を含まぬ個性といふは形容語矛盾だ。強ひてさうしたものを求めれば、其れは放縱か氣隨かだ。個性では無い。そして此の全體的源泉としての價値の上に足場を置くのが理想主義なのだ。此くして凡そ理想主義は、我々が一の主義、一の主義の決定を目して劃一的であり、非個性的であるとする、其の根本的立場なのだ。理想主義を認めないものは、徹底した現實主義になり得ない。何故なれば彼の眼に於て、すべての現實は夢幻か、蔽布かに過ぎないから。生活の豊醇は、生長の伸達は、理想に參し、價値に朝して始めて豊醇であり、伸達であるのだ。然らざる限り、我々は凡そ生活に就て何等かの言説を爲す彼の言葉を否定するか、然らすんば無視しなければならぬ。

人が自らの心を解放し、自由にしたとは、彼が自らの價値判斷意識を解放し、自由にしたこと

だ。換言すれば自らの價值判断をして其の主觀性を脱せしめ、本來の客觀性に歸らしめたことだ。其の客觀的價值の立場に於ては、人は最もよく謙讓となり、すべての人間の生き方を認容し得、世界の進みを個性的に見得る。己れを空しくすることは此の境地である。何等か排擠す可きもの、中に、何等か肯定す可き、眞に其のものだけの持つ個性を感得するのだ。此くして個性とは永遠的、普遍妥當的なる價值に満たされたものだ。偏倚で無く、稀現で無い。眞の個性は眞に自由なるものだ。

二 生命と享樂

理想主義は嚴肅過ぎる。其れは生活の生活たる所以の味はひを忘れる。理想的價值的だとは生き甲斐を感ずるといふ意味では無い。サアニズムの取る如く、生活は單に生きることだけに其の價值を持つ。生きる事のニュアンスは消し難き眞實性だ。所謂理想、所謂價值では計られない。無量具象的の價值が其の中には含まれる。斯様に説く個性的生活者を我々は自らの周圍に見て居る。併し私は其れに賛する事が出来ない。

生活、或は生命、其の言葉は何といふ美しさだ。けれども其れの意味するものは茫漠とし、捕捉に苦しむ。生物學的に生きるといふのか、或はもつと高く人間的に生きるといふのか。前者ならば

ば其れは生育だ。自然科學的に身體細胞の分裂があるだけだ。後者ならば、何が其の生活をより高く人間たらしめ、生物學的の其れで無い高貴の見方のものにして居るか。我々は此の場合再び我々の所謂理想、所謂價值を持ち出さざるを得ない。苟くも生活のニュアンスが其れだけで獨立し、眞實味に満たされて體驗せられるとは、依然として、其の生活が價值により充實せられて體驗せられるの謂では無い。即ち價值體驗の心術テクニックに於ける感激を、我々は個性的のニュアンスと呼んで居るのではない。いかなる場合にも個性は價值を離れての個性ではあり得ない。

右の生活充實論が一轉回すれば、生活快樂論となる。生きる事の意義は快樂であり、生き通はす事の目的が其れだといふのだ。そして理想主義を目しては、人生の快樂を否定する道學の見解に外ならぬといふのだ。此の見方は現在暗々裡に大きな勢力を持つて居る。いかにも彼は肉感的、身體的快樂への偏倚を排斥するだらう。そして此の單に物質的なる感情を、價值の批判原理だとは呼ばぬだらう。併し徹底的には、率直には、其の物質的快樂を價值其のものだといふがよい。何故なれば凡そ我々の快感情には、心的と物的との區別ある道理が無く、すべては同一なる心理的快感情に外ならぬから、若し此れに心的物的の區別を施し、兩者に價值差等を加へたことすれば、其れは最早快感情其のものに依つての分類では無く、或る其れとは違つた原理によつての選擇である。即ち其れは我々の所謂價值原理であつた。

快樂論者は結局我々の心理的感情を規準としてすべての生活の價値を批判しようとするものだ。併し心理的感情は判斷意識一般から見られれば、單なる生活内容であるに過ぎぬ。内容的ものは時間の中に經過し、歴史の上に發展する。他によつて批判せられはしても他を批判する基準ではあり得ない。況んや其の經過し進展する感情から、或は快或は不快の性質を概念的に抽象する事は不可能な筈だ。一般に生活の價値を批判し得る生活の「快」なるものゝある事を私は信じてない。

併し右の如く我々が、批判原理よりあらゆる内容要素を驅逐する所以は、批判としての立場を純粹に保持しようとするが爲めであり、生活内容よりあらゆる快樂を排斥しようとするので無い。其の后者は寧ろ理想主義の反對だ。其れは生活二重論に陥るか、然らずんば生活否定論に墮落する。此の事に就ては私は既に前章で叙述した。生活として當然我々には快樂が享受せられるだらう。又其の生活に於ての行爲動機は將來に豫想せられる快感情が主たるものになつて居るだらう。私は其れを否定しない。生活に快樂を伴隨するは、人間が機械で無く、一の有機體なる限り必然の經過だ。併し行爲動機は必ずしも行爲判斷では無い。前者は個別的の内容を含む。内容無き動機は有機體としての人間に考へられない。然るに價値判斷は其れへの形式附與だ。理想的規制だ。我々は欲するが故に動き、規制するが故に意義を認める。我々の行爲動機と生活内容とが快樂なることは、直ちに行爲の意義と生活の價値とが其れであることを意味しないのである。

其れ故に我々は生活の快樂を無下に排斥しようとは努めない。批判原理としては此れに依るを得ないといふのである。今或る人が極度の禁欲主義者、快樂否定論者であり、且つ其の主張に依つての生活を續けて居たとしても、我々は彼が生活を享樂しないからといつて其れを輕視する事は出来ない。同時にいかに強度に生活を享樂する人間が存在したとしても、我々は其れ故に彼の生活を豊醇伸達だと言はない。すべて人生の究極意義は理想であり、其の最高色彩は價値だ。生活の豊醇伸達は、其の價値に對し、生活の享樂とは或る全く別の意味に於てのみ主張出来る事なのだ。

三 文化生活の充實

然らば文化生活の充實とは一體何であるか。我々の生活に無限の豊醇、無量の伸達とは何を意味するか。

生活の意義は與へられるものでは無しに發見せられるものだ。強制せられるものでは無しに創作せられるものだ。此れを發見しないものは人生に蕭條であり、此れを創作しないものは行爲に

不自由だ。此れは我々の價值生活の根本義だ。

人生は無限の深度を持つ。いかに複雑に此れを決定しても、其處にはなほ若干の餘分がある。無限は加減乗除を離れての無限だ。其れは我々の歴史生活に打ち消し難き信念であり、不朽の人間努力の源泉である。其れは誠に一個の信念だ。我々はいかにしても此れを證明し得ない。さて人生が其の如き無限の深さだとすれば、更に我々は此の人生の意義を無限に發見し得る。其れは一の文化範圍の内部に於て無限の發見である許りでは無く、文化範圍自身が實は無限に發見せられる坐標軸の中の幾つかなのだ。我々は今其等の文化坐標軸として學問、藝術、道德、宗教、政治、經濟等をしか知つて居ないが、併し同様の自律的品位を持つた價值は、今後互に幾干發見せられるか、我々は今にして豫測し難い。否な寧ろ我々の豫測のすべては、此等既發見の價值坐標軸に依憑せしめられて、然る後に始めて可能なる叡智にしか過ぎないのである。

學問價值と藝術價值とは絶對に其の特質を異らしめて居る。其等は互に獨立した批判基準だから、兩者の間に價值的聯結を求めざる事は出来ない。何故なれば聯結は其れ自身、兩者に超越した獨立價值を豫想せざるを得ないから。多くの價值範圍に就き、其の一二を知つて他を知る事の出來ないものは、其れだけ人生の意義を狭く見て居るのだ。例へば藝術價值を發見し得ないものには、一枚の油繪は單なる麻布、顏料、顏料の結合である。其處には科學の對象となる物質はあつ

ても、藝術は存在しない。同様にして花鳥圖は博物教授の標本として、人物畫は修身談の手段として見られるだけだ。何處にも藝術なるものは無い。併し彼の「學問の眼」を我々は誤謬だとは言はない。たゞ彼は藝術價值を人生の中に發見し得ないのである。道德價值だけ知つて藝術價值を知らないものは、裸體彫像を不徳極まる表現だとし、學問價值だけ知つて道德價值を知らないものは、道德を功利主義に墮落せしめるだらう。宗教の如きは科學者には一個の迷妄だし、道德家には勸善懲惡の便宜だ。そして此等の狭い見方しか持たないものには、知識や勸誘を以て其の廣い見方を示教することが出来ない。所詮は彼本來の發見力、即ち良心の發動に待つだけのことだ。

若し我々の良心が完全に發揮せられたとすれば、人生は萬華鏡の様に複雑となつて見えよう。其處には無限の價值位層がある。人間の活動の何れ一つとして、他に手段となるだけで終るもので無い。すべての人間活動が自律的である。人格の品位は結局各活動の品位だ。我々の一つの活動が、たゞ一面の色彩をしか示し得ない生活は蕭條であり、其れが無数の品位を籠もらせた生活は豊醇だ。そして此の如き價值位層を發見し、或は少くも容認し得る人は、他人の生き方に寛大であり、自らの操持に於て自由だ。たゞ其れは發見せられるものであつて強制せらる可きもので無い。自ら發見し得ないものが發見し得たやうに假裝するのは、自由で無いのみならず、寧ろ良

心の癡痺である。其處には各人の天稟の相違があるから、我々はたゞ其様な價值位層もあり得ると寛大に容認するより外は無からう。併し努力は絶えず價值位層の新らたなる發見に向はなければならぬ。人生は無限の深さを持つて居る。

多くの價值範圍は其の独自の品位を持つて人生に現はれ来るのみならず、一々の價值範圍は亦無限の追究を我々に可能ならしめる豊醇なる領域だ。其の追究の道程に於ても、我々は永遠に新しい個性の石を拾ふ事が出来る。眞に自律的に進む人間活動は、何人の威力によつてやも阻止せられない。價值追究の大道は紫黄、紅白、無邊際の複雑野だ。併し其れは誰れもが熟知することだから、此れに就ての詳論を省く。

以上の論述によつて知られる如く、我々の生活の豊醇、生長の伸達は、享樂によつて測定せられるのでは無く、依然として人生の理想に、價值に對比して檢索せらる可きである。凡そ生活の充實に二の見方がある。一は異なる價值位層を幾干でも生活の中に發見して、我々の活動する視野を豫め擴張する事だ。二は此の價值位層の一々に於ける个性的深化を活潑ならしめる事だ。我々は右の二の方法により、幾干でも生活内容を充實せしめ、此れを立體化せしめることが出来る。併し其の何れの場合に於ても、畢竟價值ある歴史は自らにより創作せらる可きものであり、他より與へられることの無いものだ。其れ故に歴史の價值は個性的であり、個性的創作の中心である

人間は絶對的に自由なのである。

人間は創作の自由者だ。生活は意義に就て無限の深さだ。我々は此處に行爲の根本的信念を基き上げる。

四 勞働權、勞働全收權、生存權

社會政策の根本的目標として、人間のいかなる權利が究極的に肯定せらる可きであるか。其れは勞働權であるか、勞働全收權であるか、或は亦生存權であるか。

勞働權は言ふまでも無く、現經濟肯定の前提の上に立つて居る。其れだから此れは人間の要求する基本權利では無い。次に勞働全收權はどうか。現經濟制度は少しも此の權利を認容しては居ない。勞働果實の幾分は賃銀として勞働者に分配せられるとしても、賃銀の性質は本來分配としてのものでは無い。其れは勞働力の買収だ。分配は單に資本へ對しての儲けの分配だ。勞働は此の生産制度に取つては、生産原料と同列の手段物だ。勞働は制度の基本では無く、制度の素材だ。基本は分配に參與するけれども、素材は何等此れに顧慮せられるところが無い。

勞働全收權の容認せられる社會は社會主義的の其れであり、現制度の其れを覆へず。働かざる

ものは食ふ可からずの社會である。資本に對して分配せられず、勞働に正比例して分配せられる。そして此の場合分配は儲けの分配では無く、勞働果實の其れだ。事件は同一でも性質は違つて居る。勞働全收權の主張は、現制度より新社會制度へ轉回する爲めの力強い動力になり得る。

併しよく考へて見れば、勞働全收權は又右の如き經濟社會の前提に立つて可能なるものだ。依然として一の歴史的事實的制約を持つ。何故なれば、生産物さへ無限に豊富となつた社會を考へれば、生産物を其の生産者の提供した勞働量に正比例して分配する事は少しも公平な仕方では無いから。なほ言へば、勞働全收權ほど道義的根據の乏しいものは無い。勞働力の大小が、所得の大小を決定する社會は、資本主義的社會が持つと全く同じ程度の弊害を擔つて居る。分配を決定するものは力だ。正義では無い。

勞働權、勞働全收權に比すれば、生存權は一層徹底的であり、一層事實的制約を離れて居る。此の權利を基礎とした社會では、各人の基本的生存だけは、兎に角勞働の有無に拘らず、保障せられて居る。分配の標準は支出せられた勞働力では無く、生存の爲めの欲求だ。即ち生存權の支配する經濟社會は社會主義者の社會では無く、アナキストの其れである。此處に一塊のパンありと假定し、其れの所屬を決定するに、資本主義者は、此のパンの製造に何ほどの資本を提供したかを反省し、社會主義者は、此れに何ほどの勞働力を費消したかを顧慮し、最後にアナキス

トは、彼が今現に何程の飢餓を経験して居るかを告白するだらう。其處に三者の相違は明瞭となる。アナキストは最も徹底的だが、併し現制度に對比して最も遠い。寧ろ或る人達には空想だと見えるかも知れない。併し道義的には生存權が最も多くの根據を持つ。此の場合の公平は他の何れの場合よりも高くジャスティファイせられ得る。

然らば生存權は我々の求める基本的權利であるか。基本的權利は形式的でなければならぬ。あらゆる事實的歴史的制約から離れねばならぬ。何故なれば事實的歴史的に制約せられる内容的ものは、結局變化し去るものだから。基本的權利は變化してはならぬ。隨つて形式的に止まる可きだ。生存權は其の意味に於ては我々の求める究竟的のものでは無い。生存權は單に人間の生物的生存を保障するだけだ。其の保障のある人間は、文化生活へ或る一の準備を與へられただけだ。目的は價值であり、人生の意義である。生存權は價值圖では無い。後者から見れば前者は其の素材であつて、其の基本では無い。基本はすべて價值のみの定めるところだ。生存だけの保障はあつても、我々の價值的進行、即ち文化生活の無限進展へのすべての障礙が除去せられるので無ければ、我々は人間的に自由となつたとはいへない。

勞働權は資本主義社會を前提し、勞働全收權は社會主義社會を前提する。此等が徹底せられた生存權はしかし尙ほアナキズム的社會を前提する。そして此等の社會はすべて内容的に何等か

の制約を含んで居る。最後のアナキズム的社會でさへも、文化主義的理想社會への支關である事は、社會主義の其れがアナキズムの其れへの支關であると同一の理論的基礎に立つて言へることだ。

五人格

メンガアの定義して居る意味では、労働全收權や生存權には右の立場しか許されない。けれども生存權には其れよりもつと突つ込んだ意味が考へ得られる。少くも生存權の根本的の考へが作り上げられたマックス・シュタルナアやゴドウィンに於ては、其れ以上の深い意味があつたと私は思ふ。生存權のより基礎的の意味は、一社會に於ける生物的の生存保障では無く、各要求の其れ々の範圍の生存權であつた。元來我々の持つて居る多くの心理的要求の中で、何故若干の種目だけが必須的のものとして選定せられ、其他は第二次的のものとして後廻しにせられるのであるか。衣食住の爲めの要求は、學問、藝術、道德等の文化的要求よりも切實なものと見られるのであるか。此れを自己一身に取つて見れば、寧ろ我々は生存の爲めのあらゆる物資を拒絶して、學問、藝術、道德等の文化的要求の爲めの物資を得たいと希ふ場合があるだらう。此くして生存權は生存の爲めの基礎的物資を要求する權利だとすれば、其れと同じ事をすべての文化的

要求の上に及ぼし、生存權とはあらゆる文化的要求が自らを充實具現せしめる爲めの基礎的現實を要請する權利だと主張することが、甚だしい定義の擴張だらうか。生存の最少限度なるものは、抑も何に對比して定められるか。單に衣食住の其れを分量的に定めるさへ容易で無い時に、あらゆる要求に互つて、此れだけは生存に不可欠だと劃一的に限定せられ得るものだらうか。我々はすべての要求の上に十分に公平となり、要求の要求する意味を自律的に認容してやりたい。其の場合生存權は右に限定した如くに、人間の生物學的生存保障では無く、各要求の公平具象的なる生存權となる可きだらう。

我々の人間活動は、其の何れ一つでも他の活動、他の人間と社會の活動の手段となる可きでは無い。一の活動は其の活動として完全に自律し得、又自律しなければならぬものだ。活動が自律するとは其の進行が純粹となることだ。即ち其の活動自身の目的を明確に認識することだ。此の目的こそは我々の所謂價值である。其れ故に我々のすべての要求が生存權を主張することは、我々の生活のすべてが其れ々に價值化せられて、文化生活が残るところ無く充實せられた意味である。無限に豊富なる文化生活は、我々人間に當然の權利だ。一の欲望も其の儘手段的に空費せられ、或は伸達せられずに廢棄せられてはならぬ。即ち文化生活の極意は、マルクスの理想社會の標語とせられた「各人は各人の能力に隨ひ、各人は各人の要求に隨ふ」の境地だ。此の境地は生存

權の完全に發揮せられたアナアキズム的社會だ。社會主義の極致はマルクスによつてアナアキズム的社會にあるとせられたのである。

各人は各人の要求に隨ふとは、消費の規準を各人の肆意に求める意味では無い。すべての文化的要求は、其れの充實具現すべき現實基礎を要請し得るの謂だ。隨つて彼の文化生活は、第一には其の價值位層を幾干でも擴張し得、第二には個々の價值範圍を無限の經過に互つて實現する事が可能である。次に各人は各人の能力に隨ふとは、此の文化生活に個性的制約の置かる可き必要を主張した言葉だ。換言すれば社會的歴史的文化生活に參與する各人の個性的持ち場を定めた言葉だ。併し要するに此の標語の前半は後半と一致する。否寧ろ前半は後半其のものだ。我々の生活は無限に充實せられ、歴史は永遠に個性的の進展を示す可き、文化生活に對する我々の根本的信念を告白する標語である。

此くして我々の要求し得る基本的權利は人格權だ。各々の活動が無限に自律的價值を追究し、各々の活動が個性的に此の文化價值へ朝する事の權利だ。生活の豊醇伸達は、此の人格權の根本的主張の世界以外には求められない。其れは純粹に形式的の表現であり、内容的限定の對比を持たない。人格權が其れ々々の歴史的社會制約に接觸した接線は或は勞働權、勞働全收權、生存權だ。其等は人格權が歴史の中に内容を得て、其れ々々の現實態を示したとしてのみ意義を持つ。

換言すれば、此等の權利が其れ々々に權利として主張せられる根據は、常に無意識的に、人格が人格の品位を主張するの權利、即ち人格權の上に求められて居るのであつた。人格權は社會の各成員を個的に主張せしめ、且つ制約する我々の根本權利である。

社會の理想的形態

一 理想社會

「社會」は地理的に、物理的に限定せられ得ない。其れは自然では無くて文化だ。人間の意識の上に成立して居る。詳しく言へば、價值展開の動的歴史態として、人間意識の上に創作せられて居る。然らば理想の社會は、單に因果法則の必然的一過程では無く、人間努力の究極生産だ。私は次に社會の理想態の形式的様相を考察して見よう。

マルクスに随へば、理想の社會では、「各人は各人の能力に随ひ、各人は各人の要求に随ふ」とある。其れは直ちに我々理想主義者の欲するところだ。人格權の妥當なる發揮は當然此點に達する。我々は人格權の發揮に二の見方を區別した。一は異なる價值位層を幾干でも生活の中に發見して、其の生活視野を擴張する事だ。二は此の價值位層の一人に於ける個性的深化を活潑ならしめる事だ。勿論此等の價值創作は十分に個性的でなければならぬ。各人は其の天賦の制約によつて發見し得る價值位層の種類を異にし、次に一々の價值位層の追究の深さを異にし、最後に此の

價值位層に參畫するものを個性的に無限に異らしめる。我々は一人の個人に就き事實的には其等の個性的參畫の種類と深度と様式とを明かにする事が出来ないだらう。其れは我々がすべての場合に就き、何が事實的に眞なりや、善なりや、又美なりやを確定する權利を持たないと同一の理だ。併し少くも批判の原理としては、あらゆる價值評價に普遍妥當なる價值を樹立し、其れに就ては相對主義を律しないと全く同じく、一個人の價值參畫の個性的表現には、批判としての普遍妥當が律せられる。蓋し其は各人の持った自然的基體を、完全に價值化したと假定しての函數だ。一定の自然的基體に、一定の價值的函數が對應するは勿論の事だ。

此く見れば、人格權の完全なる主張とは、結局はマルクスの理想社會の標語其のものゝ示す境地である。彼の場合には生産と消費とを分離して言つたからかうした標語になつた。よく考へれば要求は能力と別物では無い。能力は一の靜的素地だ。其れが動的に解舒せられたものは要求だ。兩者は嚴密に相應する。然らばマルクスの標語は、實は其の前半或は後半の何れか一方で意味を盡くす。此れを経済的に生産と消費の語で表はして見ても、生産は即ち消費であり、消費は即ち生産である。兩者の間には論理的の區劃が立てられない。一の創作過程は價值の乏しい資料に價值の形式を附與することだ。資料の消費せられる方面から見れば、創作は消費であり、新價值様相の結晶せられる方面から見れば、其れは生産だ。又他人の創作した價值ある生産物を自己

の要求の對象にするとは、他の個性的創造を追體驗して、自己の生活を充實せしめる事だ。すべての人間の生産と消費とは、右の如くにして價值無きところには價值を創り、既に價值あるところには其れを追體驗する、藝術の創作と鑑賞に化しねばならぬ。其れが眞に生きた我々の經濟生活だ。生存權の徹底せられた人格權の主張とは其れだ。然るに現在の社會では、生産と消費と、其の間に割線を畫く所以は、生産と消費とは其の間に代價關係を存するからだ。勞働全收權すらも理想社會の生産消費問題を解決し得ない。

其れ故に私は今能力の解舒せられた個性的動態を取つて、専ら我々の要求を取扱はう。要求は残るところ無く、自由に主張追求せられねばならぬ。併し此の場合、我々は「自由に」の限定語を置いた。自由は自律である。普遍妥當性を豫定する。各人の要求は、素材のまゝでは個性になつて居ない。個性とは價值的なるの謂だ。要求は普遍妥當性を負荷せられ、價值的となつて、其の個性に品化せられなければならぬ。要求を主張するとは、たゞ此事のみを意味する。ギルド社會主義者が「正しき人を正しき地位へ」といつた意味は、隨つて我々の人格權の主張に一致する。此の場合には主として個性の普遍妥當性が顧慮せられ、且つ要求は寧ろ能力の靜態に於て考へられて居る。

我々の豫想する理想社會の組成員は、右の如く規定せられることが出來た。其れは人格權を完

全に發揮するものである。而して其の個人によつて組成せられる社會の權相も亦全く豫想せられる事が出來た。各人は絶対に換價を持たない個性的一點となり、其の要求の發揮は、互に創作と鑑賞の關係を以て、具體的に、直接的に、透融結着せしめられる。自己を律するものはたゞ自己だけだ。即ち其の自己拘束の基準は、各人に取り全く個別的である。個別的基準により自己を律した創作表現が、直ちに社會構成である。隨つて社會には何等の機械的強制力も存在しない。個人は絶対の自由だ。其の個人の聖悅に満ちた自由創作が直ちに社會だ。

マルクス及びエンゲルスの理想社會は、此れと同じ理論によつて其處に何等の強制力も存在しない。彼等は法的規範をすらも此れに許さうとはして居ない。國家機關が何等かの強制力を意味するとなれば、理想社會にあつて國家は全く死滅する。故に彼等は此の社會を國家とは呼ばずに共同社會とだけ呼んで居る。

全社會を包括しての一統轄がある。けれども其れは、一の概念によつての抽象的綜合では無い。抽象には要素の棄捨がある。此の場合には、全部の要素は残るところ無く包容せられての實在的一聯繫だ。個性的一合同だ。社會の立體性は此れほど完全になることが無い。立體は、各個人を其のまゝ絶対の一基石として、質的の立體だ。何等の量的觀をも混入して居ない。一基石を加へるも、亦此れを排除せしめるも、全體の統轄性立體性には寸毫の影響をも與へない。たゞ其

れによつて價值實現の一系列中の一要素を、或は加へ、或は損じて、立體的社會の内容が或は豊かに、或は貧しくなるだけだ。社會の結合力は、其の組成員が僅かに二の場合も又百萬の場合も、何の變りが無い。組成員の大衆が一組成員の自由を傷害しないは勿論の事として、一組成員は此の大衆より量の壓迫をすら感じない。社會は森々たる太古林の如く、靜かにして豊かだ。特に愛社會心を發揮す可き非社會的反抗無く、特に社會奉仕を標榜す可き、缺乏罅隙が無い。任運にして動く。社會は閑雲流水の如くだ。太平にして治の至れるは正しく此の境地であらう。

我々は今此の如き究極社會を何と命名す可きやを知らぬ。其の發端に於て考慮した如く、理想主義の究極社會と呼ばれるより外は無い。併し我々はなほ多くのアナキストが、其の社會的理想態を描いて、略々我々に吻合するものを得たことを忘れてはならぬ。西洋のアナキストが其れを爲すを知るのみならず、我々は既に此の根本要求を東洋の老莊より聞くを得た。たゞアナキストにあつては、此れへ到達する經路を我々と異らしめて居る。またマルクスによれば、社會主義者の理想社會も亦其れと全く同じいものだとせられる。マルクスを追蹤したレニンが、此れをポリシエヴィズムの究極理想と爲した事も當然である。私は右の社會様相を假りにバアンナル、アナキイの社會と呼んで他と區別しよう。

併しバアンナル、アナキイは要するに一の理想態だ。現實態では無い。我々の人格的努力が

其の究極に豫想する形式的整美だ。個性的價值創作の系列の極限概念だ。内容的限定のユウトピアでは無い。其れ故に現實態としては、我々は歴史のいかなる一點に於てやも、たゞ此のイデオを想戀し得るだけだ。人生の内容は無限に豊富だ。其の全體に對立する我々有限的個人の有限的努力は、其處にバアンナル、アナキイの一模型を創作し得るに過ぎない。マルクスやレニンは其れ故に最も完全なる共產主義社會の前階に、第一のより低き共產主義、即ち社會主義の社會を想定して、此處では公的なるも同時に非政治的なる強制力の成立を疑はず、給付に隨つての勞働賃銀の止むを得ない事を認めた。「權利は、其の社會の經濟的設備、及び其れによつて生ずる文化の發達より、より高く登ることは出来ない」といふのが、マルクスの考へであつた。其の社會では全體の統轄は、各個人の實在性を其のまゝに包容しての實在的統轄性では無く、可及的少量に於て共通概念による抽象的統轄を免れ得ない。其處に社會的強制が生起する。立體性は個性的、具體的、實在的の其れでは無い。出來得る限り、抽象概念を細密複雑ならしめ、其れに従屬せしめられる各個人の實在的要求を可及の限度にまで包容するとして、此等の抽象概念の統體構造だ。

バアンナル、アナキイは、價值と實在とが一致すると豫定せられての一頂點だ。即ち其れが限界概念なる所以だ。思ふところに隨つて矩を躓えずとは、實在が價值を基礎附けることの謂で

は無い。價值は批判の根據だから、如何なる場合にも實在に其の根據を求めない。意欲が其のまゝに價值的展開だとは、認識論の世界では限界概念として律せられるのみだ。其れ故にバアソナル、アナアキイの社會には、價值的努力を豫想しないとしても、價值的努力其のものを離れる事が出来ない。寧ろ其處は價值的努力の究極點だ。すべての實在が價値化せられ、最早此れ以後に價値化せられるを要する實在無しと豫定して、價值的努力其のものを考へないだけだ。其れだから此の理想社會の市民が、一旦其の意欲を價值的で無い方向に向はしめたとすれば、理想社會は理想的で無くなる。社會を支配するものは人格であつて、境遇や制度では無い。境遇と制度とさへ改造せられれば、其の組成員は自らの意欲の赴くところに随つて、何等社會成立を破らすと考へは間違つて居る。此の點に於て我々は、所謂アナアキズムに概ね反對の立場を取る。クロポトキンの理想社會にあつても亦、人間の價值的努力が社會組成の根本動力である事の前提を忘れようとして居る。併し社會は自然物では無い。其れは文化的成立だ。随つて理想社會は其の組成員が理想的に價值的であつて始めて成立し得る。此事は常に忘れられてならぬ。バアソナル、アナアキイは少くも所謂アナアキズムでは無い。

二 社會組成の根本理論

社會は凡そいかにして成立するか。

我々は今二人の人格を考へる。彼等の文化的意欲連繋に於て、最も基本的なる社會は既に成立する筈だ。社會は彼等の意識への内在的世界である。然らば二者が一つの意欲的連繋を組成するは、彼等の人格の全面に於て爲すのであるか。なほ言へば彼等の要求の全面に於て、夫等要求へ平等的に、全部的に連繋するのであるか。此く考へれば、其の社會論の歸結はヘエゲルの國家至上哲學に來らざるを得ぬ。併し此れは人間社會の基本形態の事實的解剖に粗なる結論である。我々は今少し綿密に、此れに具體的分析を試みよう。

二人の人格が社會を組成するは、彼等が有する多くの要求の何れかを満足せしめようとすることを發端とする。甲の要求と乙の要求と、何等かの接觸點あるが故の社會であり、其の接觸無き要求の部面では、よし彼等は其處に並立して居ても何等の社會を成立せしめないのだ。例へば彼等は、食物に就ては互に接觸し得る要求を有するも、甲は繪畫を好み、乙は庭球を好むとすれば、前者では二者は社會を構成し、後者では互に別々に其の要求を充實せしめるだけだ。即ち其の社會は食物に就てだけの社會である。然らば此の互ひに接觸し得る要求の部面に於て、一の社會を組成せしめるとはいかなる事であるか。要求は單に自然的の要求だ。實在的の要求だ。其の要求の質が共通であるからといつて社會は成立しない。例へば兩者が互に食物に利害を感ずると

して、其の間には一塊のパンしか置かれて無い様な場合だ。共通利害さへあれば社會の基本形態が出来るとする學說に、私は賛成しない。さて何等かの實在的要求があれば、其れに相應しての價値が考へられる。繪畫を描かうと欲する要求があれば、其れに相應して藝術價値がある。同様にして學問の要求に眞理價値、勞働に對して經濟價値が對する。すべての要求に就て此の事が言ひ得られる。要求は實在的に主張せらる可きで無い。其の要求が追究す可き目的としての價値に向つて主張せらる可きだ。併し二者の要求は、二者の個性的能力の限定に隨ひ、よし其の目的としての價値は同一なるにせよ、此の價値追求の系列に於ける深度と及び其の實現の個性を異らしめる。今若し二者が一の要求を共通ならしめ、其處に理想社會を建設するとすれば、此の要求の目的と爲す可き價値に對し、二者は互に自らの能力に妥當なる個性と深度とを以て、其の價値實現の一系列へ參畫す可きである。今繪畫を描かうと欲する要求が甲乙二者に共通であつたと假定する。然らば理想社會としては、甲は甲の個性を可及的に發揮し、乙は亦甲の如くにし、其處へ創作せられた二枚の繪畫が、彼等の能力を残りなく發揮したものであつた時に、兩者は全く異なる個性と深度とを持つて居る筈だ。其れと同じ事が、二者のすべての要求に就て言ひ得られる。又同じ理論は組成員の三者、多者に就て適用せられる。其れが社會の多者に適用せられた場合、我々は其處にバアンナル、アナアキイを考へて居た。併し其は既に二者の基本的形態に就ても

考へ得られることだ。

二者に共通の實在的要求、其の要求が目的として追求す可き價値、二者が此の價値を實現することの個性と深度、此の三要素は社會成立の根本要素だ。社會は利害の共通にのみよつて成立すると爲す經驗論的立説には、價値要素を缺くのが缺陷だ。言ふが如くんば、多者が利害を感ずる場合にのみ社會は成立し、主觀的に不利益と感せられた時、其れは解體せられるといふのであるか。併し詳密に考へれば、其のいかなる場合といへども、多者の利害が何等の反撃も無く一致して社會を爲すことは無い。社會の組成は單に主觀的のものでは無く、寧ろ我々が客觀的に組成を強要せられるものだ。コオル等の社會論の缺陷が其處にある。此れに反してヘエゲル學派の社會論は、單に價値的側面のみ高調して、其の價値の實現せられる基體としての個人的要求に、各々異なる自然的制約のある事實を忘れて居る。隨つて何人も全く同じ様式を以て、全社會人を包容する一至上國家の下に無條約的に從屬することゝなつた。換言すれば、我々が社會を組成するの要求を感せず、且つ其の能力を缺いて居る方面に於て、社會の組成を強要せられたのである。我々は此の説にも追隨し難い。此處に社會組成の價値的要素を見逃さない許りで無く、其れによつて系列附けられる組成員の自然的制約を没却しようと思はない。其れは純粹に批判哲學的立場だ。ヘエゲル派と反ヘエゲル派の社會論は、現在に於て、なほ此の正しい歸結に到達して居

ない。

二者が其の自然的要求のまゝを以て結着し得ず、其の二者の目的となつて此等を指導す可き價值によつてのみ妥當的に結着せしめられるとは、社會が一の客觀的根據を有するの意だ。其の價値は二者の自然的立場に對して、一の全體性の立場だ。社會は單に自然的個人の多數性によつて成立しては居ない。多數性は其れを止揚しての全體性の立場が必要だ。全體性に對比して、甲乙二者の自然的要求は其の妥當なる個性と深度とに位置づけられる。此等は批判原理としては嚴密に客觀的に規定せられ得る。主觀的に各個人の態度としては、此の正當なる客觀的規定を發見することが、換言すれば自己の中に「正しき人を正しき地位へ」の規準を發見する事が社會人としての一の義務だ。

自然的要求が一の全體性へ參畫して、其の妥當なる地位を得る事は、即ち彼の人格が自由となり、其の自由の活動によつて社會を創作した事だ。社會創作は人格の自由であり、同時に其上へ課せられた一の義務だ。自然的要求を主張するが、全體性の立場による價值的規制を認めないといふは、不合理である。其は人格自由の眞義を解しない人である。今若し或る人が此の不合理的態度を取らうとすれば、換言すれば、全體性を蹂躪した自然的要求の主張を爲せば、全體性の意欲は一の客觀的規準となつて、彼の要求の上に其の客觀性を強要するであらう。其處に社

會力の強制が起る。強制は内容的には彼の人格の妥當なる活動であるから、然か強制せられることによつて、彼は客觀的に正しい活動を促される理であるけれども、併し其れが一の強制なることは飽くまでも否定せられ得ない。強制はよし其の内容が善事であつても、強制としての惡を償ふ事は出来ない。社會組織にあつて、其れは實に止むを得ない惡だ。たゞ其の惡が幾分でも恕せられる所以は、人間が社會を構成する以上、其の社會の組成員の一として止まる以上、若し其の主張が客觀性を得ない場合に全體性が自らの上に一の強制を加へることを、根本的に各自は容認して居ることである。其れ故に一の強制も、實は強制せられる人格によつて、根本的には強制として受け取られて居ないのだといつてよいだらう。

三 社會聯關の濃淡性

我々は今此處に五六の組成員によつて成立する社會を考へて見よう。其の共通なる自然的要求を某と決定する。

某自然的要求は、實は其の中の三四者によつてのみ共通に持たれ、残る一二者は此れを要求して居なかつたのだとして見る。然る場合には社會は其の三四者によつて組成せられ一二者は、全く其の社會に關係を持たぬ。併し此の一二者が全く其の要求を持たぬといふことを徹分的の言ひ

方で現はし、一二者は無限少の量に於て此の要求を有すると爲してもよい。然らば此の五六者は、全部的に一の社會を創作し、一二者は其の社會に無限少の量に於て關係したといふことが出来る。

自然的要求に就て此のことが言へるのみならず、其等に従屬せしめる全體性の價值的立場は、五六者の全部に關係を有し、一二者は無限少の量に於て此の立場への參畫を要求せられて居るとも言へる、然らば、五六者の組成する社會では、各自の能力に隨つて、其の價値への參畫の重要さは、最大より無限少まで、一の系列を爲して全く秩序立てられる筈だ。デモクラシーとは、社會の組成員が單に量の一として計算せられることであつてはならぬ。理想的に言へば、彼等は社會組成の重要さを互に異らしめて、立體的に、不平等的に配列せられなければならない。平等は此くしてあらゆる場合に不平等の平等である。其れだからマルクスは言つた。平等の權利とは、其の内容からいへば不平等の權利だ、然らざる平等の權利は、一のブルジョアの制限を持つて居る。我々は彼の卓見に服しなければならぬ。

社會に複雑なる濃淡があると今私が言つたら、或る人は其の表現を奇怪事だと評するかも知れない。そしてかうした考へ方は、忌む可き貴族主義、專制主義の萌芽だとして咎め立てするでもあらう。併し此く評する人が若しマルキシストであつたとすれば、彼は社會主義を知つても共產主義を解しない人だ。そしてマルクス自身が排斥した一のブルジョアの制限に固執する人だ。私

は此の點では寧ろ正しいマルキシストである。社會に一の濃淡あるは、現に事實的に然るのみならず、又理想的に然かある可きだ。我々は此れを主張するに何の躊躇をも爲す可きでは無い。

一の社會に於て、其の社會の價値に對し最大の重要さを有するものは、其の社會の進展に對して、事實的に最大の發言權を有し、且つ理想的にも然かある可きだらう。社會人の注意は最も多く此の人の行動の上に注がれる。此れに反して其の價値に對し無限少の參畫をしか爲さないもの、爲し得ないものは、社會の進展に對し無限少の發言權をしか有せず、且つ社會人の注意は彼の上に無限少にしか集らない。

此れに對比して、我々が一の社會を組成する場合には、自己との社會的聯關を感ずることの最も濃い部分と最も淡い部分とが社會中にはある。第一に、其の社會に對して最大の發言權を有する部分及び其れに隣れるものは、社會の進展其のものに直接の關係があるから、我々は此れに對し甚だ濃い聯關を感ずるだらう。次に全社會に取つては其れほど大きな發言權を有しないでも、其の參畫の個性と深度との點に於て自己と相隣りするものも亦同様の資格を持つ。最後に、地理的に自己に相隣りするものは、其の參畫の個性と深度とに關係無く、亦同様に強い聯關を感せしめられる。そして此等の聯關の濃淡の順序は、單に一義的には定められないことだ。併し兎に角我々の社會が右の如き濃淡を持つて社會聯關性を意識せしめられ、自己は其の濃の焦點に位

するとすれば、自己の意識し得る社會は濃より淡に向ひ、終に其の極限に達する。此の聯關性を意識し得ない範圍にまで社會を擴大せよと命せられても、其れは出來得ないことであるし、又其れは必ずしも常に必要なことでは無い。況んや此の極限の以外へまでの社會的義務を個人に強要するが如きは甚だしい害悪だ。社會は此の如き空なる擴大によつては毫末も進歩せしめられないのだ。

我々は此れまで或る特定の社會の形態を解剖して來たのだ。其の社會の基礎には或る特定の自然的要求があつた。此の前提は忘れられてならない。我々には其の如き自然的要求は此の外に幾つでも數へられる。随つて前述の理論は、此等の要求の一個毎に成立する。其處には無數に多くの社會が成立する筈だ。そして此等の社會が其れ々々に濃淡を以て結着するのみならず。自己は亦其れ々々の社會へ濃淡を以て聯關を感ずる筈だ。人間の社會は多元的だ。複合的だ。

四 聯合體と共同社會

社會は歴史の中に現はれる一の現實態だ。文化的現實態だ。凡そ社會改造論が、單に人間性情の解剖や理想の概念的演繹やを試みたにしても、其れが現實態としての社會構造を豫定し此れを含むものでなければ、何の意義を持ち得よう。世の哲學者と文藝家の社會改造論及びデモクラシ

イ論が、社會運動者によつて一顧もせられないのは此の理由からであり、私も亦多くの場合に寧ろ運動者の立場に同感するものである。

我々は既に社會組成の根本理論を見た。次に其の理論に随つて組成せられる社會聯關には、濃淡性の存するを見た。其等の場合、我々は個人を單に漠然と一個の社會要素とは考へず、個人を解剖して多くの文化的要求と爲し、其の要求を基礎として組成せられる社會を考へたのである。其點で私の考へ方は、ヘエゲルの其れとは根本的に異なるものであつた。我々の身體及び精神を自然的基體としての本能、衝動、欲望の發揮は、なほ一の自然的なる、因果法則的なる主張だ。我々は此れを實在的要求と呼ぶことが出来る。其の要求が此れに相應する價值によつて指導せられ、此の價值の實現を其の要求の目的と爲すに至り、尙ほ價值實現の理想的系列の中に、其の要求が普遍妥當なる地位を占め得たる場合、換言すれば或る一人の或る一要求が、其れに至當なる個性と及び深度の價值實現を爲すを得た場合、一の實在的要求は、進んで一の文化的要求となつたのだ。そして一の自然的要求が一の文化的要求に進んだ時、其處には自づから一つの社會を構成せしめたのだ。此の如き文化的要求の^{フアンクシヨ}一々を我々は機能と呼ぼうと思ふ。

我々の社會構成理論は、徹頭徹尾、機能本位の考へ方だ。社會構成の要素としての個人を、單に綜合的に一人格として取扱ひ、其の何等かの聯關によつて社會が組成せられると見ると、此れ

に反して個人を其の個々の文化的要求、即ち機能に分析し、機能こそは社會の構成動力であると見るとは、あらゆる社會論に於て今後正反對の結論を誘導せしめる、立論の根本的分岐點だ。すべてに機能本位で無く、社會は概念的に考へられた個々人格の全體性的聯關であると考へられ、ば、其處にはたゞヘゲルの國家至上哲學の結實あるのみだ。そして其れには、概念的にして事實の妥當基礎を有しないデモクラシイ論や普通選舉論やが相應する。國家と國家とは永遠に軍備的に對立し、政治はすべての文化價值を實行的に優支配し、國家相互間には、國家聯合が成立し得るのみだ。すべては理論の根本出發點の誤謬に歸せられる。個人を、あらゆる文化的要求の綜合として考へ、其の形而上學的成立としての人格が相互間に關係して、全體性としての社會を成立せしめ得るといふ理論をいかにしても我々は考へ得ない。全體性の概念は其の如き形而上學的本體の上には成立し得ない筈だ。全體性を成立せしめるものは、一價值の立脚地より見られた、一の認識論的世界、即ち各個人の機能でなければならぬ。

各人のすべての文化的要求が、完全に發揮せられた時、換言すれば其れ々々の機能が「正しき人を正しき地位へ」の標準により指導せられ盡した時、其の全體社會は、概念的機械的では無い個性的實在的の聯關を持ち、我々の所謂 Bannonal、Anarkic の社會に化す。此の場合個人は、全然實在的の一點として許され、社會には何等の強制も存在しない。たゞ各人の人格的自

律あるのみだ。社會は複合的だとか多元的だとかは言はれない筈だ。

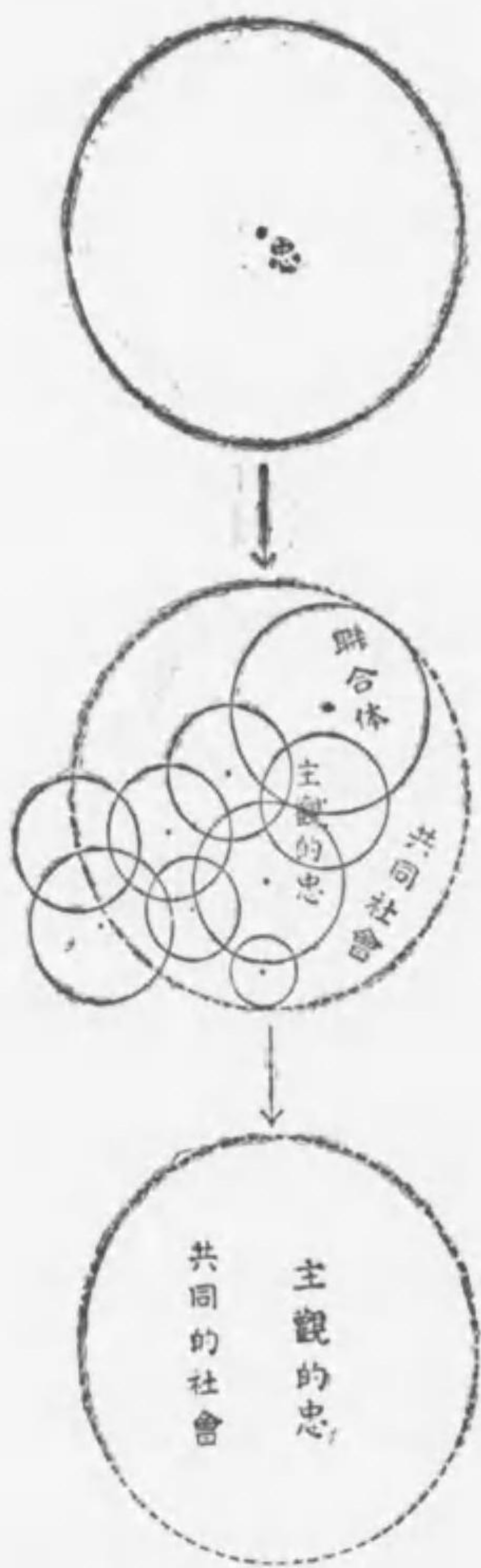
併し此の理想態への徑路としてのあらゆる社會は、此の理想よりの偏倚として、多少の程度の不完全を持つ。其れは已むを得ない偏倚だ。現實的のもの、歴史のもの、此れを離れる事が出来ないのである。然らば此の不完全を含むものとしての歴史的、現實的社會は、いかなる形態を持ち、又持つ可きであるか。我々は其の時、社會は複合的、多元的だといふのだ。所謂共同社會は、小中心的社會の圈狀積層だ。立體疊積だ。一の文化的要求を共通ならしめる社會人が集結して、一の小中心的社會を組成する。各人の自然的要求は、此の社會の全體性の立場によつて指導せられ、其の指導に背反するものは更に其れによつて強制せられる。強制は機械的であり、人格の自律を害するが、しかし此れを免れようと欲すれば、彼は當然其の社會から離籍せられる可きものだ。此くして一の強制中心を豫想しての小社會が、至るところに成立して居る。強制中心は、共同社會全體にたゞ一つしか存在しないと見るのは、甚だしい誤謬だ。社會が複合的、多元的だとは、此の強制の中心を豫想して、然る後に言つて居ることである。

社會の強制に就て、隨つて社會の組成に就て、圖型を描くとすれば、新舊社會觀の相違により次の如き差違が現はれる。ヘゲルの國家至上哲學にあつては、強制はたゞ國家の特權だ。其他いかなる團體が強制力を有し得るにしても、其れはたゞ國家強制力の部分になり得るだけだ。其

れ故に圓周は劃然と國家圈を示し、中心は此れに唯一である。理想態としてのパソナル、アナキイには強制が無く、たゞ人格自律あるのみだから、圓周は各々の個人と同一物になり、圖型の上では、何等の圓周、何等の圓周の中心も描かれては居ない。此れへの経過としての我々の社會では、小圓は無限に數多く、其れ々々が獨立の強制中心を有する。其の小圓は更に合一して、より大なる圓を作つてもよい。併し全部の圓を綜合した共同社會としての圓周なるものは、存在しない。たゞ社會には主觀的に濃淡がある。自己を中心として、此の濃淡により共同社會なる範圍が漠然豫想せられ得るだけだ。其れはパソナル、アナキイにあつても同じ事だ。併し此等の場合の漠然たる圓周は、第一のヘゲルの場合の如くに、客觀的に確然と定められたものでは無く、單に各個人が中心となつて、主觀的に定められただけだ。類比を求めれば雨後の虹の如きものだ。虹の圓周には確然たる邊縁が無い。而して其の圓周の中心は觀者としての自己だ。自己の地位を移せば虹の位置も變つて来る。客觀的に其の地位を一處に定め得る虹なるものは存在しない。共同社會圈が正に其れと同じ性質を持つ。

圖記すれば、第一は舊社會觀に依ての社會構成だ。同時に其れは現に我々を支配する社會構成原理であるが、事實としての社會原理に適合しないから、必ず大いなる不自然を含んで居る。永遠に固執せらる可きものではない。第三は理想態だ。併し其れは形式的理想態であり、人間努

力の究極豫想である。第二は、現實的にも又將來的にも批判に堪へ得る、事實としての、又當爲としての社會形態だ。現に我々は、第一の誤まれる社會原理により支配せられて居るから、第三を努力の究極豫想とし、第二の形態を完全に組成するやう、力めなければならぬことだ。圓周の



半徑は次第に短少となる。即ち第一の最長より、第二の稍短に至り、其

れが無限少に短縮せしめられた時には、圓周は個人と全く一致し、圖記の上には一點として現れるのみだ。圓周の半徑が短少になつて行くとは、結局、各個人の人格が益々自律して行くの意味だ。

一の機能を基礎にし、強制の中心を豫定しての其れ々々の社會を聯合體と呼ぶ。聯合體は機能

の對概念だ。此等の聯合體の多くを包括して、個人が主觀的に意識する社會聯關の濃度により漠然と限定せられる廣い社會範圍を共同社會と呼ぶ。聯合體は客觀的に定まり、其れに強制が豫定せられるけれども、共同社會は主觀的の限定であり、其れに強制が豫定せられて居ない。共同社會は甚だ廣汎なる領域だ。聯合體は小或は大だ。其の範圍は定義的に共同範圍より狭少だけれども、併し必ずしも割合に小範圍だとは定められて居ない。幾つかの聯合體を包容し、更に其の上組成せられる聯合體の如きは、屢々極めて廣汎なる領域を占めて居る。しかもなほ其れは聯合體なのである。例へば萬國赤十字社、基督教青年會といふ如き聯合體は、國家以上の廣汎なる領域であつて、なほ其の聯合體たる本質を害しはしない。

五 複合的社會論への誤解

我々の所謂社會は右に述べた性質を持つ。其れは人間の文化的要求の必然的結實である。然らば等しく人間の文化的要求を基礎と爲す可き社會改造の原理は、當然右の社會構成の根本理論を豫定して、其の後に規定せらるべきだ。機能本位の社會論は、不可疑の現實であり、同時に不可避の當爲である。

機能本位社會論は既に十分にルソオによつて主張せられて居た。然るに多くの論者は所謂聯合

體を地域的に狭少なる範圍と解したゞけで、其の機能本位の見解に立つ事を忘れて居た。即ちルソオは單に政治的單位を小國たらしめようと欲したと解するのである。然るに近代國家の發達は、希臘の如き都市國家を永遠に許し得ず、益々大國的に擴大して來たから、此の近代的傾向に對してルソオの小國本位論は何程の意味をも有し得ないと解するものがあつた。否寧ろ此の考へ方が、現在の學者の間に甚だ力強く信せられて居る。併し此れはルソオを誤解するの甚だしいものだ。聯合體は地域の廣狭によつて定められる概念では無い。

又右の如き社會論が、(私の考へは随分多くの點で所謂複合的社會論を訂正し、ヘゲル派と反ヘゲル派の考へ方を綜合したものと考へて居るのであるが、併し其の重要な點では、依然として複合的社會論に屬する一見解であるだらう。)現在學界に有力となつて來た原因を目して、極端なる中央集權の官僚政治に對する反動だといひ、地方自治政治さへ確立せられれば其れで充たされ得る社會缺陷の暴露だといふものがある。併し此れも亦我々の社會論を理解し得ぬ誤解に過ぎない。所謂地方自治制度は、後に述べる如く、單に地域上の團體分離主義だ。最も重要な本質に於ては、封建制度とすこしも區別せらる可きでは無い。即ち其の地域的分團體主義なる點に於てだ。然るに我々の社會論は機能的分團體主義だ。彼等と我々との間に何の架け橋も無い。

なほ最後に、我々の社會論を直ちにギルド社會主義と同一視するものがある。而してギルド社

會主義によれば、生産者と消費者の立場が、機能的に許され、兩者の聯關によつて社會は成立するといふも、併し人間の社會を組成する立場は、單に此の如き經濟的の二方面によつては限定せられぬと論するのである。私は此の考へ方をも一の誤解であると呼ぶに躊躇しない。其れは單にギルド社會主義を言表するものとしても、正しい理解では無い。何故なれば、今ギルド社會主義者の何人も、社會が單に此の二の經濟的機能によつて組成せられるとは主張して居ないから。其れは主張者の一人により、嘗て取られて居た舊説に過ぎない。彼等も今では甚だ多くの文化的機能を數へ、政治に重要な發言權を有する主機能にあつてすら、生産消費の二機能以外のものを數へて居るのである。我々の見解はなほ此の正しい意味のギルド社會主義とも違つて居る。何故なれば、所謂機能は私にあつては、全體性の立場を含んでの文化的要求であるから。彼等にあつて、個人の要求は多數性の立場をしか取つて居ない。

六 集中主義と地方主義

集中主義(セントリズム)と地方主義(ロカリズム或はレオナリズム)との區別は、元來は地域本位のものであらう。併し現在、正當には我々の機能に對しての區別である可きだ。自己に出發して社會聯關に濃淡を意識するは地方主義だ。他に出發して機能の限度以上に機械的に自己を

制約するは集中主義だ。なほ言へば地方主義は各々の機能に隨つての自律主義であり、集中主義は一の機能を主としての他機能の他律主義だ。我々は當然地方主義を主張し、集中主義を排斥する。

資本家國家のみが集中主義を取つて居るのでは無い。無産者國家も亦同様の集中主義を取り得る。例へば現在の勞農露西亞が其の適例だ。我々は今他の事情を無視して、單に集中主義なる點だけを批評するとすれば、勿論其の價值は地方主義に如かない。(露國の場合に就てはなほ後論に譲る。其れは單に此れだけで批評の出来ない事だ。今は總論的に言つて居る。)分析的に言へば、兩傾向の間に次の如き優劣が成立して居る。

集中主義によつては、第一に、各人の個性的要求は或は無視せられ、或は抑損せられる。蓋し一の文化的要求の立場が、其他すべての立場を抑制するからだ。此れに反して地方主義は何程でも完全に各人の個性的要求を満足せしめる立場だ。其の要求が個性的に他と區別せられるに隨つて、自ら他と別個の聯合體を組織すれば、其の個性はどれ程にでも維持せられ得る。若し此の別個の聯合體を組織しようにも、其の成員となる可き他人格を求めなかつたとすれば、其の時彼は甘んじて、自己と割合に近い關係の要求を容認し、其の聯合體の一成員となるだらう。社會は契約によつて成立せられるとする學説は、歴史的に否定せられたにしても、併し其れは本質的に深

い意味を持つて居る。社會は此くして益々複雑に、立體的に構成せらるゝのだ。

第二に、集中主義にあつては、權力の意識が不自然に高まる。何故なれば、其の社會では、各人は自らの個性的要求の満足せられない聯合體より、自由に離籍する事が出来ぬ。社會といへば、たゞ此の集中の行はれる一聯合體だけだ。其れよりの離籍は自らの死を意味する。強制力の中心としての政治的權力は十分に強大となり、如何なる社會力も其れには對抗出来ぬ。然る時には、權力は屢々不合理なる強制をすらも行ひ、此れに加へる社會の批判は、其の實行を訂正するの實力を持たない。よし其の權力の發動が不合理的で無い場合でも、社會にあつて此の如き唯一強大の權力を意識するは、我々に取り毫も悦ぶ可き事では無い。

第三に、随つて集中主義にあつては英雄主義を養ひ易い。英雄主義は權力と關係を持つ。人によつては、人間性情の中に英雄主義其のものを藏するから、完全に此れを克服するは不可能の事だといふ。又或る人は、英雄主義は社會文化の進歩の一動力であるから、我々はたゞ此れを善用すればよいといふ。私は前者の考へ方を全然的には否定しない。併し人間性情の中の支配心は、其れだけで發達すれば、現在見る如き權力萬能の英雄主義を構成しなかつたと思ふ。其の火炎を煽つたものは、正に制度としての集中主義だ。權力者となれば、經濟的に有利だらうといふのでは無しに、權力者となつて他を支配する事自身を、人間活動の有力なる一動機と爲すに至るのだ。

後者の考へ方は多くの眞理を含んで居ない。其れは私的競争無き社會主義社會を現出せしめられば、競争心無きが故に生産が起らないといふと同様の誤謬だ。彼は現制度によつて癡痺せしめられた心理で、正しい制度の下での心理を測定して居るのだ。地方主義の社會にあつては、權力を悦ぶ心理が発生しようとしても、其の權力は一聯合體内に及ぶだけだから、現社會に於ける如き妖魔的の英雄主義では無い。のみならず他の聯合體の價値を容認せざるを得ないこと、他の聯合體より獨立した批判を受け易いこと、は、英雄主義の發生を大いに妨害するのである。

最後に、集中主義にあつては社會生活内容の推移は容易で無い。即ち其の社會の變化發達は流動的で無く、機械的だ。然るに地方主義にあつては、此の推移は割合に容易であり、且つ批判的、流動的である。社會生活の批判には背景としての政治的實力を要する。其れ無ければ、批判が實行に影響するところは微少である。集中主義にあつては、其の固定した社會生活内容を批判するものは、權力を持たない。且つ其の批判の意義は、全般の社會に徹底し得られないものだ。地方主義は機能本位なるが故に、其の缺陷を除いて居る。其れ故に集中主義的社會の推移は常にキャタストロフィックであり、文化に危険を及ぼす。地方主義的社會の其れは部分的であり、且つ批判的だ。全社會の文化をキャタストロフィックによつて破壊する事は、稀少の場合である。

私は今總論的に二主義の得失を論じた。併し此の問題は、具體的にもつと大きな問題である。